
炎獄の娘

青峰輝楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎獄の娘

【Zコード】

Z0024W

【作者名】

青峰輝楽

【あらすじ】

守護の炎に護られた聖都アルマヴィラで、領主ルーン公爵の娘ユーリンダは、優しく聰明な両親と兄、幼い頃から憧れ続けた許嫁の従兄らに見守られ、平和と愛情に満ちた日々を送っていた。だが、領内で起きた陰惨な事件を機に、一家は思わぬ運命に絡め取られてゆく。

黄金色の髪と瞳を持つ美しい双子の公子と公女、思慮深い黒髪の従兄、黒い瞳の気丈な侍女。國中を揺るがす大きな陰謀の渦に翻弄される四人を軸に描く長編ファンタジー。

自サイトからの転載です。

序（前書き）

時間の無駄にはさせない本格派ファンタジー、を目指しています。
読んで下さい。

序

その細い身体に伝わるのは、ただ軋む馬車の鈍い振動ばかり。私はどこへ向かうのだろう…どこへ、連れてゆかれるのか。光は、みえない。

厚いヴェールに隠された若い娘の貌は無残に焼け爛れ、癒着した眼瞼に閉ざされたひとみは、どんな光景をとらえることも、最早あり得ない。

恐怖の為に色彩を失つた、かつて美しかつた、いまは老婆のような髪をきつく結いつめて、固くそのくちびるを閉ざしたまま、娘は座つていた。

大量の煙を吸い込んだ為、声を出そうとすれば、灼けつくような苦痛が訪れ、その上、聞き取るのがひどく困難な割れた声が微かに絞り出されるだけ。

姉が、そつとその細い手を傍らから握つてくれた。
「もうすぐ到着致しますよ、ユーリンダさま」
微かにヴェールを揺らし、了解の意を伝える。

「……少し、風を入れたらどうかしら、リディアア？」
同乗している侍女長の声がした。

握つた手が離れた。馬車の窓が開く音がする。
窓から新しい風がひとすじ吹きこみ、それにのつて、馬車に併走している騎士の声が流れ込んできた。

「開門を願いたい！ こちらの馬車は、アルマ、ヴィラより御祝賀の使者、アトラウス・エル・ガレリア・ルーン伯爵夫人、ユーリンダ・エル・ガレリア・ルーンさまの乗車である！」

ここに、幸福な家族の肖像があつた。

家族は4人。

黄金の髪と瞳を持つその家族のひとびとは、可笑しいくらいに互いによく似通っていた。

山間の穏やかな都市、しかし、領内の金鉱からの富と、光神ルルアの大神殿への絶えぬ参拝客とによって、豊かに栄える地方、アルマヴィラ領主アルフォンス・ルーンと、その妃カレリンド、二人は同年の36歳。

夫妻は実際の年齢よりもかなり若々しく、特にカレリンドは、17年前に双子を出産した後、結局子供を身にもらなかつたこともあって、まだ若い娘と言っても通りそうな艶やかさで、絶世のと賞されるその美貌に、気さくで柔らかな笑みを絶やさず、崇拜する夫を見上げていた。

聖炎の神子と呼ばれ、民と都を守護する魔力を持った美しい妻を、激しい恋に落ちた18年前と何ら変わらぬ愛情を持つて見つめるアルフォンスは、人を惹きつけてやまぬ明るい眼差しを持つた凜々しい青年貴族だつた。黒髪黒目の人々が大多数を占めるこの地方で、統治者一族の証である同じ瞳と髪の黄金色のせいもあり、従妹である妻と、兄妹のようにも見えた。

そして、当年17歳の公子と公女。両親の美点を余すところなく受け継いでいるようなこの双生児は、どちらも中性的なところはあるでないにも関わらず、成長した兄妹としては珍しいくらいに、鏡に映したように似ていた。

世嗣のファルシスは、剣、とくに細剣の名手として知られる父に対し、そのどちらかといえば細身の身体に似合わぬ大剣を、自らの一部のように操る名剣士であつた。幼い頃から、次代の領主として恥じぬだけの教育を施され、また大貴族らしからぬ自由な気風の父

の理念をよく受け継ぎ、若年ながらもその統治者としての資質を評価され始めていた。但し、母方の血に濃い魔力のほうは、まるでと言つてよいほど持ち合わせていなかつた。そして、その性格に関しては、どちらかといえば生真面目で実直な両親や妹に比べ、調子がよく、気何んに見え、それでいて本心を窺わせぬようなどころがあつた。

妹姫のコーリンダは、両親と兄、周囲のひとびとすべてに愛されて育つた少女だつた。疑つことも憎むことも学ばず、他者の幸福を我が事のようにひろにこび、悲しい話を聞けばその感じやすい大きな瞳から大粒の涙を溢れさせた。類をみないほどの素直なこころの持主…それは、悪く言えども、単純、ということでもあつた。その情の深さは、時として、彼女に比べ余りにも恵まれない者にとり、無神経と感じられる場合があつたのだ。だが、余りの邪氣のなさに、本心から彼女を悪く思うことは、多くの者にとって不可能だつた。

年頃の貴族の娘、そして母親譲りと評判の美少女ともなれば、普通ならば他都の多くの貴族の若者からの求婚が絶えない事であつたろう。しかし、コーリンダには既に定められた許婚があつた。父の弟の息子アトラウス。従兄にあたるこの青年との婚約は、政治的なものではなく、熱烈な恋愛によるものだつた。こどもの頃、初めて会つたその日から、コーリンダは、物静かな深い闇色のひとみの従兄に憧れてやまなかつたのだ。

その日の午後、珍しく、多忙な父親と息子がどちらも揃つて、母娘とお茶の時間が持つ事が出来たので、カレーリンダ妃は良い機会と思い、コーリンダ付きの侍女リディアを呼び寄せた。

このリディアは、子供の頃から館に奉公に上がり、幼いうちから、控えめながら機転が利き、芯が強く忠誠も篤い事、また、双子の公子公主と同年という事もあって、一家の寵愛を受け、特にコーリンダとは、姉妹同然の絆があると言つて過言ではなかつた。

ぐるぐるとよく動く大きな黒い瞳と絶えることのない笑顔、女主人に劣らずほつそりした身体を持つた健康な17歳のこの娘は、コーリンダに比べるには平凡であるとしても、なかなかに美しく魅力的であつた。

白壁に東方シルクウツドから贈られた色鮮やかなタペストリーが飾られ、床には色鮮やかな込み入つた柄のカーペットが敷き詰められた明るい室内に、ござつぱりした紺のお仕着せを着たりディアが遠慮がちに入ると、カレーリンダ妃は、穏やかな口調で主に夫と息子に向かつて言つた。

「わたくしも昨日聞いたばかりですが、リディアに良いご縁があつて、再来月に嫁ぐ事になつたそうですの」

「ほう、それは良かつた事だね。リディアもそんな歳になつたのかね」

朗らかに公爵が言つた。

「だつてお父様、リディアは私と同じ歳ですもの」

既に話を知つていてるコーリンダが、やや意味ありげに答えた。意味ありげ、というのは、翌年には彼女自身が、許嫁のアトラウスとの挙式を控えた身である事を含んでいるのだった。

「そうだつたね。おめでとう、リディア」

気さくな領主の言葉に、リディアは深々と頭を垂れた。

「勿体ないお言葉……ありがとうございます」

顔を上げながら、彼女はちらりと領主の息子の方を窺つた。

ファルシスは、関心なさそうに茶を啜っていた。幼い頃は、妹と共に遊び戯れた間柄でも、今や数多の美姫の間でももてはやされる身、一介の侍女の縁談などには、何の感慨も持ちよがない様子であつた。

「ね、リディア、素敵なひとなのでしょうね？」

既に何度も繰り返した問いを、コーリンダは発した。

「とんでもございません……。田舎で商いをしているしがない中年男でございます」

これまた、何度も答えている台詞をリディアは口にした。

まさしく、その通りなのである。よくある話だが、田舎に住む彼女の親が主に金銭面で何かと世話になり、娘を後妻に欲しいという話を断りきれなかつた、というだけのことである。

リディアは、婚約者とまだ一度しか会つた事がない。勿論、嬉しい筈もなかつた。

公爵夫妻に相談すれば、何とかなつたかも知れない。しかし、彼女の気質がそれを拒んだ。

世間知らずの公女は、結婚とは皆祝福に包まれた素晴らしいものだと信じているので、様々な脳天氣な質問を向けてくるが、そうして彼女の性質を知り尽くしているリディアは、不快に思う事もなく、にこやかに応じていた。

その時、公爵の甥にしてユーリングダの許嫁であるアトラウスが館を訪れたという知らせが入つた。

許嫁に夢中である公女は、もう侍女の縁談など忘れたかのように、そわそわし始めた。

騎士団の行事の件でファルシスに用があるというアトラウスを、

客間に通すよう執事に命じ、自身は別の会議に出席する為、公爵は立ち上がった。

「リディア、あなたは下がつて良いわよ」

妃の言葉に、失礼致しますと一礼して退室しようとする侍女の傍らを、ファルシスが通りつとした。

「ああ、リディア」

ふと思いつたように公子は言った。

「おめでとう。幸せにね」

「ありがとうございます、若様」

リディアは深々と頭を下げた。

階段を下りてゆく兄の後を、コーリンダが嬉々として追つた。訪れた許嫁に挨拶する為だが、とにかく、愛しいアトラウスの顔を見られると思つただけでも、天にも昇る心地なのである。客間の扉が開くと、アトラウスは椅子から立ち上がつた。

「わざわざ済まないね、アトラ」

にこやかにファルシスが従兄に声をかけると、アトラウスは柔軟な笑みを見せて一礼した。

「ここにちは、アトラ」

「やあ、コーリイ。ご機嫌は麗しいかな？」

アトラウスは進み出て、はにかんだ様子の許嫁の手に軽く口づけした。

アルマヴィラ領主アルフォンス・ルーンの弟、カルシス・ルーンの世嗣アトラウス。

彼の幼少期は、暗く複雑なものだった。

領主の一族、ルーン公爵家と、神子の一族、ヴィーン家は、元々、この黒髪黒目の民族が住む地方に突然変異で現れた、黄金の髪と瞳を持つ双子の神子の末裔と言われ、血の濃い者は皆、黄金の髪と瞳を持って生まれるのが通常である。

だが、前領主の次男カルシスと、神子カレリングダの従妹ファリア夫妻の長子アトラウスは、血が濃いにも関わらず、一般人と同じ、黒髪黒目の中子として生を受けた。

兄に比べ、極端に貴族としての器量が劣ると陰口を叩かれるカルシスは、妻の不貞を疑い、特に調べもせず、疑いをすぐに確信に変えた。

身の潔白を訴える妻と赤子を塔の一室に、後に子供は引き離して陽の差さぬ地下室に軟禁し、世間には、母子は病で伏せつているとし、そのまま5年が過ぎた。

そしてある日、叔父の館を訪れた幼いコーリングダが、兄と共に地下に迷い込み、幽閉された従兄に出会った。

せめてもの情けと玩具だけは溢れるほどに与えられた、虚ろな瞳の少年と手を繋いで、双子が客間に戻った時、カルシスは狼狽し、息子を殴りつけ、地下室の部屋に連れ戻した。

その話を侍女から聞いたカルシスの妻は、遂に決断をした。

禁じられた呪法……命と引き替えに、我が身の潔白を証明する呪法。

自らの心臓の血を用いた渾身の術によって、アトラウスは正真正銘の公弟夫妻の息子と証明された。

そこで初めて、カルシスは系図を細かく調べ、稀な例では、血の濃い領主一族にも、黒髪黒目の中子が生まれ得る事を知った。

その後のカルシスは、アトラウスを世嗣と認め、表に出し、重んじた。

後妻に迎えた隣領主の娘が、女の子を出産した後、病に倒れ臥せりがちとなり、男子の出産が見込めなくなつた事も関係していたかもしだれない。

コーリングダは、従兄に初めて会つた時、まだ4歳だったにも関わらず、その心をすっかり奪われていた。

長じてもその気持ちは変わらず、また、アトラウスの方でも、「

今の自分がるのは、ユーリンダが自分を見つけてくれたからだ」と言い続けた事もあって、アトラウス17歳、ユーリンダ16歳の年、二人の婚約は成立した。

その翌日の昼下がり。

ユーリンダ公女の私室からは、初冬の訪れに相応しからぬ、華やかな娘たちの笑い声が、幾度となくこぼれていた。

腰まで届く豊かな黄金の髪を緩やかに縄のリボンで束ね、華美ではないが惜しみなくレースを使つたゆつたりとした薄桃色のドレスを纏つた17歳の姫の、その煌く黄金の瞳には、人生のうちで最も輝かしい季節を迎えた乙女だけに許される、無邪氣で傲慢な歓びが満たされていた。

「ねえリディア、このブローチはどうかしらね？あの青いサテンのドレスに合つと思つ？」

「そうですねえ……あれもよくお似合いではありますけど、やっぱり青より、あの、先週ステイラから届いた白はいかがでしょう？」「うーん、でも、なんだかあれは少し太つて見えないかしら？腰のあのリボンがちょっと太すぎる気がするし……」

女主人のその返答に、侍女は声をたてて笑つた。

「まあ、姫さま！姫さまが太つてますって？！そんな事をいつたい誰が思うでしょう？まともに目が見えていれば誰だって、姫さまみたいな華奢ながたが他にいる訳ないとしか思いませんよ」

「そうかしら……でも、アトラは痩せた女性が好きだつて、前にフルガ言つたもの……。少しでも、細く見えるほうが……」

「姫さまがこれ以上細くなつたら、女性というより白樺の樹みたいに見えてしますよ。そんな事で最近、あまり召しあがらないんですか？いくらお輿入れ前とはいえ、お父様に知れたらこつて叱られますよ」

つけつけと侍女は言つた。ユーリンダは小さく肩をおとして溜息をついた。

「そうね、リディア……その通りかもしれないわね……」

その細い指の間に、銀の台座に美しいサファイアの埋め込まれた大きなブローチを無造作に弄びながら、コーリンダはやや落ちつかなげにリディアの視線を避けて、ソファの上に広げられた数着のドレスに目をおとした。

今、二人は、翌々週にコーリンダが、領内の都市ラーランドに住まう母方の一族、ヴィーン家の長老を訪問する為の衣装を選んでいるところだった。

この訪問は、いよいよ四ヶ月後の吉日に、正式に彼女の婚礼が定まった事を報告、招待する為のものであり、新郎となるアトラウスも同行する予定になっていた。勿論一人きりで行く訳ではないのだが、両親や兄と離れて遠出をするのは彼女にとって殆ど初めてである事、そして、愛するひとと一人で何かをする初めての機会である事が、彼女の心をひびく浮き立たせていた。

リディアにしてみれば、幼い頃から知り尽くした従兄妹同士の婚姻であるのだし、今更着飾つたところで大した違いはないのではないかという気もするのだが、恋に溺れている幸せな乙女にそんな思いが通じる訳もない。午前中からずっと、真剣な目つきであれやこれやと気に入りのドレスやアクセサリーを次々と引っ張り出してくるコーリンダにひそかに微苦笑しつつも、リディア自身も、次第に我がことのように昂揚した気分になってくるから不思議なものである。

しかし、ふと氣づくと、コーリンダは少し意氣消沈した様子を見せ、黙りこんでしまっている。瘦せ過ぎだと言わんばかりの自分の言葉が彼女を傷つけてしまったのかと、リディアはいささか慌てた。

「姫さま、どうなさいました？」

「リディア、……あのね……」

コーリンダは視線をおとしたまま、やつと聞こえたくらの小さな声を出す。

「あの……」こんなこと言つていいのかしら？あの……ね……」「なんでしょう？」

コーリンダの滑らかな頬が、微かに赤く、震えている。あまり見たことのない彼女の様子に、リティアも戸惑いながらそっと側に寄つた。

「どうなさつたんですか、コーリンダさま？」

「あのね……ああ、こんなはしたないことを言つて、呆れないで頂戴ね。こんなこと聞けるのはあなただけなんだから。ね、いつもこんなこと考へてる訳じゃないのよ？」

「？」

「リティア、あなた、その、くちづけって、したことある？」「……は？」

暫しのいたたまれない沈黙が訪れた。

「いや！もう、リティアのばか！」

呆れたように見返したりティアの視線に耐えきれず、自分から言い出しておきながら、コーリンダは真っ赤になつて侍女の肩を何度も叩く。興奮のために、その黄金の瞳からは涙までつたつていて。その様子を見て初めてリティアは我に返り、我慢できなくなつて弾けたように笑い出した。

「姫さまったら…何を言ひ出されるかと思つたら……」「いや！　いや！　もう、今のはなしよー忘れて頂戴！」

「姫さまも、そんなこと考へるんですねえ……」「いやーっ！…」

「いつたいどうしてまた急にそんなことを？」

「だつて……この間あなた達の休憩室の前を通つたら、リリーが大きな声で話してたわ。そのう、今時、愛し合つふたりは手を握つたり、だ……抱きしめたり、そういうふうにするのが当たり前なんですか？私は、そういうことはみんな、結婚してからなのだと思つていたんだけど……アトラが、一人で庭園を歩いていてもそんな風にしないのは、もしかして、私に女性としての魅力が足りない

からじやないかと……なんだか心配になつて……」

観念したように、コーリンダは俯いたままで声を押し出すよつて元ひつた。

今時も何もないんじやないかと、リティアはまた吹き出しあつてなつたが、至極真剣な姫君の様子に、なんとか笑いを収め、どう答えたものか思案を巡らせた。

「まあ、姫さま、それは、高貴な方々は、私どもと回じゆづな訳にはいかないでしょ?」

「そうなの?」

「そうですよ。アトラウスさまはきっと、姫さまがあまりに純粹でいらっしゃるから、遠慮なさつていてるんでしょ? 立派な貴公子はそんな軽々しいことはなさらないんですよ、きっと。……まあ、例外なかたもおられるようですが?」

例外、とは誰のことを指すのか、一人にひとつては言わずもがななのである。

コーリンダの兄ファルシスは、数多の年頃の良家の子女にもてはやされる身、そして、女性からその気を匂わせれば、必ずしも紳士として終始振る舞う訳ではない、といつのが、彼に対していつも囁かれる評判である。

但し、相手は、遊び慣れ、洗練された女性ばかりで、未だ真剣な交際といつものはないようで、彼に傷つけられたり恨んだりしていれる女性の話は、聞かれない。

「そうかしら?」

少しほつとしたよつてコーリンダは顔を上げた。

「そうですよ。姫さまみたいな美しいかたが魅力がないなんて、そんばかなことでお悩みになるなんて、誰も思いつきませんよ。ああ、私が痩せすぎの話をしたからですよね。今よりもっとお痩せになつたら、の話です。もう少し何でも召し上がるないと、お身体を壊してしまうのでは、と心配していたものだから、余計なことを申し上げてしまいました。申し訳ありません」

「そんな、そんなことはいいのよ。ただ、リディアに聞けば、何が普通なのか判るかと思つて……」

「でも、私もそんな経験はないですよ、残念ながら」

「……ほんと?」

コーリンダはおずおずとリディアの顔を覗き込む。リディアは苦笑しながら言ひ。

「年中姫さまのお側にいるのに、僅かな間にそんなことができるほど私は器用じゃないんです。それに、今では許婚もいる身ですし」

「あら、だつて彼とは……?」

尋ねかけて、コーリンダはこれ以上突っ込んで聞くのははしたないかと思い、口をつぐんだ。

リディアは、何も言えなかつた。

婚約者は、親に一度引き合わされたのみ、の間柄である。年齢もかけ離れたこの婚約に、コーリンダの思つよつた甘い雰囲気が存在する筈もなかつた。

だが、それを言えば、彼女の夢を壊す事になつてしまつ。

この姫君の純粋さを、ひたすら愛しているリディアである。それを少しでも傷つけるような事は、絶対出来なかつた。

「まあ姫さま、私どもにはこれからいくらも時間がありますし、姫さまとアトラウス様だつてそうじやないですか。これから、結婚されて、甘い新婚の時期を過ごされるんですよ。そして、可愛いお子様がたくさん、お生まれになる事でしょう。その時が楽しみです」

そんな風にリディアは言つた。

そうね、と公女は答え、侍女の言う未来に想像を巡らし、心を浮き立たせた。自然に笑みがこぼれてくる。

そしてまた、二人の会話は、ドレス選びへと戻つていった。

翌日の朝、実家から手紙が届き、リディアは、コーリンダ公女に十日間の休暇を願い出た。

再来月に控えたさやかな挙式の前に、この地方の風習として、婚約した一人が、生まれた街の地方の神殿に詣でる必要がある。これは、婚儀と同等の意味を持つ。その為の帰省が必要だつたのだ。

暖かい昼の日差しに包まれた白壁のテラスで、公女は僅かに瞳を翳らせた。

「まあリディア、十日もいらないなんて寂しいわ」

「申し訳ありません、姫様」

「ううん、いいんだけど……。お嫁入りの後は、今までみたいに一緒にいられないのだから、慣れないといけないわね。でも、ラーランドへ発つ前には、戻ってきて頂戴ね」

コーリンダはやや曇った笑顔を侍女に向けた。

リディアは、結婚後も、月に数日、色々な手伝いの為という事で傍仕えを続ける事になつてはいたが、田舎の金貸しの後妻となる彼女にとつては必要な事ではなく、コーリンダの柔らかな懇願によるものだつた。

幼い頃から常に共にあつたリディアは、今後も当然変わらず傍にいるものと思つていたコーリンダは、この結婚話に、一抹の寂しさを覚えない訳ではなかつた。

しかし、芯から善良で夢見がちな性質を持つ公女は、だからといって全く悪くとらえる事はなく、心から侍女の縁談を祝福し、その幸せを願つてもいた。

「そうだわ、リディア。ソルト殿に会つなら、私のあの銀水晶のネックレスをつけていつたらどうかしら。とても似合つと思うもの。

ソルト殿もきっと喜ぶわ」

ソルトとは、リディアの許嫁である。

「え……あの、姫様の16のお誕生日に、両親から贈られたネックレスですか？ そんな、とてもお借りできません！」

リディアは仰天して断つた。

この地方では、女性の16の誕生日は、婚姻可能な大人として認められる、特別な祝いがあり、銀水晶の装飾品は、娘の末永い幸福を願つて両親から贈られる、意味の深いものなのである。

「いいのよ。あの銀水晶は、私の髪より、あなたの黒髪に映えるんだし。あなたは、私の姉妹同然ですもの。お父様やお母様も、別にお怒りにならないと思うわ

「そんな……」

リディアは躊躇した。

公女のこうした性格は熟知していた筈だが、もともと、婚約者に会うのに飾り立てて行きたい気持ちなど欠片もない彼女にとつては、ただ困惑するばかりの申し出だった。

しかし、ゴーリングダは、リディアの婚約者に対する気持ちは、自分が自分の婚約者に抱く気持ちと等価であると信じてやまない。寝所に入つていくと、自ら宝石箱の中から、大切なネックレスを取りだし、侍女の手に握らせた。

「拳式の時も身につけてほしいけど、ずっと持つているのも気に入るのだから、一旦返してくれてもいいから、とにかくつけてちょうだいね」

そこまで言われると断りきれず、困惑しつつもリディアは、公女の気持ちをありがたく頂く事にした。他所の公爵家の姫君方には、考えられない事だろう、と心中思いながら。

この公女の、あどけなさ、面白さを、リディアは愛していた。

公女の気持ちを傷つける事など、彼女には、考えられなかつたのだ。

その夜。

帰省の支度をしていたリディアは、エプロンのポケットに入れていた筈のものがない事に気づいた。

許嫁からの手紙。今回の、神殿への参詣についての連絡だった。必要な事のみを羅列した素つ気ないもの。

リディアと婚約者は、熱烈な恋愛関係にあると信じてやまないコーリンダあたりが見たら、言葉を失うような代物だ。

しかし、身の回りの世話をし、子供を産む後妻となるなら誰でもよいと考えている、初老の許嫁の胸のうちをよく理解しているリディアにとつては、特に驚くにあたらない内容と言えた。

ともかく、手紙がないと、身支度や色々な面で支障が出る。

リディアは己の行動を思い返し、夕刻にダイニングルームの片づけを手伝った際に落とした、という可能性が強い事に思い至った。侍女頭に断つた上で、静かにダイニングルームの扉を開けて入り、かがんで掃除をした場所に灯火を向けた。

……なかつた。

困ったなと溜息をつきながら身を起こした時、驚きの余り飛び上がりそうになつた。

「これを探しているの？」

暗がりの中で、突然声がしたからだ。からうじて悲鳴を飲み込んだ。

「……若様」

星明かりの下のテラスから、ゆっくりとファルシス公子が入ってきた。右手に、リディアの搜し物を掲げている。

「は、はい。申し訳ありません。ありがとうございます」

まだ心臓を激しく打ちながらも、深々と礼をし、手紙を受け取ろうとした。

だが、ファルシスは手紙を持った手を、すっと引いた。

「大事な物？」

「？　は、はい。」

「ふん……こんな冷たい手紙を寄越す許嫁が大事なのか」
その言葉に、リディアの頬が僅かに紅潮する。

一介の使用人に過ぎないリディアには、落とした手紙を公子に読まれたからと言つて、声を大にして抗議する権利はない。
だが、私的な手紙を読まれた上、そんな突き放した物言いをされて、嬉しい筈もなかつた。

何か言いたかつたが、適切な言葉が思いつかず、ファルシスの目を見ずにただ、

「はい……」

と呟いた。

「結婚が嬉しい？」

「……はい」

「許嫁は優しい？」

「……はい」

「そうか。よかつたね」

ファルシスは緩慢な動作で手紙をリディアの手に押しつけた。

公子の手は温かかった。

「若様」

思わず何も考えずに口走り、慌てて次の言葉を探した。

「ありがとうございます」

ファルシスの右手とリディアの右手は、許嫁の手紙を挟み、指先が触れ合つた。

……この温もり。

リディアはふと、想いが胸に込み上げた。

この温もりを指先にしまつておけば、嫁ぎ先でいかなる辛い事があつても耐えられる。

手紙を落としてよかつた。こんな温もりを得られた。リディアは幸福な気持ちだった。

身分の上下も僅かに意識するのみ、子犬のようにじやれていた時代から、リディアはファルシスを慕っていた。

生涯、想うのはファルシスただ一人。

幼い頃から、なぜかそう判っていたのだ。

長じるにつれて本心を仮面で隠し、如才なく穏やかに他人と接し、高貴な姫君と華やかな浮き名も流す公子に、何も言える筈もなかつたけれど。

触れ合つた掌を、ファルシスはぎゅっと握った。

「若様？」

ファルシスはいきなりリディアを抱き寄せた。触れ合つた掌が熱くなつた。

「リディア。嫁入りなんか、するなよ。」

ぐぐもつた声でファルシスは言った。黄金色の髪がふわりと揺れ、抱き寄せられたりディアの頬にかかりた。

「傍にいて欲しい……。本心で口をきかなくなつてから、何年にもなるけど、ぼくはずつと、お前を見ていた。何の飾りもない頃から知つている、お前の優しさや曇りのないところに、ぼくはずつと救われていた……」

「ファルさま……？」

幼い頃の呼び名を口にし、驚きながらもリディアはそつと左手をファルシスの背に回した。これくらい……これくらいなら、許されるか、と思いながら。

信じられないくらいの幸福だった。今すぐ、死にたいくらい。

両の瞳から涙が溢れた。

「ファルさま……」

きつく抱かれ、初めての口吻を交わした。

永遠に思える一瞬の後、リディアは自分から身を離した。

「リディア？」

「若様。リティアは幸せな気持ちで嫁げます。若様もどうか、素敵
な姫君を娶られて下さいませね」

微笑んで、そう言えた。

嘘ではなかつた。

「でも、リティア、お前は許嫁の事を好きな訳じゃ……」

「リティアはもう、一生分の幸せを得ています。これより後は、若
様の幸せがリティアの幸せでござります」

そう言つと、身を翻し、扉へ向かつた。一歩踏み出す毎に、涙が
一粒ずつ、じぼれ落ちたけれど。

それでも、リティアは、かつて味わつた事のない幸福感を覚えて
いたのだった。

翌朝、リディアは公妃と公女に出立の挨拶をしに、一人のいる談話室を訪れた。

公妃が言った。

「気をつけて行くのですよ。最近、領内で、若い娘が行方不明になる事件が頻発しているそうなのです。殿が、昨夜そう言ってそなたの身を案じておられました」

「恐れ入ります。わたくしなどの為に、殿様からそのような勿体ないお言葉を頂くとは……。気をつけて、必ず姫様のお傍に戻つて参ります」

深々とリディアは一礼した。一介の侍女に過ぎないこの身を、大貴族である領主が案じてくれるとは、本当に有り難い事である。ルーン公の人柄は、下のひとつに対する、こういった細やかな様々な配慮に、いつも表れていた。

リディアは、公に命を救われた経験さえあるのだ。

まだ幼い子供だった頃、領内の別荘に一家と共に滞在していた時。公子・公女と、近隣の子供数人で、館の裏の林で遊んでいて、危ないで行つてはいけないと言われていた小川に、行つてみようと言ふ公子と公女を止める事ができず、一緒に行つてしまつた。

そんな事は全く初めての経験だったコーリンダは、川の事など何ひとつわからずにはしゃいでいて、深みにはまりかけた。

ファルシスはたまたまその場におらず、他の子供たちはおろおろするばかり、リディアは頭が真っ白になりながらも、何とか公女を救い出しだが、代わりに自分が溺れてしまった。

意識が遠のき、そしてやがて戻ってきた。

彼女の視界にまず入ったのは、領主の心配顔。

「大丈夫かい、リディア？」

公爵の黄金色の髪と衣服は、水に濡れていた。

後から知つたのだが、子供の一人が館に大人を呼びに行き、たまたま庭園に出ていたルーン公がまず駆けつけ、川に入つて、溺れたリディアをひきあげたのだ。

理性が戻つてくるにつれ、束の間赤みのさしかけたリディアの頬は、また蒼白になつた。

リディアは飛び起き、平伏した。

「も、申し訳ありません！ わたし……姫様を危ないところへ……。姫様は？！ ご無事でしょうか？！」

「コーリイは大丈夫、ぴんぴんしているよ。水も殆ど飲んでない」にこやかに公爵は言つたが、リディアはがくがくと震えていた。公女を危険な目に遭わせてしまつた。きつい罰か、さもなければ追い出されてしまうかも知れない。子供ながら、そんな風に考えを巡らせたのだ。

アルフォンス・ルーンは、目の前の、濡れそぼつた小さな子供の頭の中の恐怖にすぐに気づいたようだつた。

そして、かれは言った。

「娘の命を救つてくれてありがとう、リディア。お前は、泳いだ事もないのに、勇敢に飛び込んでくれたそうじやないか。本当に感謝しているよ。」「……殿さま」

「うちの一人が駄々をこねた事くらいわかっているよ。目を離していたファルシスも本当にいけない。お前は、何も心配しなくていいんだよ」

リディアは、遂に、泣き出してしまつた。公爵は優しく頭を撫でてくれ、誰かに、この子に着替えを、と言つているのが聞こえた。大貴族である自分の衣服はまだ濡れているのに、幼子の風邪の心配をしてくれたのだ。

幼いリディアはその時、はつきりと『口に、一家への生涯の絶対の忠誠を誓つたのだった。

「若い娘が行方不明、つてどういう事ですか、お母様？」

ヨーリンダの声で、リディアは瞬時の回想から離れた。

「ええ……領内、特にこの都の付近で、未婚の娘がもう十人以上も、姿を消していいるらしいのよ」

その事件の事は、リディアも噂話で聞いていた。だが、深窓の姫君は初耳のようで、恐ろしそうに身体を震わせた。

「まあ……恐ろしいわ。彼女たちが無事でいるといいわね。リディア、帰るのは少し先に延ばせないの？」

「ヨーリイ、我が儘を言つてはいけませんよ。リディアの大重要な用事なのだから。人気のないような場所に行かなければ大丈夫ですよ。ちょうど同じ街に用事のある者がいて、一緒に馬車で行つてもらつて事にしているし」

公妃のこの配慮については、前日に聞かされており、リディアはこれについても深く感謝していた。

「本当にありがとうございます。姫さま、心配なさらなくてもリディアは大丈夫です。すぐに帰つて参りますよ」

支度を整え、馬車寄せの所まで歩いて行く時、どこからヨーリンダの声がした。

一階のテラスから、リディアに向かつて手を振つている。

離れた所から大きな声で呼ぶなんて、はしたない行為だが、ヨーリンダは、普段はとてもしとやかな姫君なのに、親しい人の事を思うと、突然驚くような自然体を見せる時がある。

リディアは微笑み、行つて参ります、と叫んだ。

雲ひとつない、青い空だつた。

気持ちの良い風が吹いていた。

澄んだ日差しを受けて、ヨーリンダの金色の髪が、美しく輝いていた。

浮き立つような明るい空。

住み慣れた館と愛おしい姫君。

それは、何度も見た光景で、これからも、何度も同じする筈だつた。
そうではないなんて、この時、リティアは思いもしなかったのだ
つた。

アルマヴィラ領主ルーン公妃カレリングダは、領主夫人である事と
会わせてもうひとつ、重要な役割を担つてゐる。

『聖炎の神子』。

夫であるアルフォンスが、経済・治安・外交・軍事など諸々の面
で都と領地を統べているのに對し、彼女は、このアルマヴィラ地方、
特にアルマヴィラ都の魔力による守護、という責任を負つてゐる。

アルマヴィラ都の外壁を、ぐるりと取り巻く黄金の炎……悪しき
者以外には全く熱を感じさせない『聖炎』を、魔力に依つて維持し、
地方を護つてゐるのだ。

遡る事約300年前、この地方は、まだ金鉱も発見されておらず、
小さな貧しい村がいくつか、点在しているような処だつた。

この地方の人間は皆、黒髪に黒い瞳を持つ。これは、この地方で
信仰されていた地の神ノノスの祝福を受けたあかしとされた。

王都エルスタックやその他開かれた都市では、主神ルルアが常に
第一の信仰の対象であつたが、田舎では、ルルアより格の低い神が
崇められる事も多い時代だつたのだ。

それ故に、黒髪黒目以外の人間は『地を踏む資格なき者』とされ、
他の地方の、他の身体的特徴を持つ人々とは殆ど交わらうともしな
い、頑なな閉鎖的な地域となつていた。

そんな時代のそんな村の長の妻が、双子の赤子を産んだ。
瓜二つのその姉妹は、祝福の色である黒を持たず、黄金色の髪と
瞳を持つていた。

呪われた子……父親である村長はそう受け止め、我が子を殺す為
の刃を向けた。

だが、その刃を、出産を終えたばかりの妻が身体で受けた。

本来情の深い男であつた村長は、妻の死を悼み、妻の為に、その呪われた娘達のいのちをとるのを止めた。

但し、家の奥深くの一室に閉じこめ、決して出てはならぬ、と言つた。

呪われた身で、決して地を踏んではならぬ、と。

娘達が15になつた年、地方に、かつてなかつた恐ろしい疫病が蔓延した。その村でも、多くの者が床に伏し、苦しみ、死んだ。誰かが言い出した。この災いは、あの呪われた娘達せいだと。その声は、すぐに村の声となつた。

虐げられながらも、誰をも恨まず真っ直ぐな心を持つて育つた娘達を、その頃には慈しむ気持ちも持ち合わせていた村長だつたが、そうなつてしまつては、長の責務を果たさない訳にはいかない。

娘達は、処刑の為に、表に引き出された。

生まれて初めて踏む土。その上に、呪われた血を流し、村人は狭窄な神に慈悲を請う心算だつた。

父親の剣が、躊躇いを含みながらも姉娘の胸元に振り下ろされた時。

黄金色の炎が、娘の身体を包み、その炎に触れた剣は忽ち灰となつたのだ。

手と手を繋いだ双子の姉妹を、光り輝く黄金の炎が包むと、二人は静かに歩き出した。

地を踏む毎に、二人の足裏がじりじりと焦げるのは、小神の意趣返しに他ならなかつたが、姉妹は苦痛の貌も見せずにそのまま、村の外壁に沿つて歩き続けた。

壁の上に、不思議な黄金の炎が燃え始め、その炎がぐるりと村を囲んだ時、娘たちの足は焼け爛れていなければ、村のすべての病人は癒されたのだった。

そして、空から、誰も見た事のないような美しい光が射し、その光は娘たちの足を元通りにした。

その時、全ての者は、娘たちが、ノノスより遙か上位の神、太陽

神ルルアの遣わした者である事を悟つたのだった。

その後、二人は他の村の全ての病人をも癒し、姉娘のアルマはやがて村長を継ぎ、更にはその地方を統べる者となつた。

妹のエルマは、新たに建立されたルルアの神殿の長となつた。アルマの子孫はやがて代々、後にアルマヴィラと呼ばれる事となつたこの地方の領主となり、エルマの子孫は代々、アルマヴィラ都を囲む聖なる黄金の炎を灯し、アルマヴィラ地方の繁栄と平和を護る聖炎の神子を引き継いできた。

……アルマヴィラ地方に語り継がれる伝説である。

伝説の全てが真実か、それともかなりの誇張が含まれているのは不明だが、少なくとも、現アルマヴィラ領主の一族であるルーン家がアルマの子孫、ルルア神殿の長や聖炎の神子を継いでいたヴィーン家がエルマの子孫である事は、系図がしかと証明している。

ヴィーン家の長男は、代タルルア神殿の長となり、生涯独身である。

家長は、聖炎の神子を継ぐ女子であり、近い血筋の家から婿をとり、血を薄める事のないよう、家を存続させてきた。

そんな中で、聖炎の神子であるカレリングダが、領主、当時は領主の嫡男だったアルフォンスの妻となつたのは、両家の歴史の中で、未だかつて起こっていない出来事であった。

無論、両家の年長の者たちは皆反対した。

しかし、カレリングダを生涯唯一人の相手と確信したアルフォンスは、己の力で彼女を得る事に成功した。

アルフォンスは、王都に出向き、3年に一度の御前試合で見事に勝ち抜いたのだ。

国一番の勇者と謳われる、金獅子騎士団の若き長ウルミス・ヴァルディンをも倒した若き貴族に、国王はどんな望みをも叶えようと、アルフォンスはカレリングダとの婚姻の許可を願つた。

器の広さを示しながらも、内心ではどんな富を願われるかと警戒していた王にとって、これほど易い願いはない。

かくして、王の許しを得たアルフォンスを止め得る者はなく、聖炎の神子は領主夫人となつた。

但し、ヴィーン家の年寄りたちは、条件をつけた。

二人の間に生まれる次代聖炎の神子となる女子は、ヴィーン家の男子と縁づけ、ヴィーン家に返す事。

いかに優れた若者であつても、アルフォンスもカレーリンダも、まだ十代で、己の恋に心を奪われた男女であつた。

女子も何人か生まれれば、ひとりくらいはヴィーン家の者と相思相愛になる事もあるう、と楽天的に考え、二人はその条件を飲んだ。

しかし、男女の双子を産んだ後、どうやら妃はこれ以上子供を授かる事の出来ない身体になつたらしく悟つた時、夫妻は長女ユーリンダの行く末を思つて心を痛めた。

特に、ユーリンダの、従兄アトラウスに対する想いが真剣なものであると知つてからは尚更であつた。

ところが、あえて不謹慎な言い方をするならば、ユーリンダにとつて実に幸いだつた事には、彼女の婿候補であつたヴィーン家の若者五人は、早逝したり、出奔したり、病で子種を失くしたりしきずれも、聖炎の神子の夫となり得なくなつてしまつたのだ。

聖炎の神子をヴィーン家に返す約定は、また次代に先送りされ、ユーリンダは、従兄アトラウスと、晴れて婚約を認められたのであつた。

侍女リディアが、休暇をとつて出立したその夜の事。

珍しくこの日は来客もなく、奥の小広間で久々に家族四人で晚餐の卓を囲んだ。

常になく言葉少なで、俯きがちに何かを考え込んでいる様子の娘に、アルフォンスは食事が済んでから、優しく声をかけた。

「わたしのちび小鳥、何か気になる事でもあるのかい？」

かれは、双子の子供達が幼い頃、よく、ファルシスをちび仔馬、ユーリングダをちび小鳥、と呼んでいた。

14歳で成人となり、息子は騎士となり、娘も婚約が定まつた今では、もう殆どそう呼ぶ事もなくなつていたのだが、ふと懐かしく、アルフォンスはその呼び名を口にしてみたくなつたのだ。

多忙な身のかれに、翌年の一人娘の嫁入りまでに、あと何度、家族四人、水入らずで食事ができるのか、と、ふと、感傷という程のものでもない思いがよぎつたのかも知れない。

「まあお父様、もうわたくし、ちび小鳥ではなくつてよ。ちゃんとした、おとの鳥なのよ」

案の定、可愛らしく唇を尖らせてユーリングダは抗議した。アルフォンスは破顔し、それは失礼、レディ、と言つた。

「父上、この鳥はひとりではいられない寂しがりやなので、側仕えのリディアが実家に帰つた為に、心細くて憂い顔なのでしょう」

ファルシスが言つた。

ユーリングダは、リディアが今日からいな事を、ファルはどうして知つているのかしら、と幾分訝しく思つたが、口には出さず、別な事を言い返した。

「まあ、ファル、私はそんなに子供じゃないわ。リディアはすぐに帰つてくるのだし。私が気になつてるのは、別の事よ。それは……ええと」

ちよつと言い淀んだのは、折角の楽しい雰囲気に水を差す話題ではないかと気遣つたからだつたが、やはり父に尋ねてみたい気持ちが勝つたので、コーリンダは言葉を継いだ。

「お父様。今朝聞いたんですけど、最近、若い女性が行方不明になる事件が続いているんですって? どういう事ですか?」

「ああ……」

アルフォンスは、やや困ったよひ、軽く眉を寄せた。

「きみの耳にも入つたのかい。最近、かなり噂になつてゐるようだからね」

「わたくしが話したんです。コーリイももう子供ではないのですから、世の中で起こつてゐる事は、知つておくべきですわ」
カレーリンダが言つと、彼女の夫は、完全に納得した訳ではない、といふ風に、曖昧に頷いた。

アルフォンス・ルーンは優れた人間だが、娘の教育という面では、かなり甘い所があつた。

息子には、後継者として、自分を超えるような立派な領主、騎士となつて欲しいという願いから、教育や鍛錬の面では、かなり厳しく指導する事も多かつたが、娘に関しては、コーリンダの無垢で純粋な心の美しさに、ややもすると溺愛に近いといえる感覚を持つており、酷い話、恐ろしい話は聞かせたくない、といつ、甘やかしの気持ちがあつたのだ。

「行方不明になつた女性たちはどうなつたのか、わからないんですね? いつたい、誰がどういう目的で、未婚の女性をかどわかしたりするのでしょうか?」

「うーん、色々調べさせてはいるのだけどね、まだわからない事が多いんだよ。本当に、この領内でそんな無法をそう長く許しておくれ訳にはいかないから、必ずこの件は解決させてみせるよ。だから、きみはそんな心配はしなくていいんだよ」

「コーリイ、この件では、アトラもダリウス警備隊長に協力して、色々調べているらしい。そんなに気になるなら、今度彼に尋ねてみ

るといい」

ファルシスの言葉に、ヨーリンダは驚いた。

「まあ、アトラが？ いつたいどうして？」

「彼の乳母の娘……メリッサといったかな、嫁入り間近にして、事件の被害者になっているらしい。それで、空いた時間を使って、自分で動いてみる事にしたそうだよ」

「まあ、そうだったの。私、ちつとも知らなかつたわ」

少しショックを受けたように、ヨーリンダは俯いた。

「ヨーリイ、アトラはきみにそういう話はあまりしないのかい？」

アルフォンスが少し心配げに問い合わせた。

「ええ、そうね……。騎士団でのお話や、叔父様のお話は、あまりしてくれないわ。聞いても私には面白くないだう、と言つて。よくお話してくれるのは、書物の中のお話とか、人から聞いたよその地方のお話とか。それは、とっても楽しいお話なの。私がそういうお話をとても喜ぶから、そういう事件の事とか、楽しくない事は聞かせたくない、と思つているんぢやないかしら」

「そうか、なるほど、そうかも知れないね」

そういう気持ちは自身も持つてゐる公爵は、そうであればいい、と無意識に思いながら頷いた。

ただ、彼は流石に、娘よりはずつと男女の仲についてよく知っていた。婚約を交わした間柄だというのに、現実的な話をせずに、物語ばかり語つてゐるのは少し考え方のものではないかと思つた。

「ヨーリイ、アトラウスは少し変わった青年だからね。ああ、悪い意味ではないよ。でも、ファルシスとは全く違う性質を持つてゐる。剣の腕も馬術も確かだが、あまり武芸は好まないよつだ。でも、穏やかで人当たりがよく、とても頭がいいから、騎士団の中でも、皆から好かれている。豊富な知識を持つてゐるし、きみを喜ばせるおとぎ話もたくさん知つてゐる事だらう。だけど、彼には、何か憂いがあるように私には思われるのだよ。それは、彼の生い立ちに関係しているのかも知れない。きみは彼の妻になるのだから、彼の心を

よく理解して、支えになつてあげなくてはいけないよ

「ええ、わかりましたわ、お父様」

ファルシスは、この会話を聞いて、純粹であるが故に、やや氣の利かないところのある妹に、それができるのだろうかと、少し不安に思った。

彼は妹をとても愛しているし、従兄の事も、少し不可解なところはあるけれど信頼できる人間と認め、かけがえのない友人として好意を持っていたので、二人の婚約をとても喜んでいたのではあるが。

何か言おうとした時、執事が扉を叩いた。

「公爵様。アトラウス様と、ノイリオン・ヴィーン様、それに、ダリウス警備隊長がおみえです。至急な用件との事でございます」

アルフォンスは立ち上がった。

夜分の至急な用件。その顔ぶれ。良い知らせである筈はなかつた。

「ファルシス、きみも同席しなさい」

そう言つと、急ぎ足で室を出て行つた。すぐ後に、ファルシスも続ぐ。

「どうしたのかしら、お母様？」

不安げに、ユーリングダは母親の顔を見た。

カレリンダは、その時何故か、かつてない胸騒ぎをおぼえていた。

神子の感覚が、何か、とても邪悪な、怖ろしい影が近づいてくる感じを捉えた気がした。

だが、心配げな娘に向かつては、整つた細面にその内心は表さず、お父様がちゃんとして下さるから大丈夫ですよ、と微笑みかけるのみであった。

翌朝、まだ薄暗いうちにコーリンダは目覚めた。

昨夜は、父と兄が帰つたら、何事かと尋ねようと思い、かなり遅くまで待つていたのだが、眠気に勝てず眠つてしまつていた。

彼女は、次の間に宿直している侍女の手を煩わせず、一人で着替えを済まし、そっと室を出た。

リディアの代わりに次の間に控えていた侍女は、それに気づきもせずに眠つていた。

まだ館は静まり返つているが、母はこの時間から起きて、早朝の祈りを行つ為に、地下の礼拝堂へ向かう筈だ。

そこをつかまえて、昨夜起こつた出来事について尋ねようと思つた。

母の私室の扉に近づいた時、驚いた事に、男の怒鳴り声が聞こえてきた。

「本当なんですか、それは？！」

兄ファルシスの声だった。

いくら親子とはいえ、成人した息子が、それも早朝に母親の寝所を訪ねるとは尋常ではない。

加えて、この荒げた声。

コーリンダは、兄がそんな声を出すのを聞いた事がなかつた。

不安に心臓を驚づかみにされながら、彼女は扉の近くに寄つた。

母の声はか細く、耳を澄ませても、聞き取れない部分もあつた。

「…………あなたの為なのです、ファル、やがては、…………が最善だつたと…………わかります」

「信じられない、そんな事をするなんて。そんなお方ではないと思っていた！」

「あなたはまだ若く…………判断できない事もあるのです。…………の」と

は、あなたの為、ルーン家の為に……」

「結局、ぼくはまったく信用されてないといつ事だ！　こんな事を、

何も知らされないとは…」

「何とでもお言いなさい。これは、必要な事です」

「こんな卑怯な……！」

兄が、退室しようとする気配があつたので、ユーリングダは慌てて扉を離れ、廊下の角の陰に身を隠した。

足音荒く兄が出てきて、反対の方へ歩いて行つた。

涙が出てきた。

これは、昨日の事件のせいなのだろうか？愛する兄が、愛する母に喰つてかかるなんて、想像した事もなかつた。

いつたい、何が起こっているのか、まったくわからない。

アトラに逢いたい、と痛切に彼女は思った。かれならばきっと、

彼女の不安を癒し、安心できる説明をしてくれるに違いない。

ファルは何か誤解をしているに決まつている。

アトラウス、彼女の騎士が、きっとすべて解決してくれる。そうに決まつている。

朝食には、家族は誰も姿を現さなかった。

父は公邸に泊まり、兄もそうした事になつていていた。そして、母は、朝の祈りを済ませた後、そのまま、公邸にいる夫の元へ向かつたという事だつた。

ユーリンダは、一人で味気ない朝食をつついた後、乳母のマーサと刺繡をしながらも、上の空だつた。

昨夜訪れた面々の事を考えてみた。

ダリウス警備隊長。アルマヴィラ都警備隊の隊長である。50代の武骨な男で、挨拶をする時にも、にこりともしないので、ユーリンダは、苦手な意識を持っている。

しかし、父は彼を、有能な男と言い、評価していた。

彼が緊急に報告に訪れたという事は、アルマヴィラ都の治安に関して何かが起こつたという事と考えられる。

それから、ノイリオン・ヴィーン。これは、ユーリンダの数少ない、嫌いな人物であつた。

齢は40歳。ローン公爵夫妻より年長で、現、ヴィーン家当主である。カレリンダ妃の従兄にある。そして未だ独身で、ユーリンダの求婚者でもあつた。

ノイリオンは元々、カレリンダが未婚の頃、彼女の夫の第一候補だつた。

若い頃から小太りで、のっぺりした顔の小男である彼は、カレリンダに熱烈に惚れ込んでいて、彼女とアルフォンスの婚約が整つた後も、彼女を諦めきれずにつきまとい、ある日一階のバルコニーで彼女に抱きつこうとして、突き飛ばされ、転落した過去を持つ。

幸い大した怪我を負わず、双方の名誉の為にこの事件は闇に葬られ、流石にこれ以降、カレリンダの事は諦めたと思われていたのだ

が、彼の執着はそれでは終わらなかつた。

カレリングダが、娘ユーリングダを産んで程ない頃から、是非にユーリングダを自分の妻に、と請い始めたのである。

元々、聖炎の神子となる夫妻の娘はヴィーン家の者と縁づけるべし、という約定があるのでから、この要求は、まったくおかしなものとは言えなかつたのだが、公爵夫妻は、自分たちより年長のこの男に、大切な一人娘を与える気には全くなれず、困惑しつつも、この要求を退け続けた。

だが、この男は、ユーリングダがアトラウスと婚約し、数多の求婚者がしおしあと去つていった後でも、この婚約は愚かなもので何の役にも立たぬ、ユーリングダはヴィーン家当主の自分の妻になるべき、と方々で言い放ち、公爵夫妻とユーリングダに煙たがられていたのであつた。

このノイリオンが、ダリウスやアトラウスと共に駆けつけた、といふ点が、ユーリングダには解せなかつた。

ノイリオンの弟はルルア大神殿の神官長であり、言うまでもなくヴィーン家は、アルマヴィラ都、アルマヴィラ郡の魔道的守護者として、要である存在であるのだが、ユーリングダは、ノイリオンに対する個人的な嫌悪感が勝つてしまい、どうにもその方面から考えを進める事が困難であつた。

苛々と、進まぬ針をもてあましていた時、執事が扉を叩いた。

「姫様、お客様でござります」

ユーリングダは、待ち焦がれた人が来たかと喜んだ。即ち、昨夜訪れた第三の男、愛しいアトラウスが。

しかし、執事は続けた。

「ティラール・バロック様がおみえです」

ユーリングダは眉根を寄せ、失望の吐息をついた。

ティラールは、ノイリオンと並ぶ嫌いな人物、そして求婚者であ

つた。

隣領主バロック公の四男で、ルルア神殿への巡礼と学問の為、と称して半年前にアルマヴィラ都に現れ、そして、『コーリンダ姫の美貌と才氣の虜になり』、未だに客人として都にとどまっていた。

深い焦茶色の髪と澄んだ緑色の瞳を持つティラールは、ノイリオンとは異なり、かなりの美男子で、都の婦女子の憧れの的となっていた。

だが、いかにも遊び慣れている事は誰の目にも一目瞭然の態でありながら、訪れて三日目にコーリンダに出会ってからは、本人曰く「どのような美姫の甘言も最早苦い、かの姫のつれなきひとことに比べても」という状態で、自他共に認めるコーリンダの虜となり、アトラウスとの婚約が成った後も諦めきれず、日参しているという状態であった。

コーリンダは、多くの令嬢達の憧れの的であるティラールを崇拜者として得ても、嬉しくもなんともなかつた。

彼女は幼い頃から、アトラウスだけを慕つており、他の男性に言い寄られる事の一切が、ただ鬱陶しいとしか感じられなかつたのだ。

アトラウスとの婚約が成り、多くの求婚者は諦めて去つて行つたといふのに、図々しくも、変わらぬ態度で甘い言葉を浴びせかけてくる、この気障な男が、コーリンダは大嫌いだつた。

しかし、彼は、四男とはいえ、アロール・バロック公爵の息子であつた。

このヴェルサリア王国の、王に次ぐ権威を持つ七公爵家、バロック、ローズナー、ウェイヨン、ルーン、ブルーブラン、ラングレイ、グリンサム。

その中でも、筆頭であり、現宰相も務めるバロック公。

彼の息子の求婚を喜んで受け入れない女性、受け入れない事を許される女性など、この世にコーリンダただ一人であろう、と世間で

は噂していた。

やがては、聖炎の神子となり、アルマ、ヴィラを離れて住む事は叶わぬ彼女の為に、囚男である自分はルーン家の養子となつてもよい、とまで言うティラールの願いを却下する事は、流石の娘思いのアルフォンスにも、かなりの困難を強いた。

ティラールとコーリンダの双方の意志とその食い違いは、早くから明らかになつたので、その事もあって、アルフォンスは、急ぎコーリンダとアトラウスの婚約を結ばせた。

だが本来なら、分家の者との婚約など、いくら相思相愛でも、父親の気持ち次第では、成っていても密かに破棄させられても仕方のない程の事なのである。

であるのに、コーリンダは、許嫁がある身だという事を盾に、気分が不良だのと言い訳をつけては、日参するティラールに、せいぜい五日に一度程度しか会わなかつた。

今日は、一日前にティラールとは会話を交わしており、彼女としては、面会を遠慮したい日だった。

しかし、コーリンダは、気を取り直し、応接室に彼を迎えた。

「ゴシップに詳しい彼なら、昨日起きた出来事に関して、何か知っているかも知れないと思ったからであった。

「麗しのコーリンダ姫、今日のドレスも素晴らしい。薄黄色のシルクは貴女の輝く黄金色の髪と瞳を引き立たせる名脇役だ。それに、そのリボンの刺繡もとても可愛らしい」

室に入るなり、ティラールはそんな事を言った。

そういう彼は、鮮やかな青いチュニックに、見事な織りのウールのマントを羽織り、睡眠不足でやややつれたコーリンダと比べ、こちらの方こそ輝くような美男子ぶりであった。

しかし、コーリンダは、彼の外見などにはまるで興味がない。

「ここにちは、ティラール様。お会いできて、嬉しいですわ。今日

は、どのよつなご用でいらして頂けたのでしょうか？」

「とりあえず社交辞令を述べながら、どのように情報を引き出せつか、あれこれと考えた。

「ああ姫、用などと野暮な事を仰るな。麗しの尊顔を拝するだけで、わたしの心はただ歓びに満たされるのですよ」

ティラールとの会話はいつもこんな調子で、内容がない。

コーリンダは苛立ち、単刀直入に尋ねる事にした。

「ティラール様。貴方様は何でもござ存じですから、きっとわたくしの求める問い合わせもござりますの」

「ああ姫、貴女の求めるものなら、なんでも私は捧げましよう」

「昨日、何か都で事件が起こったのでしょうか？ 父も兄も、昨夜出かけたまま戻らず、わたくし、心配でなりませんの」

ティラールはその言葉を聞くと、顔を曇らせた。

「やはり察しておいでなのですね、マイレディ。わたしも、この話を聞いて、貴女がその尊き胸を痛めておいでかと心配しておりました。本当に、怖ろしい事です」

「何があつたんですの？ 早く教えて下さいませ！」

コーリンダは急かした。ティラールがわざと氣をもたせる言い方をしていると思って、彼女は眉をつりあげた。

彼は別にそんなつもりではなかつたのだが、彼女の様子を見て、怒つた顔もまたお美しい、と贅辞を述べようかと思った。が、続く話の悲惨さを考え、軽い台詞はぐつと飲み込んでいた。

「先日から、都の内外で、若い娘が連続して行方不明になるという事件が相次いでいました。その娘たちが見つかったのですよ。全員、死体でね」

「まあ……！」

コーリンダは、悲痛な声をあげた。

「合わせて19人の乙女の遺体が、ある館の地下室で発見されたのです。それから、裏庭からも5人。皆、殺されていたのです。今朝から、もうどこへ行つてもこの噂で持ち切りですよ」

「怖ろしいわ……そんな……」

ユーリンダは青ざめ、身を震わせた。

「ああ姫、人並み外れて纖細な姫のお心には、いさか刺激の強すぎるお話でしたか？　わたしもそれが気がかりでしたが、しかし姫がお知りになりたいとの仰せでしたので。申し訳ありません、どうかお許しを」

言いながら、ちゃつかりとティラールは、動搖しているユーリンダの華奢な手に、そつと自分の手を添えた。

「ティラール様は悪くないわ。わたくしが知りたいと言つたんでもの。……でも、いつたいどうして？　誰がそんな怖ろしい事を？　なんの為に？」

衝撃の冷めやらぬユーリンダは、大嫌いなティラールに手を握られている事にも気づかない。

「それはまだわからないのですよ。そんな、一朝一夕に片づく事件ではありません。これは、単に多くの娘が殺された、という以上の大事件に発展する可能性があるのです」

「……どういう意味？」

「娘の中には、貴族や有力商人の子女も含まれています。一番問題視されているのは、たまたま都を訪れる途中に拉致された、国王の側近リンド伯爵の令嬢です。彼女は、一ヶ月後に婚礼を控え、名付け親であるルルア大神殿の神官の所へ、その報告の為に訪問するところでした。アルマヴィラ都近くの宿場町ジェンドに宿泊し、たまたまその晩、街で祭りがあつたので、侍女と共に出かけ、侍女もろとも攫われ、殺害されたのです」

「まあ、なんてお氣の毒な」

「それから、これはまだ真偽の判らない噂なのですが……娘たちの殺され方は……」

ティラールが、やや声をひそめるように話そうとした時だった。

「わたしの許嫁を、あまり怖がらせないで頂けませんか？」

静かな、だが、怒りを含んだ声が響いた。いつの間にか、戸口のところに、アトラウスが立っている。

「おや、これはこれは、ブラック・ルーンどの」

肩を竦めて、ティラールはユーリンダの手を離した。そこで初めて、ユーリンダは、自分の手がティラールの手の中についた事に気づいた。

彼女は、当惑と怒りとで顔を赤らめた。愛しい人の誤解を招かないかと、咄嗟に不安を抱いたのである。

「違うのよ、アトラ。あの……」

だが、ゆっくりと入ってきたアトラウスは、ユーリンダの言い訳など気にもしていない様子だった。

彼女が、進んで他の男に手を預けたりする筈もない事は解りきつており、咄嗟にそんな心配をする彼女に対し、不信などもとよりなく、ただ可笑しく思えただけである。しかし、笑う気分にはなれなかつた。

「立ち聞きした上に、許しもなくずかずか入つてくるとは、大した礼儀を存じなのだな、ブラック・ルーン」

冷ややかにティラールが言つ。

ブラック・ルーンとは、無論、アトラウスの姿をあげつらつた蔑称である。

面と向かつてそう言う者は流石に少なかつたが、陰でそのように呼ばれる事は、珍しい事ではなかつた。

穏和な性質のアトラウスには、そう敵が多い訳ではない。

が、やはり未だに、彼はルーン家の血をひいていない、と言つ者もいなくはなかつたし、そのように思えば、彼がルーン公の甥として優遇され、おまけに高嶺の花のユーリンダ姫を易々と射止めたともなれば、不満に思うのも当然の人情といえなくもなかつた。

「立ち聞きするつもりはありませんでした。しかし、あなたのすぐ後にここへ着き、執事に次の間に通されたので、待つていたのです。そうすると、あなたの声が大きいもので、話が聞こえてしまい、許

嫁の事が心配になつたのです。」無礼は謝罪します、ティラール卿「

「申し訳ありません、ティラール様。彼が止める間もなく……」

そう言いながら、控えめにアトラウスの傍に、もう一人の男が進み寄つた。

ティラールの従者、ザハドだつた。

真っ黒な髪に青い瞳、浅黒い肌を持った長身の男で、ティラールがどこに行くにも影のように付き従つている。

彼は、アトラウスより前から次の間に控えており、執事は、アトラウスには別の間で待つてもらおうとしたのだが、アトラウスは無理を言つて、彼と同じ室で、二人の話が終わるのを待つていたのだった。

「アトラ……あの、わたし、どうしても気になつて。お父様とフルが……その、帰つてこないものだから」

今朝の、母とファルシスの口論の事は、勿論、この場で言つべきではない。ファルシスは、帰宅していない事になっているのだ。

「心配で……ティラール様に、事件の事を話して頂いていたの。それだけよ」

アトラウスはコーリンダの方を向き、柔らかく微笑んだ。
底知れぬ闇色の瞳が、彼女を見る時いつも、温かく包み込むような優しさを浮かべるようと思え、彼女はそれで安心をする。

「ユーリイ。きみはそんな事は心配しなくていいんだ。そんな事は、ぼくや伯父上やファルに任せておいて。大丈夫、ぼくが、きみに怖い思いはさせないからね」

父アルフォンスがよく言つとのと同じような言葉に、感じていた恐怖が遠のくようだつた。

そうだ、わたしは護られている。怖いことなんかない。アトラやお父様やファルがいるのだから。

「随分、過保護なんだな。姫は君のひとつ年下ただろう? 子供じやあるまいし、未来の聖炎の神子として、色々知つておかなく

てはならないんぢやないのかい？　え、ブラック・ローンビの？」

「わたくしの許婚を、そんな名前で呼ばないで下さいませ！」

きつとなつてヨーリンダが言った。

「おお、怒った顔もお美しい。では、そろそろ私は退散致しましょ
う」

今度は心おきなくティラールはその賛辞を述べ、心残りな様子を見せながらも、従者と共に室を後にしていった。

招かれざる客が辞した後、室には許婚同士の二人が残された。ユーリンダは、この時を待っていた。

色々な不安な事があつた。アトラに聞いて貰いたい。大丈夫だよ、つて言って欲しい。アトラならきっとそう言ってくれる。そして、本当にそうなるに決まっている。

彼女は、今朝立ち聞いた、母とファルシスの口論について話した。

「わたし、怖くて……。ファルがあんな風にお母様に言うなんて。わたし、最初は、昨日起こつた何かと、ファルが怒っている事が、関係あるかと思ったの。でも、違うわね？ そんな、女人人が殺された事件で、ファルがお母様に怒つたりする訳がないもの。いつたいどうしたのかしら……？ それにしても、怖ろしいわ。ねえ、どうしてそんな怖ろしい罪が行われたのかしら？」

そんな風に言っている間に、彼女は、行方不明になつた者のうちに、アトラウスの乳母の娘が含まれていたという事を思い出した。

「そういえば、アトラ、えっと、メリッサ……だったかしら？ あなたの乳母やの娘さんは……？」

「彼女も遺体で見つかったよ」

アトラウスは静かに言った。

「まあ……」

ぽろぽろと大粒の涙が、ユーリンダの頬を流れ落ちた。彼女は思わず、愛しい許婚の頬を撫でた。

「ひどいわ……アトラ、悲しいわ、あんまり……ひどいわ……」

きらきらと輝く黄金の髪が、ユーリンダの慟哭と共に揺れ、開け放された窓から降り注ぐ昼の明るい日差しを浴びてなお一層の光を放つた。

涙に濡れた睫毛も潤んだ瞳も、殆ど全ての男性の気持ちを揺るが

し、触れてその涙を拭つてみたい気持ちを起こさせる力を持つていた。

だが、アトラウスは、泣きじゃくる彼女に、不用意に触れる事はしなかつた。脆い硝子細工のような美しさを損なう事を、極端に恐れるかのように。

ただかれは言った。

「ユーリイ……泣かないで」

かれはそつと、泣いている許婚の肩に触れた。

「君が泣くと、僕はどうしていいかわからない。……メリッサは、可哀想な事だつた。でも、僕はきっと犯人を捕らえて、彼女が微笑んでルルアの元へ行けるようにしたい。だから、君は泣かないで、僕を力づけて欲しいんだ」

ユーリンダは、顔を上げた。

緩やかな、くせのある長い黒髪をひとつに束ねた、常に穏やかで理知的な、彼女の想いびとの顔が、間近にあつた。

かれの力になりたい、と彼女は思った。

顔と顔が思いがけず、ごく近くにあつたので、ユーリンダは思わず胸が高鳴り、瞳を閉じようか迷つた。

だが、瞳を閉じればいかにもその事を待つてているかのように見えるし、それはもしかして、近しい者の死に胸を痛めている彼の顰蹙を買うかも知れない。

そんな風に戸惑っているユーリンダの顔を、近くからじつとアトラウスは見つめていたが、やがていつものように柔らかく微笑み、おでこに「ぐぐぐ」と軽くキスをした。

「すまない。君は本当に、何も心配しないで。ただ君が笑っていてくれるだけで、僕の力になるんだからね」

アトラウスはそんな事を言い、帰つて行つた。

ファルシスと母の口論について、彼は何の意見も言わなかつたし、その事について安心させてくれるような事が何もなかつたのに、彼

女が気づいたのは、彼がいなくなつて暫く経つてからの事であった。

「コーリンダのもとを辞し、ティラール・バロックは、従者ザハドと、宿舎に向かつて馬を進めていた。

「先程は、本当に申し訳ありませんでした」

ザハドは改めて謝罪した。コーリンダとの対話の途中に、アトラウスの闖入を許してしまった事についてである。

「もう氣にするな。あの場で、あの男相手に、暴力を振るう訳にもいかなかつた事くらい解つていい。悪いのはあいつなんだ」

「……ありがとうございます」

ザハドは、馬上のまま深々と頭を下げた。先に行くティラールは、彼を見てはいなかつたが。

「あいつと、何か話したのか？」

「いえ。ご挨拶を致したのみでございます」

このザハドは、ヴェルサリア王国ではなく、南方のサウシカという島国の生まれである。

ヴェルサリアには、公然とした奴隸制度はないのだが、サウシカやその更に南の大陸では、王の支配下にない小部族が多数に分かれ、敵対状態にあり、他部族に敗北した者たちは、裕福な王族や貴族、商人などに、奴隸として売られるという事が、日常的に行われている。

ザハドは、ある部族の長の息子だったが、かれが物心つくかつかないかのうちに一族は滅亡し、肉親とも引き離され、酷薄な貿易商に安く買い取られ、働かされていた。

ある時、ヴェルサリア南方の、ヴェイヨン公領ランポートという大きな港町に、船に乗り込み連れて来られ、ザハドはバロック公とその息子に、彼にとつては運命を搖るがす出会いをした。

バロック公の長女がヴェイヨン公の長男に嫁ぎ、その婚礼の為に

この地方に赴いていたアロール・バロック公は、伴つてきた息子たちに請われて、船を見る為に港にやって来ていた。

そこで荷下ろしをしていたザハド少年は、たまたま腕を怪我しており、それでも重い荷を運ばされて、つい、荷を取り落としてしまつた。

その荷が壊れ物だつた為、彼の主人は激怒し、幼い少年である彼を、棒でひどく叩きのめしていた。

その光景が、馬車で通りかかったバロック公一行の目にとまつたのだ。

ティラールの兄たちは、奴隸の子どもの運命に同情するなどという発想すらなく、面白がつて成り行きを見ていたが、丁度ザハドと同じ年頃だったティラールが父親にせがんだ。

「父上、あの子がかわいそうです。助けてやつてください」

アロール・バロックは、特に慈悲深いという評判を得た事はない男だったが、ヴェイヨン家との縁組みに満足して機嫌がよかつたので、四男の願いを気まぐれに聞いてやつた。

幾ばくかの金銭を支払い、ザハド少年はバロック公の一行に加えられた。

その後、ティラールは、彼にとつて未知の世界である南国の様々な不思議な話をするザハドをとても気に入り、バロック公も、この子供がとても利口で従順な性質を持つている事を知つたので、ティラールの小姓とする事に反対しなかつた。

それから十数年、ザハドは常に、ティラールの傍近くを離れた事はなかつたのだった。

「若、少々不躾な質問をさせて頂いてよろしいでしょうか？」

「うん？ 何でも言つがいい」

ザハドは、浅黒く、引き締まつた顔に、極めて真面目な表情を貼り付けたままで言った。

「若は一体、いつまで、あの姫君のところへ通われるおつもりなの

ですか？ 大変失礼ながら、かの姫君は、許婚との仲もすこぶる良く、通いつめたところで、何か変わりのある可能性は極めて低いようと思われるのですが

「お前……随分と言つてくれるなあ……」

あまりのはつきりした言われよう、さすがのティラールも、少し答えに詰まつた。だが、彼は、こうしたザハドの、言いにくい事も躊躇わざず言つてくるところを、忠誠のあかしと考えていたので、怒る事はなかつた。

「俺はコーリンダ姫に惚れ込んでいるんだ。あのよつな女性は他に存在しない。非の打ち所のない美しさと、稀に見る純粋さ。それに、次期聖炎の神子となる身に与えられた知性」

これまで見た限り、コーリンダは確かに美しく純粋な乙女だが、長所として敢えて挙げる程の知性があるのでどうか、とザハドは思つたが、流石にそれは言わなかつた。

「あのよつな希有な女性が、あんな陰気なつまらぬ男のものになるなど間違つてゐる。その過ちを正す為に、俺は日々、通つてゐるのだよ。まだ、姫は人妻となつた訳でもない。とやかく言われる筋合いはないよ」

「いえ。言わせて頂きます」

ザハドの答えは、ティラールの予期していなかつたものだつた。

「なに……」

「若是、バロック公の令息でいらっしゃるのですよ。お立場をお考えになつて下さい。なびかぬ女子のもとに、未練がましく通うのは、お家の名に關わる事です」

「ザハド……！」

温厚なティラールも、これには怒りを露わにし、馬をとめて従者のほうへ振り向いた。

しかし、ザハドは怯まなかつた。

「若。これは、わたしの意見ではありません。お父上が、そつお考えなのです」

「なに……？」

「今朝、公爵様から書簡が届きました。お父上は、若こ、身分をわきまえ、バロック公の息子にふさわしい振る舞いをなさる事をお望みです」

「ザハド、おまえ、俺のことを父上に報告したのか」

「わたしが言わなくとも、世間の噂になつていてるんですよ。お父上はお怒りです。何の為にここに来たのか、どうか思い出してやれ」

ティラールは舌打しじ、馬を返した。

「……まったく、面白くない。折角、今日は姫と話が出来たというのに、おまえのせいで気分が台無しだ」

「申し訳ございません」

全く済まなせやうには見えない様子で、従者は、謝った。

その翌日。

ルーン家の馬車に乗つたリディアは、無事に実家へ帰つていた。

リディアの実家アークレー家は、ローラムという大きな街で、数代前から、街で一番大きな宿屋を営んでいる。

裕福な家庭だつたが、数年前、リディアの父親が親しい者に多額の金を融資し、その男がそのまま姿を消してしまつた事から身代が傾いた。

そこに手を差し延べたのが、同じ街の金貸しジエイク・ソルトである。

破格の金利で融通してもらい、窮地を救われたアークレー家としては、やもめの中年男に年頃の娘を縁づける話を、断る事は出来なかつた。

リディアには双子の姉もいたのだが、一うちには既に嫁ぎ先の決まつた身であつたので、次女のリディアがこの貧乏籠をひかされる事となつた。

一日ゆつくりと実家で過ごして、この日、婚約者に会いに行く予定だつた。

リディアが居間に降りてくると、姉のエリアが言った。

「アルマヴィラ都のあたりは物騒な事件が起こつてゐるそうね」

「そうね。でも、攫われた娘たちは、残念な形とはいえ見つかつたんだし、きっと犯人もすぐに捕まるんじゃないから」

「リディア。おまえは、嫁いだらもうお勤めは辞めた方がいい」

母親の言葉にリディアは驚いた。

「何を言つて、母さん。今後の事は、もうソルトさんも了承済みの事じやない。私は、姫さまから離れてしまうなんて出来ないわ」

「それは確かに、ルーン家と繋がりがあるのは、大層ありがたい事ではあるだろうけどね……でもね、心配なんだよ」

母親は、大仰な身振りで肩をすくめ、声をひそめた。

「だつて、噂では、言われてるじゃないか。あの事件は、『聖女の血筋』のお方が……」

「まあ、やめてよ！」

リディアはかんかんに怒つて言った。

その噂は、リディアも先刻、噂好きな召使から聞かされたばかりだった。

多数の乙女が惨殺された事件。その犠牲者の乙女たちが見つかって館は、貸家であり、数ヶ月前にその館を借りに来た者は、目深にフードを被っていたものの、その裾から黄金色の髪の毛が洩れていだと、館の持ち主が証言している、と。

「リディア、私はおまえの身を案じて言つてるんだよ。もしもその噂が本当なら、そんな怖ろしい犯人が、お屋敷に出入りしているかもしれないじゃないか」

「噂なんかあてにならないわよ。それに、万一本当だとしても、『聖女の血筋』のあかしの、黄金色の髪を持つ人なんて、ルーン家、ヴィーン家合わせて何十人もいるんだから。お屋敷にいつも出入りなさる方とも限らないわ」

「そうかも知れないけどね、何とも言えないだろ？ソルトさんと結婚すれば、おまえはお勤めなんかしなくとも、楽に暮らしていいんだから。おまえの事を案じて言つてるんだ。言つ事を聞きなさい」

断定的な口調に、リディアはかつとなつた。

「案じて、ですつて？母さんは私の事なんてどうでもいいくせに。私の事を思うなら、なんでこんな無理矢理な縁組みを……」

「リディア！」

リディアの頬が鳴つた。

幼い頃から離れて暮らし、母親からぶたれた経験はあまりない。リディアは痛む頬を押さえ、涙ぐんだ。

普段、心の奥底に押し込めていた感情が、つい、噴き出してしまつた。その事が、悔しかつた。

今更、親と本音で話すつもりなど、なかつたのに。

親が自分を愛していないとは思つていい。ただ、親は、自分より一層、アーヴレー家、というもの愛しているだけなのだ。

それを悪いとも思わない。仕方がないとしか思わない。

なのに、勤めをやめると言われて、思いがけなく、思いを押さえつけていた糸が切れてしまつた。

溢れる涙を見られないよう、俯いたまま、リディアは席を立ち、部屋を出た。

姉が後を追おうとしたようだが、母親が「放つておきなさい!」
と言つていた。

リディアはそのまま裏口から外へ飛び出した。

逃げ出せる訳もなかつたが、できるものならそうしたい、と思つた。

(ファルさま、ファルさま……！…)

声には、出せない。でも、心の中でなら、どんなに叫んでも、自由だ。

一日前の夜には、彼の想いを知つて、あんなに幸福だったのに、今は、何もかもが皮肉で苦しく思える。

結婚なんかしたくない。たとえ結ばれなくても、他の男なんか知らない今まで、ファルシスの近くにいたかった。

そして、それすら叶わないなら、せめてただ、ほんのたまにでもいいから、彼をかいま見る事のできる位置にいたい。

彼女は、裏路地に駆け込み、しゃがみこんで泣いた。

(私は…ひどい女だわ)

あんなにコーリンダに頼りにされているのに、自分が彼女の傍に

いたいのは、ファルシスとの繋がりを断ちたくないからなのかもしない。
そんな自分の醜さに気づいてしまったのだ。

(ちがう、ちがう。私は、姫さまを何より大事に思っているわ。姫さまの為なら、いつでも命を投げ出せる。離れるなんて考えられない……！)

乱れる思いにとらわれていたリディアは、他人の気配に全く気づかなかつた。

気づいたのは、薬品を含ませた布で口と鼻を塞がれた時。

未婚の娘が次々と攫われ、惨殺される、その事件の犯人は、まだ野放しになつているのだと、遠くなる意識のなかで、リディアは思い出していた。

アルフォンスがようやく私邸に姿を見せたのは、その一日後の夜のことだった。

その間、コーリンダは、ただ悶々としながら過ごしていた。

兄も帰つてこないし、母は忙しそうに出かけては、夜遅く帰宅し、夜食を部屋に運ばせて、そのまま休んでしまう。

あまりに疲れた様子なので、休息を妨げて話を聞く事は憚られた。

アトラウスも、多忙で顔を出せない、と従者を介して伝言を送つてきたのみ。

そしてティラールは、何故かあの後、姿を見せない。

父親が何日も私邸に帰らないのは、珍しい事ではない。

代々の領主の中でも、特に民に慕われるアルフォンスは、それだけに、自らの務めに決して手を抜く事がない。

都内での様々な案件、地方からの陳情、その他多くの仕事を、常に先頭に立つて骨身を惜しまずこなしてきた。

更には、毎年数回は王都に赴き、大貴族として、宫廷での重要な行事などへの務めも欠かさなかった。

しかし、この三日間の不在は、常になくコーリンダを心細くさせた。

こんな時なのに、普段、片時も傍を離れないリティアまでもがいないのでだ。

コーリンダは、我が儘と知りながらも不安に耐えられず、用が済んだら急いで戻ってきてほしい、という手紙を、今朝、リティアに宛てて館の者に託したのだった。

父親の帰宅を知り、コーリンダは急いで、父のいる小広間へ降り

て行つた。

両親が、揃つて卓の傍の椅子に腰を下ろし、深刻な表情で何かを話し合つていた。

「お帰りなさいませ、お父様」

彼女が挨拶すると、アルフォンスは疲れた笑顔を愛娘に向かた。
「まだ起きていたのかい。もう休みなさい」

すると、母が言った。

「いいえ、コーリンダ。あなたにも聞いてもらいたいわ。ここにお座りなさい」

また何も教えてもらえないのかと落胆しかけたコーリンダは、ほつとして、母の示す椅子に腰掛けた。

アルフォンスは不服そうに妻を見た。

「この話はまだコーリイには……」

「何をおっしゃっているの、あなた」

カレリンダは夫の目を見て、きつぱりと答えた。

「コーリンダはもう子供ではありません。そして、アトラウスの許婚で、聖炎の神子の後継者です。この大事を知らずに過ごせる筈もありません」

「それは……」

アルフォンスは返答に詰まり、妻の言葉の正当性を認めない訳にはいかなかつた。

「そうだね、カリイ。きみの言つ通りだ。それに、他人から無責任な噂を聞くより、きちんと話をした方がいいのだろうな」

コーリンダの心臓は、早鐘のように拍ち始めた。大事、とはなんだろうか？ それに、何故いま、アトラの名前が出るのだろう？ 不安に耐えかねたコーリンダは、思わず話を逸らせようとしてしまつた。

「お父様、ファルは？ なぜ帰つてこないの？」

「ああ、うん。ファルは騎士団の宿舎に寝泊まりしているようだ。かれも忙しいんだよ。別に、それは心配しなくてもいい」

そう言いながら、アルフォンスはちらりと妻の顔を見やつた。
父は、母と兄の口論を知っているのだろうか？何か聞いているらしい様子だ。

兄は、父のことも、母に対してしたように責めたのだろうか？

そして、そのことは、大事、と関係があるのだろうか？

「ユーリンダ。今、都で騒がれている事件のことは知っているね？若い娘が大勢殺害された」

「ええ、お父様」

「では、その殺され方や、犯人について、噂されている事は？何か聞いている？」

「いいえ……それは、知らないわ。誰も何も教えてくれないもの」両親は、顔を見合せた。

「ユーリンダ……きみには衝撃が過ぎる話かもしれないが……娘たちは、皆、心臓を抉られ、その血を絞りとられていたんだ。ノイリオンは、これは呪術が行われたに違いないと言っている」

「……呪術……ですって……？」

あまりに凄惨な話に、ユーリンダは意識を失いそうな気がしたが、かろうじて己を保つ事が出来た。

「いつたい、何の為の呪術なの？ そんなに多くの、血を……」

「それはまだわからない。ただ……わかっている事がふたつあるんだ。娘たちの死体が見つかった家……それは貸家で、それを借りに来た者は、黄金色の髪をしていたと証言されている事。そして、もうひとつは……」

苦悶に満ちた表情で、アルフォンスは思わず掌を広げ、自らの顔を覆つた。

「死体が発見された夜から、カルシスが行方不明だという事だ」

「それはいつたい……どういうことなの」

恐ろしさに青ざめ、かすれた声でユーリンダは尋ねた。

「叔父様が行方不明……？ それは……それはもしかして、叔父様

もその犯人に殺……つ、連れ去られた、という事なの？　ああ、そ
んな……かわいそうなアトラ！」

「……いや、そうじゃないんだ、コーリィ……」

愛娘の鈍さに、流石のアルフォンスの面にもほんの一瞬だけ、苛
立ちが浮かんだが、すぐにそれは流れ去り、かれは苦笑した。

「いや、そういう可能性もない訳じゃないな。いつそ、そうだった
ら良いのだが」

「まあ、お父様、なんて事を！」

父親の言葉が信じられない、という表情のコーリンダに、今度は
母親が諫めるように言った。

「お父様のおっしゃる事が正しいのです。もし、単にカルシスが何
者かに連れ去られた、というだけの事なら、冷たいようだけど、彼
一人の身のことです。でも、そうではない場合、ことは、ルーン家
の名誉に関わります。ルーン家の根幹を揺さぶるようなことかも知
れないのです」

コーリンダは戸惑った。

「どういう意味……」

「コーリンダ。いまや、國中の噂となっているこの事件の犯人が、
カルシスかも知れない、と言っているんだ」

これ以上曖昧な言い方をして伝わらないと知つて、アルフォン
スは、苦い口調ではつきりと告げた。

コーリンダは、ぽかんとした。

「叔父様が……犯人？　人殺し？　まあ、なんて事を……そんな事
が、ある訳ないわ。アトラのお父様が……」

「わたしもそう思いたい。だが、今のところ、そうでないという証
拠はどこにもない。カルシスは、あの、死体が見つかった日、わた
しとファルに知らせがくるより前に、ダリウスとアトラウスと共に
その場に行つたらしい。そして、そこから帰宅した後から行方が知
れない。誰かに連れ去られたというような痕跡はまったくない。孰

事が言うには、彼は、大慌てで旅支度を整え、一番脚の速い馬に乗つて出て行ったという事だ。それから、忘れてはいけない、死体の見つかった館を借りたのは、聖女の血筋のあかしの、黄金の髪を持つ者だと、「う事を。この事は、最早あらゆる場所で噂になつてゐる事なんだ」

「そんな……そんな……」

蒼白なまま、涙を流す娘の肩を、カレリングダはそつと抱いた。

「わたくしたちも、どうか彼が無実であつてほしいと、心から願つています。でも、それを明らかにするには、まず、彼を見つけ出さなければならぬの」

「ええ……ええ、そうね。きっと、見つかるわ、無事で……そして、叔父様が無実だと、みんなにわかるわ……」

それから、カーリングダは、はつとして顔を上げた。

「アトラは？ アトラはどうしているの？」

「彼には、自宅待機を命じている。こんな話が知れ渡つていて、出歩く訳にもいかないだろ？？」

「そうね……ああ、でも、どんなに心を痛めている事でしょう！わたし、明日、アトラに会いに行きます」

「駄目だ」

きつぱりとアルフォンスが言ったので、カーリングダは驚いた。

この優しい父からは、悪戯だった幼年期を過ぎて以来、厳しい事を言われた記憶がほとんどなかつたからだ。

「事の真相が明らかになるまで、アトラウスに会つてはならない」

「まあ、そんな。わたし、アトラの許婚なのよ。いつだつて、会いたい時に会える筈だわ」

「ヨーリイ……ねえ、聞いておくれ。わたしだつて、こんな事は言いたくない。わたしもお母様も、きみの幸せをまず第一に考えている。その事を、どうか忘れないで欲しい」

夫が躊躇い、言い淀んでいる様子を見て、カーリングダは、嫌な役目を引き受けた事にした。

「コーリィ。そなうならなればどんなに良いかと、わたくしたちも思つてゐるわ。でも、ここまで話をしたからには、あなたにも覚悟を持つておいてもらいたいの」

カレーリンダは、娘の衝撃を和らげるにはどういふ言い方がよいのか、考えを巡らせた。

が、結局は、簡単な言葉で、ありのままに告げるしかない、と思ひ定め、娘の、自らによく似た大きな黄金色のひとみを静かに見つめた。

「もしも、噂が真実だと明らかになるなら、あなたとアトラウスの結婚を許す訳にはいきません」

ファルシスは単騎、愛馬を駆つていた。

この数日間で、かれの世界は、大きく変化していた。
これまで、かれにとつて何よりも大きなものは、ルーン家であり、その後継者として相応しくある為に、ただその為に生きてきたと言つても過言ではない。

両親への敬愛と思慕の念、半身ともいうべき双子の妹を慈しみ、
護ろうという思い……それらは今、碎かれ、心の欠片は千々に乱れ、
そしてただひとりの人間に向かおうとしていた。

リディアである。

彼女に逢いたい。

逢つて、そして、ふたりでどこか遠いところへ行く。

彼女もきっと喜んでくれる筈。

彼女の婚約は、彼女の意に染まぬものなのだし、自分に想いを寄
せてくれている。

ルーン家は、アトラがコーリイと結婚すれば、彼が何とかしてくれ
れるだろう。

両親の事など、知つた事ではない。

リディアとふたり、どこか遠くで生きていきたい……。

数日前まで、自分にこんな気持ちが芽生える事など、彼は想像し
た事もなかつた。

長年の、リディアへの想いはあつたが、それを実らせることはない
と、自分に言い聞かせ続けてきた。

ルーン家の後継である自分が、一介の侍女を正妃と出来る筈もな
い。

望めば、愛妾とする事は可能かも知れなかつたが、本当に愛する

娘をそんな立場に置くくらいなら、傍から、彼女が好きな男に嫁ぎ、幸福に暮らすのを見ている方がまだましだと思つていた。

将来は、愛妾の数で歴史に残りたい、という夢を持つティラール・バロックなどからは、全く理解されないのであらう頑なさを、かれは持つていたのだ。

しかし今、その頑なさは、これまでと別の方へ向かおうとしていた。

従者の田を盗み、騎士団の宿舎を夜半に抜け出し、夜通し駆け続けた。

リディアの実家のある街に着いたのは昼頃。

ローラムの一番大きな宿屋『金の角笛亭』に向かつた。

そこはリディアの実家で、リディアはそこにいるか、そうでなければ、彼女が今どこにいるかを聞ける筈である。

かれは、フードを目深に被つていた。

『聖女の血筋』のあかしである、黄金の髪と瞳は、密かに行動したい時、いつも邪魔になつた。

黒髪と黒目の人ばかりが暮らすこの地方で、それは余りにも人目を引きすぎるのだ。

馬を繋ぎ、入り口をくぐると、どうも様子がおかしかつた。

室内は薄暗く、客を出迎える者もない。

「……誰か？　いないのか？」

大きな声で呼ぶと、ようやく、小間使いとおぼしき少女が現れて、

「申し訳ありません。今は、閉めているんです。よそへ行かれて下さい」

と、頭を下げた。

「どういう事だ？　わたしは、宿を借りにきたのではない。この宿の娘のリディアと話をしたいのだが」

小間使いは、驚愕の表情を浮かべ、後ずさつた。

少しお待ち下さい、という言葉を残して少女は奥に消え、ほどなく出てきた女に、ファルシスは軽く驚いた。

リディアと瓜二つの容姿。しかし、リディアではない。他の者なら取り違える事もあるうと思えたが、彼はすぐに判った。

双子の姉がいると、以前話していた。会うのは初めてだが、間違いないく、彼女がその姉であるう。

「リディアに会いたいとおっしゃっているのは、あなたさまですか？」

何故か怒りと警戒を露わにした女の態度を訝しく思いながらも、ファルシスはフードを外した。

「わたしは、ファルシス・ルーン。お初にお目にかかるが、貴女は、リディアの姉上のエリア殿ですね？ よろしく」

身分を明らかにすれば、エリアの警戒は解けると思ったのだが、彼女は、ファルシスの黄金色を目にして、一層顔をひきつらせた。「あなたが？ ルーン家の若君？ ……いつたい、どういうつもりでいらしたのですか？ 悲嘆に暮れる家族の様子を見ようとしても？」

ファルシスは戸惑つた。

「悲嘆……とは？」

「とぼけないで頂きたいわ。あの娘は、攫われました。人相の悪い男に、無理矢理連れ去られるのを、物乞いの老人が見ていたのよ」「なんだって……！」

「巷で騒がれている事件の犯人に決まっているわ。即ち……」

「エリア！！ お止め！！」

興奮した娘の言葉を、背後から中年の女が制した。

「これはルーンの若様、こんな所へわざわざお越し頂いて……」

リディアの母親だった。彼女には、何度か会った事がある。

「申し訳ありません、この娘は取り乱しているのです。双子の妹が

攫われてしまつて……」

母親は深く頭を下げ、娘の非礼を詫びた。だが、ファルシスは、それに構うどころではなかつた。

「リディアが攫われたとは、どういう事だ？　あの事件の犯人に？まさか……」

「何が、まさか、なの？　犯人は、ルーン家のひとなんでしょう？それで、あなたは様子を見に来たんでしょう？　そうでなければ、若様がわざわざ侍女を訪ねてこんな所に来る理由なんかないわ！」

「エリア！！　なんて失礼な！！」

母親は、娘の頬を打つた。

「奥へお行き。行かないと承知しないよ」

「でも、母さん」

「うちの店に傷をつけるような真似は許さないよ。さあ、お行きつたら！」

娘は、母親の目をじっと見つめていたが、やがて大人しく奥へと消えて行つた。

エリアの姿が見えなくなると、すぐに彼女の事はファルシスの意識から消えていった。彼女の言葉の棘について、考へている場合ではなかつた。

「アークレー夫人、リディアが攫われたというのは、確実なのですか？」

まさかこの家族の様子が演技でもあるまいし、リディアがいなくなつたというのは確実なようである。

しかし、よりもよつて、彼女が噂の殺人者に拉致されたなどとは、思えないし、思いたくなかった。

「もしや、意に染まぬ結婚が嫌で、姿を隠した、という事はないだろうか？」

そうであつて欲しい、という思いを、彼は口にした。

だが、その言葉を聞くと、夫人の顔は険しくなつた。

「若様。あの娘の身を案じて頂いて、感謝致します。でも、あの娘

は、自分で決めた事から、黙つて逃げ出すような娘ではありません。幼い頃に手元から離したとはいえ、あの娘は私の娘です。それくらいの事は、私にはわかります」

これを聞いて、ファルシスは途端に恥ずかしくなった。

「……済まない。まつたくその通りだと思ひ」

「そうだ、彼女はそういう性格であり、その生真面目さ、芯の強さが彼女の魅力のひとつだと、わかつていたのに。」

「ただ、あの婚約を、彼女が自分で決めた、という言い方には、あまり賛同できなく思えた。そうせざるを得ない状況に、彼女は追い込まれていたのだから。そして、その原因は……。」

「あの娘の許婚は、歳は少し離れているけど、本当に良い方なのですよ。リディアを本当に気に入つて下すつて、それはもう、良い縁に恵まれたと思っていたのです。なのに……」

涙ぐむ夫人に、それは違うだろうとは言えなかつた。相手は、評判の悪い、酷薄な金貸しだらうつ、とは。

「若様、ところで、リディアに何のじ用でいらっしゃつたのでしょう？」

「ああ、それは……妹の事で、ちよつと尋ねたい事があつて」
用意していた言い訳に、幸い相手は疑問を持たなかつたようだつた。

「まあ……お役に立てませず、申し訳ありません。姫さまに、折りを見てお話をさせ……もう、リディアはお側に戻れないかも……知れませんと……」

離れて暮らしていくても、リディアは家族から愛されているようだ。これ以上、母親の嘆きを目の当たりにしているのも辛く、攢われた時間と場所を聞き、ファルシスは立ち去る事にした。

「きつと……犯人を捕まる。きつと、無事に助け出します」

そう言つと、夫人は、深く頭を下げた。

「お願い致します、若様……どんな相手であろうと、きつと真実を明るみに出して下さる、と信じています」

どんな相手であろうと、といった言葉は、勿論、噂されている相手の事を指しているのだろう。

ファルシスはただ頷き、その場を後にした。

明るい日差しが眩しかつた。リディアはいない。いなくなつた。束の間、呆然とファルシスは佇んでいた。

彼女を連れて逃げるつもりで来たのに、これはどういう事なのだろう？ 神が彼の心を知り、彼女を隠したのか？ という思いさえ浮かんだが、すぐにその思いは打ち消した。

これは、人間の仕業なのだ。目撃した者もいるのだから。必ず、救い出す。

例え、噂されている人物を破滅に追いやる事になつても……眞実を明らかにせねばならない。

攫われた場所に行き、周辺を調べた。

目撃したという者にも会えて、リディアは馬車に押し込まれ、連れ去られたという事が分かつた。

もう、この街にはいないだろう。その直感を頼りに、彼はアルマヴィラ都へ戻る事にした。

黴臭さと埃っぽさに鼻腔を刺激され、リディアは目を開けた。

周囲は、薄暗かった。

がんがんと痛む頭を押さえ、彼女は起き上がった。

薬をかがされ拉致された後、どこかへ移動しているようで、不快な長いまどろみの間、微かに馬車の振動を感じていた。

誰かが見ていて、彼女が目を覚ましそうになると、また薬をかがされた。

あれから、いつたいどれくらいの時間が経ったのか、まるで判らなかつた。

身体の下には、古いカーペットがあった。

美しい織りの上質なものだが、かなり長い間、手入れもされていないようで、黴と埃の臭いは、主にこのカーペットからきているようだつた。

周囲を見回すと、彼女は、薄暗い部屋の中にいた。

以前は何か家具や道具が色々置かれていた形跡があるが、今は、忘れられたようなカーペット以外何もない、使われていない部屋だ。

空気が、ひどく淀んでいた。

一方の壁の、とても高いところに、格子のはまつた窓があり、太陽の弱い光が射していた。

同じく格子のはまつた扉は固く閉ざされており、格子の向こうに見える廊下には明かりもない。

外界との接觸は、その窓を介して以外、ないようだったが、窓はあまりにも高く、小さかつた。

(地下牢だわ)

リディアは思つた。

何ゆえに、自分は地下牢に囚われているのだろう？

そうだ、それはいま巷を騒がせている、若い娘を攫つては殺す狂氣の犯人の仕業かもしない。

すると、自分もまた、心臓を抉られ、殺されるのだろうか。

まだ、薬の効き目が完全に抜けておらず、ばんやりとする意識の元でも、彼女は恐怖を覚え、どこかに逃げ道はないものかと、部屋のあちこちを探つた。

(……?)

部屋の片隅、カーペットの半ば下敷きになりながら、何かが落ちていた。

拾うとそれは、小さな古びたペンダントで、裏には彼女のよく見慣れた刻印があつた。

ルーン家の紋章。

やはり、巷の噂通り、ルーン家の人々が、犯罪に手を染めているのだろうか？

掌にのせてそれを見つめていた時、扉の外に何か気配がしたので、彼女は慌ててそれをポケットにしまつた。

「お、気がついたようだな。」

扉の格子の向こうから、男が覗いていた。

「だれ？！」

リディアは大きな声をあげた。男は笑つた。

「誰でもいいさあ。いま、世の中を騒がしてゐる、おつそろしいお方のご命令で、おまえをさらつてきたのさあ」

「それは……だれなの？ 本当に、ルーン家の方なの？」

髪面の小汚い身なりの男に対し、何故カリディアはそれほど恐怖を感じなかつた。単に、感覚が麻痺していただけかも知れない。

しかし、牢に囚われた力無い娘の問いかけに、男は一層大きく笑つただけだつた。

「ふん……もつすぐわかるわあー。」

「娘が目を覚ましたのか？」

そんな声がした。

それは、どこかで聞いた声だった。

「へえ、殿様。」

男がかしこまつて答えていた。

リディアは、格子のはまつた扉へ近づき、男の持ったランプの明かりで照らされた、薄暗い廊下の向こうを見た。

ひとりの男が、こちらへ向かつて歩みを進めてきていた。

（の方は……）

あり得ない人物を、そこに、リディアは見出した。

深夜、こつそりと、ユーリングダは、身支度を整えた。

準備は万全……の筈だ。

彼女はこれから、ちょっと前までは、考えもつかなかつたような冒険をするつもりなのだ。

（お父様もお母様もひどすぎるわ。私はアトラの奥方になるのに、会つてはいけないなんて、あんまりよ。アトラはきっと、苦しんでる。ここに来られないのなら、私が行つて、励ましてあげなくちゃ）

動きやすい乗馬服に着替えた彼女は、昼の間に、シーツや古いドレスを繋いで作つた紐を抱えて、バルコニーに出た。

彼女が勝手な行動をしないよう、公爵夫妻は侍女に、氣をつけて見張るよう命じていた。

次の間に控えている侍女は、決して彼女を通してはくれない。

だが、おとなしやかな姫君が、手製のロープを伝つて、3階の自室から外へ出ると、侍女も、そして両親も、想像していなかつた。

もう何年も、理想的な貴族の姫君として日々を送つていた。恋のために、アトラウスに振り向いてもらうために。

だから、周囲も殆ど忘れていた。子供の頃のユーリングダは、兄と一緒に木登りをする程、お転婆だった事を。

しつかりとシーツの端をバルコニーの柱に結びつけ、外へ垂らすと、丁度よく地面の僅かに上まで届いた。

緊張したが、所々足場もあつたので、意外と危ない思いもせずに、土を踏む事が出来た。

頬に当たる夜気が冷たい。

第一段階の成功に胸を躍らせ、彼女は小走りに馬屋へ向かつた。

同じ頃。

アルフォンス・ルーンは、妻の寝所にいた。

最早若いとはいえない公爵夫妻だが、強い愛情で結ばれた夫婦であり、他に一切愛妾を持つ事もしないアルフォンスは、私邸で過ごす日の殆どは、妻の寝台で眠っていた。

愛の嘗みを終えたあと、彼は、火照る身体を冷まそうと、何も纏わずに寝台に腰掛けていた。

「本当に、最近は良くない事ばかりだ」

彼は愚痴つた。

「まさか、カルシスがあんな事をしでかすとは。子供たちも、憎々しげに私を見る。良い結婚をして欲しいという、親の心は、なかなか伝わらないものだね」

「まあ、あなた」

素肌に白い縄のロープを羽織ったカレリンダは、小さく笑つた。

「それは、仕方がない事かもしません。両家に結婚を反対されたが、こゝして結ばれたわたくしたちの子供なんですから」

「そうかね…… そうかもしね。でも、今まで、本当に素直に良い気質を持って育ってきたのに、こんな風に反抗されると、やはり氣落ちするね」

アルフォンスは吐息をつき、言つた。

「ちょっと、これを言うのは勇気がいるのだけじね。きみがくれた、護り刀をなくしてしまった。あれがなくなつてから、悪い事ばかり起きている氣がするよ」

カレリンダは眉を顰めた。

「護り刀…… つて、あの、あなたがわたくしたちの結婚の許可を求めて王都へ行かれた時に、わたくしが差し上げた、あの短剣ですの？」

「そうだよ…… すまない」

申し訳なさそうに言う夫に、カレリングダは、慰めるように微笑みかけたが、その瞳は不安に曇っている。

「なくなってしまったものは仕方がありませんわ。でも、どうして

……」

それは、うら若かつた彼女が、恋人の無事を願つて特別に作らせたもので、柄にはルーン家の紋章が刻まれており、ふたつとないものだ。

この思い出の品を、夫妻は何となく、幸運の象徴のように感じて、アルフォンスは、大事に、常に携えていたのだ。

「わからない。盗まれたとしか思えないが……そんな機会がある者は限られているし、皆、そんな事をする筈がない者ばかりだ」

アルフォンスは疲れたように首を振った。

「とにかく、早くカルシスが見つかるとよいのだが。あの事件と無関係であつてくれる事を、毎晩祈つている。そうであれば、ユーリイを悲しませずに済むしね」

しかし、その望みが叶う可能性は、最早とても小さくなつてきて、いるように夫婦は感じていた。

カルシスは姿を消したままだし、他に容疑者は浮かんでこないのだ。

もしも彼がこの犯罪の首謀者であるのなら、いくらルーン公の弟といえど、死罪は免れない。

人柄も資質も、誰の目にも兄より激しく劣り、故に子供の頃から劣等感を持ちつつも、その劣等感を刺激されると狂つたように怒り散らす弟だった。

また、亡くなつた彼の最初の妻、アトラウスの母親は、もともとアルフォンスの許婚であった。

物静かで優しい女性で、恋愛感情は遂に生まれなかつたものの、彼は人間として彼女を敬愛していましたし、その彼女を傷つけてしまう結果になつてしまい、それでも彼を恨まないと言う彼女に、幸せに

なつて欲しくて、弟に、くれぐれも頼むと言つて託した。

しかし、結果的にカルシスは、彼女を虐待し、自死を遂げさせてしまつた。その事は、感情的大きなしこりとなって、兄弟の間に今も沈んでいた。

仲の良い兄弟とはとてもいえない間柄ではあるが、それでも実の弟には違ひない。それを自ら裁かねばならない事になるかと思うと、アルフォンスの心は否応にも沈んだ。

勿論、ルーン家にとつて大変な不名誉であるし、アトラウスがいくら将来を嘱望する血の繋がつた甥であるとはいっても、そんな父親の息子に、次期聖炎の神子となる大切な一人娘を嫁がせる訳にはいかない。

アトラウスまでがこの事件に関係しているかも知れないとは、彼をよく知るアルフォンスは疑わない。だから、彼までも罪に問う気はないが、カルシスの所領は一旦預かり、この件が風化する頃まで、謹慎させるべきだろう。

そうなれば、その間に、ユーリングダは別の貴公子を探して縁づけてしまわなければならない。

どんなにか、愛娘に恨まれる事か、と、娘を溺愛する父親は、深く溜息をついた。

ひんやりと心地よい風が、頬を撫る。

だが、黄金色の髪は、しつとりとした汗で額に張り付き、風にふわふわと揺れる事はなかった。

冒険の第一段階の成功に、ユーリングダは興奮を覚え、涼しい夜気

にあたつても尚、身体の火照りを感じていた。
軽やかな足取りで庭園を駆け抜け、馬屋の傍までたどりついた。
ここで馬を騒がせては、見張りの田じまとてしまふかも知れない。

慎重に、近づこうとしたその時……。

「誰だ？」

背後からの声に、ユーリングダは心底驚き、とびあがつた。
暗がりに、男の影がみえる。誰かに見つかってしまった。彼女は、
なんとかこの場を誤魔化す為に、色々と考えていた台詞を頭の中に
並べてみた。

「わ、わたし、怪しい者ではありませんわ。そ、その、姫さまの」
用で、お使いに行くところで……」

影が、一歩近づいた。

「まさか……ユーリイ？」

雲が動き、月明かりが男の貌を照らし出した。

「ファル……！」

ローラムから戻ったファルシスが、単身、裏門から入り、馬を戻
したところだったのだ。

「いったい、こんな時刻にこんなところで何をしているんだ？」
信じられない、という目で、ファルシスは双子の妹を眺めた。
しとやかで従順な姫君な筈の彼女が、夜中にたつた一人で馬屋に

忍び込もうとしている、という状況は、臨機応変な彼の頭脳にも、すぐには受け入れがたいものだったのだ。

「コーリンダは、暫し動搖していたが、やがて開き直った。

「私、アトラに会いにいくの」

「…………え？」

「お父様もお母様も、ひどいわ。私はアトラの許婚なのに、会つてはいけないなんて。私を見張らせて、部屋に閉じこめているのよ。だから私、自分で会いに行く事にしたの」

「…………なるほど、そういう事か」

「…………」
ファルシスは、事情を飲み込んだ。あの両親なら、そうする事だらう。

「止めないでね、お願ひ」

妹は必死の表情で、自分を見ている。ファルシスは、ふつと笑つた。久しぶりに、笑う気分になつた。

「止めないけど……どうやって、裏門から出のつもり？ 見張りの兵がいるよ？」

「それは……お使いを頼まれた、って言つわ。顔はフードに隠して」

「真夜中に何のお使い？ 顔も見せない相手を通す程、彼らは不真面目じゃあないよ。それに、君の態度は怪しそぎる」

「そんな…………」

「…………」
コーリンダは、思わず涙ぐんだ。自分では、完璧だと思ったのに、そうではないのだろうか？

「…………」
ファルシスは、そんな妹に歩み寄り、ぽんと頭に手を乗せた。

「大丈夫。協力してあげるよ」

「…………」
コーリンダは、目深にフードを下ろし、兄の腕に包まれて馬の背に揺られていた。

夜半に帰館したばかりの若君が、顔を隠した女性を愛馬に乗せて、また裏門から出てゆくのを、見張りの兵は無論咎める事もなく、通してくれた。

夜のお忍びは、この公子には特に珍しい事でもなく、父親も黙認しているのだ。

フード越しに星明かりを感じながら、コーリンダは深く吐息をついた。

うまく抜け出せた事は嬉しいが、自分一人では絶対に無理だったと、兄に断言された事が少し悔しい。

「コーリイ、絶対に顔や髪を出しちゃダメだよ」

門を出る前にも行つた注意を、ファルシスは再度妹の耳に囁いた。

自身も、注意深くフードを引き下ろしている。

事件のせいで、都には普段の賑わいはなく、表通りも人通りは少ない。

だが、そんな中でも、この夜更けに、大量殺人を犯したとされるルーン家の者が歩いているのを見咎められたら、それがどんな事に発展するやら知れない。

民に篤く慕われる領主の子女とわかつて狼藉を働く者はそうはないと思われるが、ファルシスには、リディアの姉エリアの、敵意に満ちた瞳が忘れられない。

あのような視線を向けられたのは、生まれて初めての経験だったのだ。

「わかつてゐるわ、ファル」

そう返答しながらも、コーリンダは、ルーン家の名を、隠さなければならぬと言われた事が悲しい。

無論、こうした状況下でなくとも、深窓の姫君が、夜中に館を抜け出す、などという事が、他人に知られてよい筈もない事ではあつたが。

こうして、兄と二人きりで外に出るなんて、いつたい何年ぶりである事か。

幼い頃は、何もかもを分かち合つた双子の兄妹であつたのに、成長と共に、貴族の習慣が一人の間に見えない壁を築いていつた気がする。

今しかないと思ったので、ユーリンダは尋ねてみる。

「ファル……どうしてこの間、お母様に怒っていたの？」

ファルシスは微かに身じろぎした。

「ユーリイ……知つていたのかい？」

「ええ……偶然聞いてしまって……『ごめんなさい』」

ファルシスは、馬の足を緩めた。

「ぼくもユーリイも、ルーン家の者として生まれて、誇りに思う事、素晴らしい事もたくさんあつたと思う。だけど……この家に生まれたばかりに、本当に大切な人と共に生きられないのなら、それはやはり不幸な事なのかも知れない……」

ユーリンダは、胸がどきんとした。彼女は勿論、本当に大切な人と生きていくつもりで、それが成らないとは思つていなかつたからだ。

それから次に、ファルシスの大切な人とはいつたい誰なのかと思つた。

ファルシスは、遊び慣れた主に年上の女性と、何度も浮き名を流している。

本当に想う娘と、身分違いの為に結ばれる事がない、といつ空虚さを埋める為の行動であるなど、ユーリンダには思いもつかず、顔を知る何人かのレディのうちの誰なのであるつか、と思わず想像を巡らせた。

だが何となく、それは誰なの、とは聞けなかつた。

「父上も母上も、所詮は、ルーン家の世嗣としてのぼくが大切なだ。そして、ルーン家の為には、誰かを不幸にしようと構わない手段を選ばないんだ」

「そんな！ そんな事はないわ！ お父様やお母様が、誰かを不幸にするような事を、なさる筈がないわ！」

驚きの余り、無意識にフードをはねあげ、コーリンダは兄を振り返つた。

ファルシスは冷静に、妹のフードをまた元に戻した。

「じゃあ、きみはどうなの、コーリイ。本人同士にはなんの咎もないのに、アトラとの仲を裂こうとされているだろ」

「それは……」

コーリンダは返答に詰まった。

「ぼくは別に、両親が冷酷な人間だと言つていい訳じゃないよ。ただ、ぼくたちはもう、自分の事、ルーン家の事、自分で考え、決められる年齢になつているのに、それを認めず、ぼくたちの生き方を操り、ぼくたちの大切な人の事などどうでもいい、という考えが許せない、と言つているんだ」

コーリンダはうなだれた。

ファルシスの言つ事は、きっと正しいのだろう。両親が自分や兄を愛してくれている事は間違いない。自分や兄に、幸福に生きて欲しいと願つている事も、多分間違いない。

でも、それが、その手段が、正しい事なのかどうか。それで自分や兄が本当に幸福になれるのかどうか。

答えが、見つかならなかつた。

カーテンの隙間から、月明かりが寝所に忍び込む。

アトラウスは、まだ眠るつもりはなかつたが、ランプは点けず、薄く淡い月明かりの下で、壁の肖像画を見つめていた。

父親と繼母に氣を遣い、普段は隠していた肖像画。

だが、いま、父親はどこに居るのか知れず、繼母は、この騒ぎで、娘と共に実家に戻っていた。

誰にも憚る事なく、アトラウスは肖像画を壁に飾った……自虐した生母の肖像画を。

「母上……」

アトラウスは、絵を傷つけぬよう手に氣をつけながら、そっと指で母親の頬を撫でた。

「あと少しです……」

父親はいつたい今、どこにいるのだろう。何の便りもない。

だが、やがて結末が来る。闇から光の中に出てても尚、探し求めたものが、もうすぐ得られる筈。

アトラウスは戦慄した。

控えめに、扉が叩かれた。

「若様。起きておいでですか」

押し殺したような執事の声に、思いを遮られ、アトラウスは苛立つた。

「起きている。何か？」

「コーリンダ様がお見えです」

余りにも意外な言葉に、一瞬返答に詰まつた。

もう館の者は寝静まっている時刻、あの、ひとりではフォークも用意できないような姫君が、この深夜に、いったいどうやって来たのだろう。まさか、父公爵が許可して取り計らつた訳でもあるまい

「」。

怪訝な気持ちを抱いたまま、彼女の待つ客間へ向かつた。

「アトラ……私、来たわ。会いたかったの。叔父上のこと、信じて
いるわ」

顔を見るなり、許婚はそんな風に言った。

「コーリイ……会えて嬉しいよ。だけど、どうやって来たの？ 父
君のお計らい？」

「まさか、そんな訳はないわ。私、窓から抜け出したのよ。それか
ら……ファルが助けてくれたの」

成る程、とアトラウスは思った。窓から一人で抜け出したとは驚
きだが、ファルシスが手助けしたと聞けば納得がいく。

「ファルはどこに？」

「別室で待ってるわ」

そう言つて、コーリンダは一步、許婚に歩み寄つた。
窓から射す清廉な月明かりが、整つた細面を照らし出す。やつれ
てはいたが、白く浮かび上がつたコーリンダの顔、愛しいひとにや
つと逢えた歓びに輝く黄金色のひとみは、息を呑む程に美しかつた。

「アトラ……もし……もしも……」

コーリンダは、懸命にことばを探した。

今度いつ訪れるかわからない逢瀬、普段のようになに奥ゆかしく振る
舞つている場合ではない。限られた時間に、言つべき事を言つてお
かなければならない。

「もし……お父様が、結婚を許してくれなくなつたら……私を、ど
こかへ連れて行つてくれる？ 一人でどこかへ行つて、一緒に……」

顔を赤らめながら、精一杯の勇気を振り絞つて、コーリンダは言
つた。きっとアトラは頷いてくれると信じながら。
だが、アトラウスの表情は翳つていた。

「……」

「アトラ?」

返答が遅いので、コーリンダの貌に不安が浮かぶ。アトラウスは面を伏せた。

「コーリイ……それはできないよ」

「！ アトラ！ そんな……どうして？ アトラは、結婚できなくなつても、いいの……？」

コーリンダのひとみが、信じられない、と語るよう大きくなり開かれた。

衝撃に思わず、涙がぽろぼろと零れた。アトラウスは悲しそうに吐息をついて、愛おしげにその涙を指で拭う。

「そんな事は……きみを不幸にしてしまつ。何不自由なく暮らしてきたきみに、逃亡の生活なんて耐えられる筈がないよ。ぼくは、ぼくの為にきみを不幸にするくらいなら、遠くからきみの幸せを見つめている方がずっとましなんだ！」

「そんな、私なら大丈夫よ。アトラと一緒にさえいられれば、幸せなの。アトラと離される以上の不幸なんてないわ！」

「いまはそう思うだらうけど……」

アトラウスは、コーリンダの、痛いほどにまつすぐな視線から逃れようとするかのように、窓の方へ顔を反らした。

「きっと、すぐにきみに相応しい男が現れる。そうだ、ティラール卿がいるじゃないか」

コーリンダの眉が吊り上がった。

「あんなひと、大嫌いよ！」

アトラウスは、彼女の怒りを無視した。

「元々、この婚約は不釣り合いだつたんだ。きみは、聖炎の神子となる身だが、身分から言えば、王妃にだつてなり得る。一方、ぼくは一族の出来損ないで、怖ろしい犯罪を犯すような男の息子だ……。ぼくは、ぼくの子供をきみに産んで貰つのが怖い。聖炎の神子から、黒い髪と瞳の子どもが生まれたら……」

「アトラ……アトラは、叔父上が……やつたと思つてゐるの？」

「他に考えようがないじゃないか……」

「そんな事ないわ。信じなくちゃ……アトラが信じなくて、どうするの。私は信じていいわ。アトラのお父様が、そんな怖ろしい事をする訳ないって」

アトラウスは苦笑した。

「コーリイ、きみの気持ちは嬉しいけど……きみは、あの男の事をわかつていなーい。あの男は……」

コーリンダは、アトラウスが自分の父親を、あの男呼ばわりするのを聞いて驚いたが、黙つて次の言葉を待つた。

アトラウスは少し躊躇いを見せたが、そのまま言葉を継いだ。
「妻を殺すような男だ……ぼくの母を……よく調べもせずに、何年も責め続け、死に追いやった」

「……それは……」

その経緯は、カレリンダからざつと聞いてはいたが、アトラウスがコーリンダに母親の話をするのは、実はこれが初めてのことだった。

いつも、楽しく、優しく、甘い話ばかりをしてきた。

愛おしいひどが、ようやくこんな段階になつて、心の奥深くにつけた傷跡を垣間見せた事に、コーリンダは何を言つてよいかまったく判らなかつた。

アトラウスは手をあげ、彼女が何か言おうとするのを制した。

「あの男を庇つような事を言つるのはやめてくれ。きみにまでそんな事を言われたら、ぼくはただ、益々苦しいばかりだ」

「アトラ……私……」

自分が無力だと、この時ほど感じた事はなかつた。彼女はただ、黙つて俯き、涙を流した。

アトラウスは、ふつと表情を和らげた。
「ごめんよ、コーリイ。きみにこんな話を……折角、会いに来てくられたのに」

「いいの、いいの……私……なんにも判つてなくって、『めんなさい』……」

啜り泣く許婚を、アトラウスは優しく抱き寄せた。

「きみには、あかるい陽射しと、綺麗なドレスや飾り、甘いお菓子が似合ひ。きみはただ、それに包まれて笑つていればいいんだ。苦しみなんて何も知らずに……。そして、ぼくは、そんなきみを、この手で……」

アトラウスは、彼女の肩に回した手に、そつと力を込めた。

「この手で……守りたかった……でも、もう、出来そうにない……」

「そんな、そんな事言わないで……アトラ、私の傍について……」

かつてなかつた程に間近に、アトラウスの顔があつた。

白く澄んだ月明かりの中で、愛しい愛しいひとに抱き寄せられ、ゴーリンダは、経験した事のない歎びと哀しみを感じていた。

ゴーリンダは、そつとひとみを閉じた。アトラウスの吐息がひそやかに顔に感じられた。

だが、その時……。

執事が強く扉を叩いた。

「ゴーリンダ様！ 至急、お戻り下さい！ お館からお迎えの者が参つております！」

ファルシスは、通された客間のテラスから、白く光る月を眺め、物思いに耽っていた。

コーリンダは今頃、アトラウスに何を語っているのだろう？もしもあの二人が駆け落ちをしたいと言つのなら、自分は喜んで手伝つてやりたい。

しかし、妹が家を捨てるのなら、自分は……？
妹と従兄に家を任せ、自分こそ家と両親から離れようと思つていた。

しかし、自分も妹も共に家を捨てる、などという事は、出来ない。

嫡男として育てられた身には、やはり、ルーン家の存続が何よりも大事であるという思いが、魂の底に染みついている。

自分の願いの為には家の存続などどうなつてもよい、という風には、考える事が出来ないのだ。

だからこそ、ずっと胸に秘めてきたリディアへの愛は、生涯押し隠したままで、しかるべき妃を娶り、やがては父から爵位を継いで、父のような立派な領主となつて生きていく事が当然だと、少年の頃から思い続けてきたのだ。

だが今、父親への尊敬の念は、薄れてしまった。

信じられない非道を……次期当主となる自分の為に、と言われても、到底納得出来ない。

リディアが攫われた事を、アトラウスに相談したい。

ひとつ歳上の従兄は、常に親身に話を聞いてくれ、適切な助言をくれる。

気さくで隔てのない性格のファルシスは、友人も多かつたが、本当の心の底を明かせるのは、やはり、血縁で、将来義兄となるアト

ラウスだけだつた。

アトラウスとコーリンダには、是非幸せに生きて貰いたい。

駆け落ちなどしなくとも、数年もすれば、今回のこともだんだんと記憶から薄れ、父も結婚を許すのではないだろうか？

それまで、他所に縁づけられないよう、自分がコーリンダを守つてやつて……。

一人が結婚すれば、次期領主の座はアトラウスに譲り、自分はリディアと……リディアが、生きて傍に居てくれれば、だが……。

リディアは、どこにいるのだろう？

少年の日、ある事件から、心が死んでしまうような孤独と恐怖を、誰にも知られずに、ひとり抱えていたあの頃、リディアの温かさが、かれを絶望の淵からすくい上げ、もとの明るい世界へ引き戻してくれた。

もし今、リディアが暗いところに囚われて怯えているのなら、どんな事をしても、救い出したいのに……彼女は、いつたいどこにいるのだろうか……。

じうじうしている間にも、いのちが危険に晒されているかも知れないのに、手がかりは何もない。

そこまで思いを巡らせた時、玄関ホールの方が、急に騒がしくなつてきた。

ファルシスは急いで廊下に出てみた。
館から誰か来たようだ。コーリンダの不在が、気づかれてしまつたのだろう。

ファルシスは、大きく溜息をついた。

同じ頃、リディアは、高い所にある窓の格子の間から、薄く射し込む同じ月の光を見ていた。

毛布を与えたが、眠る事は出来なかつた。

夕暮れに味わつた、あまりの衝撃に、頭は疲れている筈なのに、

眠気など訪れる気配もない。

『あなた様が……どうして……』

薄笑いを浮かべて牢の扉に歩み寄ってきた男の姿に、リティアは暫く声も失い、それからよつやく、絞り出すよつに細い声で問いかけた。

『おまえを助けに来た』

『えつ……？』

『……という言葉でも期待していたのか？残念だな。それは違う。おまえが察している通りだ』

『……あなた様が、私を攫わせた。そして、そして、あなた様が、あの怖ろしい事件を引き起こした？まさか、そんな……あり得ません…』

『あり得ないと思いたければ、思つておくがいい。おまえの考えなど、どうでもよい事だ。ただ、おまえにとつて、幸いな事を伝えに来てやつただけだ』

『……かいわい……なこと……？』

『やうだ。当面、おまえを殺すつもりはない、といつ事だ。おまえには、役に立つてもらわなければならぬからな』

『私に？』

『そうだ。これから、國中を驚かせるような事が起る。そして、おまえは、計画に必要なのだ』

『私……私のような、ただの侍女に、何ができると想つのですか…？！　計画とは何ですか？！』

『いまにわかる』

それだけ言つと、男は笑いながら去つて行つた。

(まさか……ああ、コーリンダ様、ファルシス様……！　私、いつたいどうすれば……)

この日は、ヨーリングダにとつて、生涯忘れ得ぬ日となつた。

また逢いに来るから、と何度も念を押すように言しながら、泣く泣くアトラウスと別れた。

彼は諦めるような事を言つていたが、ヨーリングダにはまったくそんなつもりはない。

愛するが故に身を引こうとを考えている彼を、今後、どんな風に力づけてゆけばいいだらうか？

彼と別々に生きてゆく程の不幸は彼女にとってあり得ないと、本当にちゃんと伝わつただらうか？

慌てふためいて、とりあえず彼女の所在を確かめに来た使者は、迎えの馬車までは用意していなかつたので、帰路もまた兄の愛馬の背に揺られながら、ヨーリングダはそんな事ばかりを考え続けていた。

やがて、館が見えてきた。

空は、白みかけていた。

こんな時間に、外から自分の住居を見る事は、記憶に残る限り初めての事だった。

彼女は急に、疲れを感じた。眠りたい。これまでの人生で一番大きな冒険は、彼女にとつては一応の成功を収めた。あとは、暫し何も考えずに、柔らかな寝具にもぐりこみたいものだ。

玄関の前に、執事や乳母や侍女達と共に、両親が立つていた。

両親は、どうせ怒つてゐるに決まつてゐる。

それより、彼女は、泣きじゃくつてゐる侍女の方が気になつた。

彼女の部屋の次の間に控えていた侍女だ。きっと、両親や侍女長

に責められたのだろう。彼女には悪い事をしてしまった……。

「コーリィ……無事で……」

カレーリンダが感極まつた声をあげたが、その隣で、アルフォンスは無言だった。

「…………ごめんなさい、お父様、お母様。でも私…………」

少しだけふてくされた表情で俯き気味にコーリンダが言いかけた時。

アルフォンスは娘に歩み寄り、その頬を打つた。

「…………！」

思いもしなかつた衝撃に、コーリンダの細い身体はよろけて倒れかかり、それをかろうじてファルシスが背後から受け止めた。

「ちょっと待つて下さい、ちちっ…………」

驚いて言いかけた息子の頬を、今度は拳でアルフォンスは殴つた。

ファルシスと、彼に支えられていたコーリンダは、共に地面上に投げ出された。

「あなた…………！」

「お止め下さい、公爵様！」

温厚なアルフォンスの怒りの爆発に、殴られた当人達も周囲も、驚きに息を呑んだ。

息子の教育には厳しい面も見せるアルフォンスだったが、愛娘にはひたすら甘く、手をあげるなど、当人にも誰にも、これまで考えもつかなかつた事だからだ。

「どれだけ……どれだけ心配をかけるんだ?！」

公爵は身体を震わせて怒鳴つた。

ファルシスは、口元についた血を拭いながら立ち上がり、妹の手を引いて助け起こした。

その面には、少々の呆れが浮かんでいる。

「心配つて……許婚のところに行つただけではありませんか。父上

が無体に会つ事を禁じられたから、こんな手段しかなかつたんだ」

兄の言葉に、痛みと驚きに呆然としていたコーリンダも励まされた。

「そ、そうだわ。黙つて抜け出したのはいけない事だけれど、元々は、お父様やお母様が、無茶な事を仰るからなのよ。アトラが傷ついている時に、私が会つてはいけないなんて……！」

「……」

アルフォンスの瞳から、興奮と怒りが消えた。かれは嘆息した。「ファルシス、きみまでそんな事を言うのか？ わたしは、ユーリイガアトラウスに会つたから怒つている訳ではない。そんな事も解らないとは、悲しい事だ」

ファルシスとコーリンダは戸惑つた。

「それは……？」

黙り込んだアルフォンスに代わつて、カレリンダが口を開く。

「あなたたちは、後先考えずにした事でしそうけれど、大人しいユーリンダが、自分で3階の部屋から抜け出して、この数日騎士団の宿舎の方に寝泊まりして帰つていなかつたファルシスが手助けして、警護の騎士がいる門から出て行くなんて、誰が思うでしょう？ 私たちは皆、ユーリンダの不在に気づいた時、真っ先に思つたのですよ。カルシスに連れ去られたに違ひないと……！」

ユーリンダとファルシスは、言葉が出なかつた。

両親や館の者達がそんな風に思つとは、想像していなかつたのだ。

「も……申し訳ありません、父上、母上」

ファルシスは詫びた。それに思い至らなかつた己を恥じ、やや赤面している。

ユーリンダも、続いて詫びよつと思つた。

だが、その時……騎士の喚くような声が、その場に響き渡つた。

「た、大変でござります！ 一大事でござります！」

都市の大門の警備所に詰めていた筈の騎士だつた。

それが、乗馬のまま、血相を変えて駆け寄り、転がり落ちるよう
に馬から下りて跪いた。

「一大事でござります！！」

繰り返す騎士に、面をこわばらせながら、

「いつたい何事だ？」

とアルフォンスは問いかけた。

「は、申し上げます。金獅子騎士団団長、ウルミス・ヴァルデイン
様が……開門を要求され……」

騎士はそこで、言葉に詰まつたように言い淀んだ。

アルフォンスは怪訝そうな表情で騎士を見つめた。

「ウルミスは我が旧友だ。訪問の知らせは受けていないが……何が
一大事なのだ？」

「ウルミス卿の配下はおよそ五十騎の精銳……公爵様にお知らせす
るまで、その場にお留まり頂くよう、尽力したのですが、備えもなく
く、また、剣を交えるよいものか判断もつかず……申し訳ござい
ません！！！」

「……剣を交えるだと？ 気でも狂つたのか？ なぜ、国王陛下直
属の金獅子騎士団と剣を交えるなど……」

その次に見た光景は、この朝から始まつた長い長い悪夢の発端で
あり、射し始めた朝日を受けて、煌めく金色の鎧や兜は、コーリン
ダにとって、生涯忘れ得ぬ恐怖の象徴として、眼に焼き付き消え失
せぬものとなつた。

金獅子騎士団団長ウルミス・ヴァルデインとその配下の騎士達は、
息苦しい程の重圧感を放ちながら、館の正門に通じる道からゆっく
りと進んで来た。

待ち受ける人々の目についたのは、騎士達に幾重にも囲まれた一台の馬車だった。

それは粗末な造りのもので、窓には板で目張りがされている。

囚人を護送する為のものだと、ユーリングダにさえ、察しがついた。

いつたい、誰を護送する為のものなのか？

罪びと……という言葉に、ユーリングダの脳裏に真っ先に浮かんだのは、叔父、カルシスだった。

事件を起こしたカルシスを捕らえに来たのだろうか？ やはり叔父は、怖ろしい罪を犯したのだろうか？

ユーリングダは、恐ろしさと辛さに震えた。

一方、公爵夫妻やファルシス、執事などは、ユーリングダよりずっと、物事を理解していた。

いくら國中至るところで噂になつていてることはいえ、地方で起つた事件……貴族の子女も含まれているとはいえ、犠牲者の多くは平民に過ぎない事件の為に、国王直属の騎士団がわざわざ出向く筈もない事くらい、当然察しがつく。

ウルミス・ヴァルデインは、重い空氣の中、ゆづくじと馬を下りた。

氣の進まない瞬間を迎えるのを、少しでも遅らせようとするかのように。

18年前、前国王の御前試合で、全力を出し尽くしてアルフォンスとウルミスは鬪つた。

ほんの僅かな運の傾きで、勝利はアルフォンスにもたらされたが、以後、二人は親友となり、年に数回、アルフォンスが王都を訪れた際には、必ず共に酒杯を交わすし、互いの領地も行き来する仲である。

ウルミスは、実直で、情に脆い男だった。無論、金獅子騎士団

長の名に恥じぬ剣豪である。

「ウルミス……いつたい……？」

躊躇いがちに声をかけたアルフォンスの顔を辛そうに見つめたウルミスは、独言のように小さく声を発した。

「やはり……これは間違いなのだ。その顔を見れば、わかる」

「閣下！」

咎めるような声をあげたのは、彼の背後の部下。

「わかつていいる」

ウルミスは短く言った。

それから、懐から一枚の書状を取り出した。国王の印のある正式な書状である。

彼はそれを広げ、アルフォンスに突きつけた。

「これは、勅命である。アルフォンス・エル・アルマヴィイラ・ルン。卿は、大逆罪……畏れ多くも、国王陛下の暗殺を企てた罪で告発されている。わたしは、速やかに、卿を捕らえ、王都へ護送するよつ、命を受けてここに来たのだ」

場が沈黙に包まれたのは、刹那のことか、数刻か。ルーン家のひとびととその家臣達は、それすら直ぐには判らぬほど衝撃を受けていた。

侍女の中には、誰かに説明を求めるかのように、不思議そうにきよろきよろと辺りを見回す者もあつた。

誰もが予期し得なかつた宣告に、暫し、その場の刻が止まつたかのように思われた。

その沈黙を、最初に破つたのは、ファルシスだつた。

「いつたい、何の事ですか？！ あり得ない！」

若さから、彼は、国王直属の騎士団長にして、父親の親友であるウルミスに対する礼儀も忘れ、顔色を変えて詰め寄つた。

「大逆罪、とは如何なる事でしょうか？ 父はこのところずっと、ここを離れていないし、何のおかしな事もありません。暗殺など……こんなところから、都まで刺客を差し向けた、とでもいうのですか？ 国王陛下に対する忠誠は、他の誰にも劣らぬ事は、息子のぼくが一番よく知っています。そして、父と親しいあなたもご存じの筈だ！」

「……控えないか、ファルシス」

乾いてかすれた声で、アルフォンスは息子を制した。ウルミスは悲しげに首を振つた。

「構わない。まったく当然の疑問だ。……そして、きみはどうなんだ、アルフォンス？ 『ご子息と同じ疑問を放つのか？ それとも、罪を受け入れるのか？』

「受け入れられる筈もない」

アルフォンスは即答した。息子の言葉のおかげで、かれは衝撃から立ち直り、徐々に冷静さを取り戻しつつあつた。

「わたしが陛下に背いたと？　いや、それより、暗殺とは穏やかないが、まさか陛下の御身に何事があつたのか？　こんな田舎にあつては、何も知りようもない。教えてくれ、ウルミス」

「陛下は御無事だ。はつきり言おう。刺客などではない。きみは、呪術によって、畏れ多くも陛下を弑逆せんと企てた、と、告発されているのだ」

ウルミスは、アルフォンスをひたと見据えて告げた。

「呪術……だと？」

その言葉に、アルフォンスは顔色を無くした。

「やはり、心当たりがおありなのですな」

ウルミスの背後の副団長がすかさず言った。

「まさか……しかし……」

アルフォンスは、咄嗟にうまい返答を考え出す事ができなかつた。だが、直ぐに思い定めた。

あの事は、既に國中の噂になつてゐる。ウルミス以下の者達が、派遣されてここにいるといふ事は、王都の方で独自に調査を行い、確信を得た結果なのだろう。下手な隠し立てなどは、かえつて状況を悪化させる事に他ならない。まずは、とんでもない誤解を解かなければならない。

「……確かに、最近我が領内で、多くの婦女子が惨殺され、その殺害が呪術目的だつたと推測されている。その事について、様々な憶測がなされ、國中で噂されているとも聞いてゐる。こちらでは、一刻も早くその犯人と推測されている者の身柄を拘束すべく、都警備隊と騎士達が尽力している所だ。だが、まさかその呪術の目的が、陛下の呪殺などという大それた、恐るべき企みだとは、こちらではまったく掴めていなかつた」

「ほう？　それはおかしな事ですね」

幾分揶揄するような口調で、金獅子騎士団副団長ノーシュ・バランは言った。

「（）」領主のルーン公がご存じないとは……この呪術の真相について、鑑定を行つたのは、このアルマヴィラのルルア大神殿の長にして、公の従兄であられる、ダルシオン・ヴィーン様であるといふのに？」

「なん……だつて？」

今度こそ、アルフォンスはことばを失つた。

「ノーシュの言う通りなのだ、アルフォンス」

沈鬱な声でウルミスが言う。

「ほんとうに知らなかつたのか。ではいつたい、誰がどのようないで、これを行つたと思っていたのか？」

「身内の恥だが……我が弟カルシスがやつた事だと思つていた。私への呪詛だろうと……。かれは、事件が発覚して以来、消息を絶つている。私が陛下を弑するなどとんでもない。それに、弟にも、そんな大それた事をする理由も能力もない筈だ。まずは、弟を捜し出し、その意図を尋ねよう。大逆などとは、まったく見当違ひだと、すぐに判る筈だ」

「その必要はない」

「……え？」

親友の返答に、アルフォンスは不思議そうにその目を見返した。ウルミス・ヴァルデインは、その視線を避けようと、余所を見やるふりをしたが、険しいルーン家側のひとびとの視線にぶつかって、僅かに目を伏せた。

「カルシスどのを捜す必要はない。かれは、王都に滞在している。アルフォンス・ルーン、卿の大逆罪について、国王陛下直々に目通りを願い、告発したのは、きみのただひとりの弟なのだよ……」

「ユーリンダは、目の前で何が起っているのか、まったく解らなかつた。

大逆罪？ 国王を呪殺？ カルシスが告発？

ウルミスおじさまはいったい何を言っているのだろう？ すべては、まるで現実とはかけ離れた、造りもののお芝居のように感じられた。

ただ、お芝居にしては、周りのひとびとの反応が、あまりに深刻めいていた。

カレリンダは、貧血を起こしてよろめき、侍女頭の腕に支えられた。

「……不吉を感じていました、昨夜から。私は、ユーリンダの身に何か起こったのだと思ったのです……。まさか、こんな……」

ファルシスは、顔を真っ赤にして喚いた。

「こんなばかな話はない！ 叔父は、昔から父とは不仲だった。とち狂つて、そのような事をしでかしたんだ。父に罪をなすりつけよう。呪殺……？ 我が父がそんな卑劣な事が出来る人間かどうか、ウルミス卿、あなたもよくご存じだろうに！」

ウルミスは、悲しげに軽く首を振った。

「わたしは、陛下に剣を捧げた騎士。わたし自身が何を知っているかは、この件に関して何の救いも与え得ないのだ。わたしは、アルフォンスの人柄を知るのみ。一方、カルシス卿は、この告発に、ちゃんとした証拠を添えている。彼を支持する人もいる。そして何より、陛下が、この告発を真実と思われているのだよ……」

「陛下は……これを信じておられるのか。わたしが、陛下を弑そ
うと企んだと」

アルフォンスは、呻くように言葉を発し、片手で顔を覆った。

「……きみに告げるのは辛い。だが、いざれは耳に入ることだらうから、わたしの口から言つておこう。陛下は激怒され、すぐにきみの首を持つてくるようこと仰せだつた。それを、居合わせたラングレイ公とわたしが、何とか押しどぎめ、まずはきみの身柄を拘束して、エルスタックで裁判を行う、という話になつたのだ。だからどうか堪えて、あの馬車に乗つてほしい。或いは、それは、きみの命運を断つ結果になるかも知れないが……わたしは、出来る限りの尽力をして、きみを擁護すると誓つ。きみの様子を見て、わたしなりに、真実を悟つたからな」

「……ウルミス。きみの友情に感謝する」

ぐぐもつた声でアルフォンスは言い、顔を上げた。その顔は蒼白だつたが、瞳には、徐々に冷静さが戻りつつあった。

「了承した。まずは、陛下にお目にかかり、話を聞いて頂かなくては。それに、カルシス。ああ、勿論、わたしはエルスタックに行かねばならない。身の回りの支度をする時間をくれるか、ウルミス」「勿論だとも。我々はここで待つている」

「閣下、某がルーン公に付き添いましょう」

アルフォンスは、進み出たノーシュ・バランを冷ややかに睨め付けた。

「無礼者。わたしが逃亡するとでも申すのか」

物静かだったが、その声には、アルフォンスの失脚を確信している様子の副団長を一步下がらせる力が込められていた。

「い、いや、しかし……」

「わたしが付き添おう。勿論、きみを監視する為ではなく、話を続ける為だ。いいだろう、ルーン公?」

「当然だとも、団長閣下」

アルフォンスは謝意を込めて旧友を見返し、引きつった面持ちの

家人の方を見やつた。

「大丈夫か、カレリングダ？」

侍女頭に支えられている妻に歩み寄り、心配顔でその面を覗き込む。

「わたくしは大丈夫ですわ。でも、あなた……！」

「横にならなくて大丈夫か？では、ちょっと待つてくれ。 フアルも、ユーリイも」

そう言うと、彼は、わなわなと震えている老執事のウォルダースを軽く促し、ウルミスと共に、館へ入つていった。

程なく、小姓に荷を運ばせて、ルーン公は戻つて来た。
大貴族といえども大逆の罪人の疑いをもつて護送される身としては、ごく僅かな品の携行しか許されない。

身の回りの世話をする為、一人だけ随行を許された、気に入りの小姓のリックが、荷物を馬車に積んでいる間、アルフォンスは家族と話をする事が出来た。

「ファルシス、あとを頼む」

「父上……！！」

強ばつた表情のファルシスを力づけるように、アルフォンスは微笑みを浮かべて息子の肩を叩いた。

「ルルアに誓つて、わたしは何の罪も犯していない。だから、何も心配はいらない。カレリングダも、ユーリングダも、わかつたね？」

「あなた……アルフ……ああ、なんという事でしょう……！」

妃は遂に耐えきれずに、大粒の涙を零した。

「あんまりですわ！王家に対し、長年の忠誠を尽くして来られたあなたのですのに、なぜ、どうして、こんな愚かな告発が通るのですか？！」

「大丈夫だと言つのに。陛下はきっと解つて下さる。きみは、ルルアに祈つて待つていておくれ。そうだ、あの、結婚を賭けた御前試合に赴いた時のように。あの時の護り刀がない事だけが、少し不安

だけれどもね

「……これをお持ちになつて」

夫の言葉に、思い出したよつてカレリングダは、首にかけていたペンダントを外した。

「僅かですが、守護の魔力を込めています」

「ありがとう、カリイ」

アルフォンスは、妻の頬に口づけた。

それから、今にも氣を失いそうな様子の愛娘の頭を優しく撫でた。「良い子にしているんだよ。もう、お母様に心配をかけないよつて」「おとうさま……」

ほろほろとコーリングダは涙を流し続けた。何か言わなければいけない、と思つのに、言葉が出てこない。

少しでも怖いことがあると、これまでにいつも、優しく強い父親が、彼女を護つてくれていた。

いま、これまで経験した事がない程に怖いことが起つていて、いうのに、父親は彼女の前から連れて行かれようとしている。

ルーン公爵が、望みもしないのにどこかに連れて行かれるなど、想像した事もなかつたのに。

意識を手放してしまいそうなくらい、怖い。氣を失つて、目覚めれば、これはたぶん、ただの恐ろしい夢に過ぎなくなつていて、う。だからもう、目を瞑つてしまいたい……。

そう思いながらも、コーリングダは父親の顔から目が離せないでいた。

もしかしたら、いまが、愛する父親との永のわかれになるかもしない。

考えたくないのに、そんな思いが、いくら逃れようとしても決して離れない自分の影のように、胸の内から消えないでいたからだつた。

何も言えずにいる娘を優しく抱きしめ、アルフォンスは再び嫡男の顔を見た。

「ハーヴィスとダグは力になるだろう。大神官とノイリオンには気をつけよう。……それから、アトラは……この件には無関係だろうと、わたしは思う。だが、きみの判断に任せる。母上とウォルダースに色々相談して……また、書簡をよこすから……頼む」

「はい、父上」

ファルシスは、下唇を噛み、しつかりと父親の眼を見つめた。
「道中、お気をつけて……御無事な御帰還をお待ちしております。こちらの事は、どうぞ心配なされませぬよ。……しつかりと留守を守ります」

「頼もしくなったな、ファル。では、行つてくるよ」

アルフォンスは微笑を浮かべ、もう一度息子の肩に触れると、踵を返した。

その様子はまるきり、普段の公務をこなしに王都に出向く時と、変わりがなかつた。

アルフォンス・ルーン公爵は、何の動搖も見せず、理知的で穏やかないつもの気品と風格を纏い、まるで事態を楽観視しているかのように、周囲に思わせた。

その様子は、少しばかりは、ルーン家側のひとびとを力づけた。

「これはひどい、この馬車は」

罪人護送の粗末な板張りの馬車に乗り込む時、かれは肩を竦めて言った。

「腰を痛めそうだ。なんとかならないのか、ウルミス？」

「後でクッション用意させよ。それで我慢してくれ」
ぎこちなく笑つて、ウルミスは答えた。

こうして、アルフォンス・ルーンは、アルマヴィラを発ち、王都エルスタックへの旅路に就いた。

騎士団の最後のひとりの姿がみえなくなるのと同時に、コーリン

ダはぐすおれて意識を失つた。

なぜ、父に、心配をかけて『めんたい』と言えなかつたのか、
と、心の奥で、悔やみながら。

ヴェルサリア王国は、広大な面積を持つバルトリア大陸に於いて、大陸暦354年から、約250年にわたって栄えている王国である。大陸の面積の、約7割を占める国土を持つ。

残りのうち、1割は、北方の山脈とその果ての未踏の地。

後の2割は、東や西の僻地、辺境、と呼ばれる地域。ヴェルサリア人が蛮族と蔑む、自給自足の人々が暮らす、瘦せた土地である。かつては、この大陸も、いくつもの公国が並び立ち、大陸の霸権を得んとする戦の続いた時代もあった。

だが、その中から遂に、ヴェルサリア家が抜きん出て、国家統一を成し遂げてから約250年、大陸は、緩やかな繁榮と、表面上の平和に恵まれ、安寧なときを過ごしていた。

現国王エルディス3世は、第15代国王。若干19歳。父王の突然の事故死の後の即位から、まだ一年と少しである。

鳶色の髪と瞳を持つ優美な若者で、少年の頃から、帝王の器を充分に備えていると評判が高かった。

争い事を疎み、書を好み、しかし、武芸の腕前も天賦の才を持ち合わせている。

下々の者にも常に公平で優しく、王太子時代、宮廷に仕える者を始め、民草に人気が高かった。

しかし、そんな性質が、やや変貌してきたと、最初に傍仕えの者達が感じ始めたのは、王が、即位とほぼ同時に、王妃を娶つて程なくの頃からである。

王妃リーリア。宰相アロール・バロックの嫡男シャサールの長女。絶世の美姫との評判と、学問塔の博士達も舌を巻く才氣と知識を併せ持つ。

この、非の打ち所のない王妃は、同時に、強い選民意識も持ち合

わせ、初めてにして唯一の女性を得た王を虜にしたばかりか、多大な影響を与えていた。

王都エルスタックは、大陸のほぼ中央部に位置する。

気流の関係で、同じ緯度の他の地方より温暖で過ごしやすい気候である。

国王直轄地及び七公爵領全てに通じる街道の集結点であり、大陸の要として常に賑わう、地方の者にとっては、憧れの都なのである。高い城壁に囲まれた城塞都市であり、万が一外から攻撃を受けても、半年は保ち堪えると言われている。

ヴェルサリア王国には、王家の下、七公爵家と呼ばれる大貴族が存在する。

バロック、ローズナー、ヴェイヨン、ルーン、ブルーブラン、ラングレイ、グリンサム。

かつて、王国建立前、ヴェルサリア家と鎧を削った公国の主の末裔である。

筆頭は、イルランドのバロック。

イルランド地方は肥沃な平地で、王都にもほど近い、要となる地域。

当主にして宰相のアロール・バロックは59歳。

国の重鎮にして王妃の祖父でもあり、王妃を通じて、若き王に多大な影響を与える得る存在である。

アルポートのローズナー。

アルポートとジョーレイは、南方で、大きな港町を含み、他国との貿易による益により富んでいる。

当主は、女公爵のスザナ・ローズナー、39歳。

快活で気つ風の良い女性であり、女ながらに武芸も嗜む。

ジョーレイのヴェイヨン。

当主は、ローダー・ヴェイヨン、55歳。

嫡男がアロール・バロックの長女を娶つており、バロック家との関係が深い。

ローダーは、物欲が強く、酷薄な人物で、領民からもあまり慕われていない。

シルクウッドのブルーブラン。

シルクウッドは西方で、織物や細工物の生産が盛んな地域である。

当主は、リッター・ブルーブラン、25歳。

少々浮世離れした所があり、風流を、王家の次に愛すと公言している。

オースタンのラングレイ。

オースタンは北方の瘦せた土地が多く、険しい山脈と接し、そこに暮らす人々の気風は、質実剛健。

当主は、ポール・ラングレイ、62歳。

落ち着いた人格者で、尊敬と親しみを込めて、ラングレイ老公、と呼ばれる。

グリムのグリンサム。

グリムは、七公爵家の領地で最も狭く、その大半は深い森で、王都に距離的に近いにも関わらず、未開で排他的な土地柄である。

当主は、シユリク・グリンサム、8歳。

半年前に前領主が急逝し、跡目を継いだが、実権は、母親のイサナが握っている。

そして、アルマ・ヴィラのルーン。

当主は、アルフォンス・ルーン、36歳。

アルマヴィラは、光神ルルアの大神殿が建立された聖地であり、領内に国内最大の金鉱を有し、一帯は栄え、治安もよい……よかつた。

多数の乙女が誘拐、殺害され、その心臓の血が、国王呪殺を目的とした呪詛に用いられ、事もあろうに、その大罪を犯したのが領主アルフォンスとされ、王都に護送される事態になるまでは……。

カーテンを透かして柔らかに射し込む、陽の光に包まれてユーリンダは目覚めた。

いつもと変わらぬ、清潔で上等な寝具に包まれて、彼女は自分の寝台に眠っていたのだ。

ユーリンダは思わず、安堵の笑みを洩らした。

そう、やっぱりあれは悪い夢だったのだ、と、確信したからだ。普段通りの自室。何かが起こった様子などまるでない。違うと言えば、今が朝ではなく、正午を過ぎているようだという事くらいだが、昨夜は冒険をしたので、疲れて寝坊をしてしまっただけの事だ。

お父様やお母様に心配をかけて申し訳なかつた。きちんと謝りそびれたので、早くお父様とお母様にお目にかかるつて、お詫びをしなくては。

彼女は起き上がりつて寝台を離れ、ガウンを羽織つてバルコニーに出た。光を浴びて、しつかり目を覚まそうと思つたのだ。
見慣れた庭園を見下ろした時、彼女の眼に、見慣れないものが映つた。

陽光を浴びて燐々と煌めく黄金色の鎧。彼女は悲鳴をあげた。

「姫さま?!」

悲鳴を聞いて、すぐに次の間から侍女が現れた。

「お気がつかれたのですね。よかつた」

マリースという年かさの侍女は、混乱してよろめいたユーリンダの肩をしっかりと受け止めた。

「なに……あれば。どうして、ここにいるの?...」

「金獅子騎士団の騎士でござりますよ。暴徒から家族を護る為、と称して見回つてゐるので」

「暴徒……暴徒ってなに?...」

マリースは困ったように作り笑いを浮かべた。

「それは……物騒な事件が起こっていますし……」

その時、別の侍女に呼ばれたカレリンダ妃が室に入ってきた。
「ユーリンダ？ 大丈夫ですか？ いきなり倒れるのだから、心配した
わ」

「お母様……」

カレリンダ妃は、げつそりと竈っていた。光り輝く美しき聖炎の
神子、と吟遊詩人に謳われる美貌がかすんだようだ。

カレリンダは、侍女達に下がるように言い、ユーリンダを寝台に
座らせ、自身も並んで腰をかけた。

「ユーリイ……気を強く持たなければなりませんよ。あなたを様々
な現実から護つて下さっていたお父様は、もうここにはいないので
す。これからは、あなたも、ひとりの大人として、ルーン家の長女
として、事実に立ち向かっていかなければいけません」

「事実……ああ、やっぱりお父様が連れて行かれたのは、事実だっ
たのね。夢ではなかつたのね」

カレリンダは、悲しげに口元を歪めた。

「夢ですって……あなたらしいわ」

「お父様は……どうなつてしまつの？」

「……」

たつた今、現実を知るよう説教したばかりでありながらも、カ
レリンダは、この質問にいつたいどのような言葉で答えればよいの
か、この娘に耐えられるのか、と迷つた。しかし、この期に及んで
言葉を濁しても、結局後で知る事になるだけだ。それに、いくら現
実に疎い娘でも、大逆罪がどのような罪で、それを犯せばどうなる
のかくらい、勿論本当は解つていい筈だ。

「もしも……この告発が事実だと、裁判で判決が下されれば、死罪
です。それ以外にはあり得ないでしょ……」

途端に、ユーリンダの瞳から涙がこぼれ落ちた。また娘が氣絶す

るのではと思つたカレリングダは、慌てて付け加える。

「でもね、お父様は無実なのですから、そんな事になる筈はありません。ルルアがお護り下さいます。罪はカルシスの方にあると、眞実が必ず明らかになる筈です」

「カルシス叔父様がいけないの？ カルシス叔父様が、お父様に罪をなすりつけたという事なの？」

「勿論、そういう事です。カルシスはずっと、お父様を妬んでいた……あなたまさか、本当にお父様が罪を犯したなんて思つていないです？」

「まあお母様、どうしてそんな事を仰るの？！ そんな事を思う筈がないでしょ？！」 あんなに……誰にでも優しくて、高潔で、国王陛下に常に忠実でいらっしゃったお父様の事を！」

ゴーリンダは憤慨した。母は、素直に謝った。

「……そうね、『めんなさい、ゴーリイ。わたくし、どうかしているわ』

だがこの時、ふとゴーリンダの脳裏に浮かんだ光景があった。誰かが、お父様の事を、卑怯だと言つていた気がする。そんな訳はないのに……あれば、いつ、誰が言つたのだつただろ？

混乱しているゴーリンダの頭は、それ以上、その事を詳しく思い出す事は出来なかつた。

「お母様……私達はどうなるのでしょうか？」

「……わかりません。今のところ、私とあなたは、外出を禁じられ、この館に軟禁されている状態です。見た通り、館の外には、ウルミス卿の残していつた騎士たちがいます」

「マリースは、暴徒がいる、と言つたわ。暴徒って、どういう事？」
「ああゴーリイ、アルマヴィラの民が、この館を襲うなんて事はあり得ないわ。マリースの言つた事は気にしないで」

強い口調でカレリングダは言つたが、その瞳には、微かな不安の影がある。これまで、アルマヴィラの民はずつと、領主に忠実で、特

にアルフォンスは、領民に慕われていた。だが、もしも、大衆が、この罪を本当にアルフォンスが犯したと信じ込まれてしまえば、どうなるだろう？ 忠誠を誓っていた公爵が実は、罪のない娘たちを、おぞましい儀式の贊にする為に殺害するような人物だった、と教えられれば？

「ファルはどこにいるの？……それから、アトラは？」

カレーリンダの答えを素直に受け入れたらしく、ヨーリンダの問いかに、カレーリンダは、不安を心の奥底へ押しやつた。

「ファルは騎士団の宿舎の方で謹慎しています。アトラの事は、わたくしには分かりません」

アトラウスの名が出た事で、母子の間に微妙な空気が流れた。カレーリンダは、アトラウスの事をどう考えてよいか、判断しかねていた。父親とぐるであるのか、何も知らされていないのか。

アトラウスがもし逢いに来たら逢つてよいか、ヨーリンダは母親に尋ねたかった。だが、母が怒るかも知れないと思い、彼女はそれを言い出せなかつた。

「ファルはじゃあ、無事だけども、当分帰つて来られないのね？

……ああ、せめてリティアがいてくれたら、私を力づけてくれるのに…」

「そうね……でも、リティアにとつては、ここにいなくてよかつたでしょう。館の者は皆、怯えています。リティアには嫁ぎ先も決まつているのだし、ここに戻らず、普通の暮らしをしていく事が出来るのですから。あなたも、自分の事ばかり考えず、そういう風に思つてみて『ごらんなさい。お父様は、いつもそうなさつていますよ』

「そんな……もう、今まで通りには戻れないような事を仰らないでお父様は帰つてこられる。そして、また元の通りになるわ。そうでしぇう？！」

「そう……そうね。あなたの言つ通りだわ。『ごめんなさい、ヨーリイ。一睡もしていいものだから、わたくし、おかしな事を言つてしまつのかも知れないわ。リティアは嫁いでもまたここで勤めるで

しょうし、ファルも良い相手を探して……あなたも……」

カレリンダは、言いながら、眉間に指を当てた。

「少し休む事にします。あなたは、あまり心配せずに、お父様の為にお祈りをしていなさい」

そう言い残して、彼女は立ち去る所とした。その時、丁度マリー^スが、客の訪れを告げに来た。

「お妃様、姫さま。アトラウス様がお見えになつています」

ファルシスは、騎士団の宿舎の固い寝台の上に身体を伸ばしていった。

昨夜は一睡もしていないにも関わらず、横になつてもまったく眠気は訪れない。眠つて、ほんの一刻でも、現実から逃れたいのに。

これからどうなるのか。カルシスの目的は何なのか、いつたい誰と誰が関与しているのか。情報があまりにも少なすぎた。

判つているのは、これが前代未聞の事態であるという事だけだ。王の信篤い筈の七公爵の一人が、罪人として王都へ護送されるなど、建国以来の歴史のどこにも、起こつた事のない事件である。もし、父親が有罪となつたら？ 当然、父は死罪、大逆人の嫡男という事で、自分も死罪となる可能性もある。よくても永久追放……。

ほんの昨日まで、自らすべてを捨てる覚悟を決めていたのに、いま、自分の意志とは遠いところで、すべてを奪われようとしている事が、他人事のように、不思議に感じられた。

愛の為に家を捨てようなどと考えていた昨夜までの自分自身もまた、他人のように思われた。

この、家の一大事に、自分の個人的な感情は、自然と胸の奥深くに沈んでいる。リディアの事を想わぬ訳ではないが、いま、彼女の為にしてやれる事は何ひとつない。彼女が自分自身の力で、陥っているであろう苦境から逃れ得るように祈るばかりだ。

いまは、アルフォンス・ルーン公の嫡男として、家と名誉を守り、母と妹の身を護ることを考えなければならない。その為の事ならば、この軟禁状態の身でも、出来る事はある筈だ。

今のところは、面会などは禁じられておらず、この建物の中に限つては、自由に過ごす事が出来る。

まずは、父が信頼できると言い残した騎士団団長ウィルムと警備隊長のダリウスに会つて、都の様子、旗下の貴族や騎士たちの動向、そして何より、アトラウスの関与と、カルシス、ヴィーン家の内情を探らなければならない。

アトラウスが関わっているとは疑いたくないが、可能性を考えておく必要はある。

「若君、団長閣下が面会を希望されています」

彼の身の回りの世話を担当する、見習い騎士の少年が扉をおずおずと叩き、そう告げた。

すぐに通すように言つよりも早く、聖炎騎士団団長ハーヴィス・ウィルムは少年の背後から歩み寄つて来た。

「若……申し訳ござらん」

これが、ウィルムの第一声であつた。喉の奥から絞り出すような、無念さを湛えた声。

「団長殿……何を謝られるのですか？」

ファルシスは次期領主であるが、現在は、団長配下の騎士団の一員でもある。団長には常に敬意をもつて接しているし、ウィルムも、若君相手といえども、普段の待遇においては、他の騎士と差をつけるような事はしなかつた。

ウィルムは、先代領主の時代から聖炎騎士団を束ねる長で、現在62歳。

厳格な武人で、先代からもアルフォンスからも信頼篤い人物である。以前から本人が希望していた引退の話が、そろそろ現実化する空氣があつた矢先のこの事態に、老武人はいたく衝撃を受け、それを隠しきれないのでいた。

「某が地方へ出向いている間にこんな事に……某がおれば、むざむざと殿を連れて行かせはしなかつたものを。ウルミス卿と刺し違えてでも、殿をお護りしたものを！」

「しつ、滅多な事を仰るものではありません」

ファルシスは、慌てて戸口の方へ視線を走らせた。人の気配はないが、しかし、ウィルムの言葉は余りに不用意なものであると思った。

「どこに金獅子騎士団の耳があるか知れません。それに、父はそのような事は決して望んでいませんでした」

「しかし……裁判などと言つても、カルシス卿などの狂言を真に受けるような王の御前で、本当に公正な裁判が行われるのか……」

「団長殿！」

ファルシスは一層表情を険しくし、早口で言つた。

「我らがここで陛下の批判などしていたと金獅子騎士団の者に言われば、一層父の立場が悪くなる事、何故お判り頂けませんか」

ファルシスの言に、ウィルムは流石にはつとなり、次いで情けなさそうな表情を浮かべた。

「……申し訳ございませぬ。……まだまだ耄碌はしておらぬつもりでございましたが、あまりな事に、周囲を見る目を失つておつたようです。若に教えられるとは……成長なさいましたな……」

「お判り下さればよいのです、団長殿」

答えながらも、ファルシスは心中やや失望していた。立派な人物ではあるのだが、この取り乱しようでは、果たして今後、冷静に己の役回りをこなしてくれるのかどうか。

だが、この状況では、ファルシスが信頼してもよい人間は、ごく限られている。

「過ぎた事はいくら嘆いても動かしようもありません。それよりも、情報を集めて現状を把握し、出来る限りの手を打たなくては。団長殿……手を貸して下さいますね？ 父の為に、ルーン家の為に」

「勿論ですとも、若。某が剣を捧げているのは、王ではなく殿でございます。殿をお救いする為なら、この老骨、如何様にでも、若の手足となつて働きましょう」

「ありがとうございます、団長殿。団長殿の忠誠は、きっと父に伝わります。では、早速、相談なのですが……」

一層声を落とし、ファルシスは、自分の考えを語り始めた。

カレリングダとコーリングダ母子が客間にいると、俯きがちに窓の傍に立っていたアトラウスは顔を上げた。

「アトラ……」

許婚の顔を見ただけで、コーリングダは思わず涙をこぼした。昨夜の冒険が、遠い昔に感じられる。

カレリングダは彼を見て、今朝までは、自館で謹慎を命じられていたのは甥のほうなのに、何もかも逆転してしまっている皮肉を、目の前に突きつけられたような気がした。

「コーリングダ、伯母上……」

アトラウスは一人の姿を見て、表情を歪めた。

「何を言おうと信じてもらえないかも知れない。そう思いながらも、どうしても一言、謝罪がしたくて、会わせる顔がないのは承知で、来てしました」

「謝罪ですって？」

どうしたつて棘のある口調になつてしまつ、と思ひながら、カレリングダは用心深く言った。

「何を詫びようと言うのですか？　あなたは、すべてを知つていながら、娘やわたくしたちを騙していたのですか？」

「お母様！　アトラはそんな人じゃないわ！」

「あなたは暫く黙つてなさい」

あまり意味のない弁護に思わず苛立ち、常になくカレリングダは厳しく言った。

「すべてを知つて……など、とんでもありません。まさか、父がこのような恥ずべき行いをするとは……いくらあの父でも……まったく予想していませんでした。ただ、それでも、僕の実の父親が、こうして讒言により伯父上を窮地に陥らせている事は、動かしようがない事実です。その事を、ヨーリイに、伯母上に、ファルシスに、

謝罪しなければと思いました

尖った伯母の言葉に対し、ただただ沈んだ声でアトラウスは答えた。

「僕と父の仲は、冷え切っています。父は、他に男子がないから、仕方なく、気に入らない僕を嫡男として認めているに過ぎないし、僕は父を憎んでいる。そういう間柄で、何かを共謀するなど、あり得ません。それだけは信じて欲しいのです」

「あなたはカルシスを憎んでいる？」

それは勿論、父子の過去の経緯を考えれば充分あり得る事ではあったが、これまで、アトラウスは一切そうした感情を他人に感じさせた事はなかった。むしろ、評判の低い父親を庇い、支えていこうとしているような姿勢を見せる事が多かったのだ。

幼い彼を幽閉し、愛情を注がなかつた父親。そんな父親でも、この世にたつたひとりの血の繋がつた親であるが故に、その愛情を得たいのだろうか、とカレリンダはひそかに思っていたものだった。そんな事もあって、アトラウスの言葉をすぐさま鵜呑みにする気には、彼女はなれなかつた。

「父を愛ようと、努力した時もありました。……でも、できなかつた。あの男が、母上にした事を思うと、どうしても。息子として、あの男を立ててきたのは、コーリイの為です。僕が父親といがみ合つている姿を見せれば、優しいコーリイが悲しむだろうと……でも、もう、僕の中でも限界が来ていた」

「限界？」

「あの男が姿を消した時、僕は、恐らく妬みから伯父上の呪殺を試み、失敗したのだろうと思いました。その時、僕はこう感じました……うまく逃げおおせたつもりでいるあの男を、何とか見つけ出し、思い知らせてやれないだろうか、と。僕は、伯父上に、父が行きそうな処に心当たりはないかと聞かれた時、ないと答えたけれど、本當は、父が夜半に慌ただしく出て行つた時、不審に思つて、館の者にあとをつけさせたので、父が王都方面へ向かつた事を知つていた。

でも、まさか王都へ行くとは思わず、その辺に身を潜めるつもりなのだろうと思っていた。それで、ひそかにその辺りを捜させていたんです。僕は……あの男を見つけて、裁きを受けさせようと一つの間にか、当たり前のようにそう考えていたんです。助けの手を差し延べるふりをして、捕らえようと。あの男がそうして衆人の前で処刑されれば、母上の魂もどれだけ安らぐかと。でも、一方で、実の父親の惨めな死を願う自分を忌まわしく思つ気持ちもあつた。いま思えば、それゆえに、昨夜は、ユーリイを突き放すような事を言つてしまつたのかも知れない。こんな恐ろしい自分を、清らかなユーリイに知られたくない、と

「アトラ、そんな事を考えていたの？」

震え声でユーリンダは口を開いた。

「あなたが忌まわしいだなんて……そんな訳はないわ。私が清らか？　いいえ、あなたのそんな気持ちを、まったく気づかずにいた私は、ただ、何も見えていなかつただけなんだわ。ごめんなさい、アトラ……」

「アトラウス、ではあなたは、生きている父親よりも、亡くなつた母上の事を思つていいのですね？」

カレリンダは冷静に尋ねた。アトラウスが味方なのか、敵なのか。それは、今後の一家の運命に必ず大きな影響を及ぼしてくる判断である。ユーリンダのように感情に流される事なく、それを見極めなければならない。

「伯母上、絶対に」

アトラウスは強い目でカレリンダを見つめ返した。

「僕が親として愛しているのは、亡き母上です。そして、許嫁のユーリンダの御両親である伯父上と伯母上。ルルアにかけて、誓います。僕は、ユーリンダと彼女の家族、つまりは僕の家族を、命をかけて護ると。昨夜は言えなかつたけど、今は違う、自由に動ける身になつたから、必ず護ると、誓います」

その言葉を聞いたカレリンダは、ふっと力が抜け、ソファに座り

込んだ。

「お母様？」

驚いて心配そうにユーリングダが駆け寄った。

「大丈夫です、ただ、少し安心したの」

カレーリンダは微笑した。そうだ、この青年は、大切な一人娘を託すに値する誠実な青年だと、長い年月をかけて見てきて、知つていた筈だ。忘れていたその事を、彼女は、今のアトラウスの言葉で、思い出す事が出来たのだ。

「ありがとう、アトラ……」

同日夜。

アルフォンス・ルーンを護送する金獅子騎士団の一一行は、ルーン公領内リンクスという町で宿泊する事となつていた。

『踊る金貨亭』というこの宿は立派なもので、位の高い貴族も利用する処である。アルフォンスも、ここに主人がこれまで最も敬意を払つてきた上客であつた。

騎士団長ウルミス・ヴァルディンは、この宿で最高の室をアルフォンスにあてがい、自分はその隣の部屋をとつた。そして、この町名産のリプ酒という果実酒と食事をアルフォンスの部屋へ運ばせ、夕餉を共にする事にした。

「いいのかい、罪人をこんな扱いにして？」

アルフォンスは、粗末な馬車に一日揺られてあちこちが痛む身体を、上等のソファにゆつたりと沈めながら尋ねた。

「構うものか。まだ罪が確定した訳ではない。大貴族様を質素な部屋に監禁する訳にもいかないだろう？」

ウルミスは冗談めかして答えたが、すぐに溜息をついて、まあ、王都が近くなれば、こうもいかなくなるかも知れないが、と付け加えた。

副団長のバランなどは、大逆人へのこの待遇に、あからさまに不満な顔を見せている。

やはり、国王が告発を是とし、激怒している事を知る者にとっては、裁判など待たずとも、アルフォンス・ルーンは憎むべき存在なのである。

「とにかく、今宵は飲もう。積もる話もあるしな」

「ああ、そうだな。飲まずには眠れそうもないしな」

アルフォンスは微笑して答えた。

「状況は、悪い。何ゆえに、陛下が簡単に告発を信じられたのか？」

それは、きみの弟の背後に、バロック公がついているからだ」

「やはりな……そういう事だろ？と思つていたよ」

アルフォンスは嘆息した。

国王の寵愛を一身に受けている王妃の祖父にして、先王時代からの宰相、アロール・バロック。その意志には、この国内において、何者も逆らう事は困難である。王妃は祖父に忠実で、国王は王妃の言いなりだからだ。

バロック家とルーン家は、領地を接している。歴史的には、ヴェルサリア建国後の両家の関係は悪くなかった。だが、現在、アルフォンスには、バロック公に疎まれる理由があつた。

アロール・バロックの子息ティラール・バロックと、長女ユーリンダの縁談を断つた件である。

従兄との婚約を理由にしたもの、バロック家側にすればそれは後出しであり、アロールにとってこれは、若造のアルフォンスから侮辱を受けたに等しい出来事だったのである。

アロール・バロックは、非常に矜持の高い人物である。己の顔に泥を塗るような行いをした者を許すことは、決してあり得ない。その事は、充分に理解した上で、アルフォンスはそれでも、愛娘の幸福の方を優先したのであつた。まさか、こうした事態に繋がるとまでは、予想もしなかつた事ではあつたが。

一方、カルシスは、アロールの三女アサーナを妻としていた。

彼の愚行により最初の妻に起こつた悲劇は、当時國中の噂話となつており、当然アロールの耳にも入つていた筈であつた。そんな中で、大切な娘のひとりを、そのように思慮が浅く、しかも伯爵に過ぎない男の後妻に、という話がもたらされた時、アルフォンスは驚きと戸惑いを禁じ得なかつた。無論、こちらから断る理由もなく、カルシスも大喜びで受けたものだつたが。

その後、アサーナは、身体的にも精神的にも弱い女性である事が

わかり、何とか一女をもうけた後は、身の回りを世話をする者以外、夫を含めた誰をも寄せ付けず、娘と共に引きこもる生活を送るようになってしまった。その為、アルフォンスや周囲の者たちは、アサーナがそういう性質である為に、厳格な父親に疎まれ、厄介払いされたのであるうと、心中考えたものだつた。

だが、今にして思えば。もしかして、アロール・バロックはこう考えていたのではあるまいか。

アルフォンスの次に、ルーン公爵の継承権を持つのは嫡男ファルシスであり、その次には弟カルシスである。だが、アルフォンスもファルシスも若く健康であり、ファルシスがやがて妻を娶つて男児を成せば、その子供たちがファルシスの次の継承権者である。普通に考えれば、カルシスがルーン家の長となる可能性は低い。しかし、アルフォンスとファルシスが、揃つて爵位を放棄せざるを得ない事態に陥れば。次のルーン公爵はカルシスである。彼と前妻の息子など理由をつけて廃嫡してしまえば、アロールの孫が、その次のルーン公爵となる……。

「きみとバロック公が疎遠になつた経緯については理解しているつもりだ。だが、それだけで、ここまでの大事を仕掛けてくるとは思えない」

「勿論、あちらには、以前から色々な疑惑があつたのだろう。カルシスが行方不明になつた時に、彼の舅に対して、ただアサーナ殿を氣遣うばかりで、裏を考えなかつたわたしは、あまりに迂闊すぎたというものだろう」

自嘲気味にアルフォンスは言い、リプ酒の杯をあおつた。

「カルシス一人で、こんな大それた事が出来る訳がない。カルシスにノイリオン、そして神官長だ。わたしはノイリオンにも恨まれているからな。そしてそれにバロックが手を貸している……」

「誰が敵で誰が味方なのかを、慎重に見極めねばならん。宰相の意向に逆らつても、きみを擁護しようという者は、少數だらう。だ

が、わたし以外にも、そういう者はいなくはない筈だ」

「ウルミス……わたしの為にきみの立場を悪くしては、申し訳が立たぬ」

ウルミスは酒杯を手にしたまま、にやりと笑つた。

「水くさいことを言つな、アルフォンス。わたしは宰相など懼れないぞ。きみの無実を確信した以上は、宰相が何と言おうとも、眞実を陛下にお伝えするのがわたしの役目」

勇ましく騎士団長は言い放つたが、陛下、という一言が出た途端、二人の表情は暗くなつた。

「たとえバルック公が口添えをしたにせよ、いつたいどうして陛下は、わたしが陛下の御身を害そうとしたなどと、信じてしまわれたのか。わたしはそれ程に、陛下の信薄い家臣であったのか。それがいちばん、情けないことだ」

現国王エルディス・ヴェルサリアが王太子であつた頃、アルフォンスは、かれに特に気に入られていた。

おべつかを使わず、実直で温かな視線で見守り、色々な知識を与えてくれるアルフォンスは、他の貴族たちからは感じられない親しみを王子に感じさせた。年に数度、アルフォンスが王都を訪れる度、王子は時間の許す限り、アルフォンスと共に過ごして、学問や剣の稽古に付き合わせたものだつた。

また、アルフォンスも、優しく纖細で向学心の強い王太子を格別愛しく思い、時間のやりくりをしては極力、彼の要求に合わせていた。

王太子殿下とルーン公は、まるでご兄弟のようにお仲がよろしくて、とは、宮中の婦女子には、当たり前の挨拶のように言われていたような間柄であつたのだ。

そんな間柄が、少し変化の兆しを見せるきっかけとなつたのは、王子の結婚である。

宰相の孫娘との盛大な結婚式を、アルフォンスも万人と共に、何

の裏心もなく寿いだ。

艶やかで賢しい王妃は、ヴェルサリアの繁栄に一層の華をもたらすであろう……誰もが、そう信じて疑わなかつたのだ。

だが、婚儀から二ヶ月の後、アルフォンスが若き国王に伺候した時、エルディス3世の様子は、以前とはやや異なつたものを感じさせた。

下々の者にも思い遣りを持つた性質であつたのに、些細な失敗で側仕えの者をきつく叱り、打擲した。衣服や室内の調度も、依然と打つて変わつて、華美なものを好むようになつており、それを入手した経緯を自慢げに語つた。

アルフォンスは、その変化をよく思わず、小姓を打擲した際、そこまでなさらずとも、と軽くたしなめた。すると、これまで、アルフォンスの進言は全て素直に受け入れてきた王が、急に不機嫌になり、会見を打ち切つてしまつた。その背後には、王妃リーリアの、鋭く冷たい視線があつた。

アルフォンスはこれを寂しく思つたものの、まだお若く、新婚の身であられるのだから、今だけの事であるだろう、聰い質をお持ちの方なのだから、と自らに言い聞かせ、王都を後にしたのだった。

その後、王と個人的に会話を交わす機会は殆どないままに、半年以上が過ぎていたのであつた。

アルフォンスの中では、国王は未だ、素直な瞳を持つた少年のままである。

だが、婚儀以降も常に側近くにあつたウルミスは、彼の変化を詳細に捉えていた。

国王を唯一無一の主として剣を捧げた彼は、僅かにも主君に対し、非難がましい言動をとる事はない。

しかし、思う事は自由である。

「王太子であられた頃と同じ陛下であると思つた。……わたしが言える事は、それだけだ」

幾分沈んだ口調に、アルフォンスも彼の含みを察した。

「わかつた」

だが、ウルミスは、まだ伝わっていない、と、もどかしい思いを持つた。アルフォンスは、王に目通りして直に話せば、きっと理解が得られる、という望みを持っている。しかし、現在の国王を知る者としては、決してそつは思えない。

カルシスが王への目通りを願つたあの日。

傍で一部始終を見ていた彼は、その時の王の様子を忘れる事が出来ない。

告発を聞いた王は、まず、うろたえ、視線を泳がせた。聰かつた王太子時代、彼はこんな表情を臣下に見せる事は、まず、なかつた。だが、この時点では、王にはアルフォンスへの過去の信頼が残つていた。

しかし。

泳いだ視線が王妃へ向かつた時、王妃はそれを真正面から受け、きつぱりと言い放つたのだ。

「これは、ゆゆしき事態ですわ。即刻、ルーン公を討つべきです

意見を求められた訳でもないのに、女だてらに……という気持ちを、内心持つてしまつたウルミス。だが、その言葉を聞いた王の頬には途端に赤味がさした。

「そりだ！！おのれアルフォンスめ、許せぬぞ！これまでの数々の恩義を忘れおつて、大逆の徒と成り果てたか。ウルミス！すぐに奴の首を、ここへ持つて参れ！」

こう叫んだのである。

だが、国の重鎮、七公爵の一人であるルーン公を、一方的な告発ばかりを鵜呑みにして討つ訳にはいかない。

まずは、王都へ召還し、弁明の機会を与え、それから罪状を判断すべき……そのように話を落ち着かせるのに、ウルミスと、居合わせた、常識的な人物として知られるラングレイ公は、かなり骨を折つた。

王妃の一言で、王はかなりの興奮状態となつていたのである。

王妃は、気分が不良だと、途中で退席した。

そして、王妃の祖父、カルシスの舅であるバロック公は、同席しながらも、不気味な沈黙を保っていた。ウルミスとラングレイ公の説得には、一言も口添えする事なく……つまり、逆の立場であると、無言で示していたのであつた。

「それから、もうひとつきみに知らせておく情報がある。まだ公にはなつていながら、王妃様は、『懷妊しておられる』

「なんと、そうなのか？ それは目出度い事だ！」

思わずアルフォンスは微笑して言つた。ウルミスは呆れ顔になつた。

「……勿論、目出度い事だが、きみの立場で、それが言えるのか？」

王妃様がお世継ぎをお産みになれば、バロック家の権勢は、最早何者も阻む事が出来なくなる」

「ああ、しかも知れないな。だが、エルディス殿下……いや、陛下に、御子がお生まれになると思うと、わたしは、自分に孫が出来

るように嬉しいよ。まだ、孫はないがね」

ウルミスは嘆息した。

「なんと人の良い。これが大逆の疑いをかけられた者だとは。こんなお目出度い者に、呪術で暗殺など、企めるものか」

ウルミスは、少し酒がまわってきたようだった。

「おや、まだ疑っていたのかね？」

アルフォンスは、華奢な外見に反して、酒に強い。酔つて頬を赤くした親友を見やり、静かに笑つた。

「そういう訳ではない。今は、一片もきみを疑う気持ちはない」むつとしてウルミスは言い返した。

「判つている。冗談だ、氣を悪くしたなら謝る」

「冗談にする事でもなかろうに」

「この一人だけの場では、いつそ冗談の種にもしたくなる。まったく、未だに、悪夢の中にいる、としか思えぬ状況だからな」

嘆息したアルフォンスに、ウルミスはいきなり頭を下げた。

「済まぬ、告白しておぐが、実際にきみに会つまでは、もしや……とこう気持ちは心のどこかにはあつたのだ。この世には、時として、あり得ぬと思い込んでいた事が起きたからな。弟どとの折り合いが悪い事は知つていたから、かれの告発のみでは、鼻で笑つて済ませていたであろうが、ルルア大神殿の神官長のお墨付きは大きい。それに、陛下の即位後、以前とは打つて変わつて、きみは陛下に冷遇されていたようだったから……」

「言つたな、ウルミス」

アルフォンスは苦笑し、酒杯をあおつた。

「きみは、金獅子騎士団長として、陛下の御為に、すべてを疑つてからねばならない立場だ。何も詫びる必要などない、職務を果たしているだけだ。……きみの気持ちには、本当に感謝している。たとえ我が命運がどのように尽きようとも、この事を忘れはしない」
「礼を言われる程の事はしていない。本当に疑いを晴らす手助けが出来たら、その時に礼を言つてくれ」

「無論、その時には、出来る限りの礼をするとも。きみの望むどんな形ででも、謝意をかたちにしよう。……まったく、ルーン公爵が、言葉で感謝を伝える以外、何の術もないとは、情けない限りだ」

視線を落としたアルフォンスに、ウルミスは答えた。

「感謝の形が欲しくてきみの味方になる訳ではない。あくまで、己の信ずる所に従っているだけなのだから、何も気にする事はない。それより、必要な事を話そう。誰が味方で誰が敵か、という事だ……」

ほろ酔いではあるが、ウルミスはきちんと考えを巡らせていた。「裁判には、被疑者が王族やそれに準じる者である場合の形式で行われるだろう。つまり、きみを除く七公爵全員が王都に召還されるという事だ。最終的な判断を下すのは陛下だが、彼らがどう陛下に意見するかは大きい」

アルフォンスは頷いた。

「バロック公はわたしを死罪にしたい。ヴェイヨン公は当然、バロック支持だろう。ラングレイ老公は、公平な方だから、話によっては理解して下さる可能性があると思う。ローズナー家のスザナは、幼い頃、よく遊んだ仲だ。長じてもわたしは心を許せる相手だと思つていてるし、味方になつてくれる信じたい。ブルーブラン公リッターは、どう出るかまつたく読めないな。グリンサム家も同様だ」堅い板張りの馬車に揺られながら一日考えていた事を、アルフォンスは簡単に纏めた。

「読めない、とは言つても、ブルーブランとグリンサムには、わたしに付く益は特にない。リッターは、独特の思考をするから、かれの興味を引ければ、話を聞いてくれるかも知れぬ。グリンサムは、体制が整っていないから、バロック公に楯突く事はあえてしないだろうな」

「わたしも同意見だ」

ウルミスは答えた。

「ローズナーの女公爵どのは、快活で理知の方だ。話を鵜呑みに

する事もないだろうし、理由もなくバロックに擦り寄る事もないだろ。老公に関しては、告発を聞いた後も、しきりにわたしに、アルフォンスがそんな真似をするなど信じられない、と繰り返しておられた。きみが直接話をすれば、きっと力になつて下さると思う。ただ……このお一方が支持に回つても、陛下に影響を及ぼす巴ロックを覆すのは難しいかも知れない。バロック家と関係の深いヴィエイヨン公は仕方がないが、あと残りの一派を、味方に付けられれば、望みのある展開になるかも知れない

「なかなかに難しいな」

アルフォンスは苦笑した。

「リッターといサーナ前公妃か。どちらも掴めない人物だ。……だが、汚名を灌ぐ為には、難しいとばかりも言っておられぬ」

「面会の手筈など、出来る事は何でもやるから、頑張ってくれ」

ウルミスは酒杯を掲げて言った。

夜は更けてゆく。

小ちく響く足音に、リディアは浅い眠りから引き戻された。狭い高窓から、淡い光が射し込んでいた。朝になつたらしい。

足音は、ひとりのものではない。

リディアは、血らを激励し、訪問者が覗く前に、扉の格子から外を窺つた。

ひとりは、あの牢番のような男だった。もうひとりは、どうやら昨日の訪問者とは違う人間のようだ。

ようだ、と曖昧な印象なのは、その人物が、すっぽりと黒いードを被り、目の下まで黒布で顔を覆い、黒いマントに身を包んでいるからだ。顔は見えないが、体格は昨日の男より小柄だった。

その者は、扉の前に立ち、険しい顔で立っているリディアを、品定めするような目で見つめた。

「なかなか気が勝っているような娘だな。これなら、試練にも耐え得るだろ？」

牢番の男に向かつて、といつより、独り言のようだ。黒衣の男は呟いた。

「試練……？ 試練ってなに？」

もしかしてそれは、おぞましい呪術の為に心臓を抉られる事だろうか？ 男の言葉の持つ不吉な響きに、リディアは内心怯えたが、なるべく面には出さないように努めた。

だが、彼女の心を読んだかのように、男は低く笑つた。

「命が惜しいのか？ 安心せよ、おまえを殺しあせぬ」

「……じゃあ、試練つて、なに？」

なるべく多くの情報を、この男から引き出すとと思つたリディアは、重ねて質問した。黙つているよりはいいだろ。

「いまは言えぬ。おまえを無闇に怯えさせるのは本意ではないから

な

言葉とは裏腹に、男はリディアの恐怖を煽る事を愉しんでいるようだった。

リディアにもそれが判つたので、男を悦ばせぬよう、今は、恐ろしい想像はしないよう努めた。

「おまえのその気丈さがあれば、試練に耐えられる。耐えた暁には、何でも手に入るぞ」

「何でも……？」

「そうだ、美しいドレスも宝石も、望むがまだ。命を落とさず持ちこたえれば、姫君のような生活が待つていて。普通に侍女として仕えていれば、一生手に入る術もないものだ。嬉しく思え」

「私はそんなものは欲しくないわ！ 取るに足りない侍女の身で、そんな身の丈に合わない望みを抱いた事なんかない。それよりも、私を放して。私は、ユーリンダ様のところへ帰らなくては！」

「忠誠心、か？ 違うだろう？ 本当に帰りたいのは、公女ではなく公子のもとではないのか？ それこそまさしく、分不相応な恋慕ではないのか」

「なつ……！」

リディアは絶句した。何年間もひた隠しにし続け、同僚の誰ひとりにも気付かれる事のなかつた胸の内を、なぜこの男は安々と言いつて居るのか。

でも、違う、と思つた。ファルシスに逢いたい、その声を一言でもいいから聴きたい、という鋭い願いは常に心にあって、それが叶わぬ事で内側から彼女を傷つけ、血を流させてはいたけれど、いまユーリンダの元へ帰り、護らなくてはならない、護りたい、という思いもまた確かにここに存在しているのだ。

「私が帰る場所は、ユーリンダ様の傍。姫様が私を必要としなくなる時まで、私は姫様をお護りし続ける。それ以外には何もない……」
一介の侍女が、何かを想つたとしても、それが何かに影響を及ぼす事などない。私の心のなはは完全に私だけのもの。おまえなどにと

やかく言われる筋合いはないわ」

リディアは男を睨み付け、能う限り平静な口調を保ちながら言った。男は甲高い声で笑った。

「なかなかにしつかりした声で鳴ぐじゃないか。それでこそ、我が神への供物に相応しい」

「我が神……？」

「愚かにして哀れなる娘よ。我が神の『え給つ試練に耐え得た時、おまえは最早いまのおまえではない。おまえだけのものであるおまえの心の中も、今のものは全く異なつたものとなつてゐるだらう。その時にまた、話をしてみたいものだ』

そう言つと、男は踵を返した。

「待つて！ どういう意味……！」

だが、男はもう、リディアへの興味をなくしたように、振り向こうとはしなかつた。

牢番の男に、彼女が体力を失わないようになしつかり食物を『える』ように指示をし、そのまま、廊下を歩み去つて行つた。

聖炎騎士団団長ハーヴィス・ウイルムが辞した後、次に来るのは、アルマヴィラ都警備隊長のダグ・ダリウスに違いないと、ファルシスは予想したが、それは見事に裏切られた。

夕刻頃になつてもダリウスは姿を見せず、代わりに、室に来た見習い騎士は、意外な名を告げた。

「レディ・ローゼッタ・ドースが、面会を希望されています」

ファルシスは驚いたが、すぐに気を取り直し、面会室へ向かった。

ローゼッタ・ドースは、アルマヴィラ地方のオークという小市を治めるゼファード・ドース子爵の令嬢である。

年齢は22歳、独身。嫁き遅れと言われても仕方のない齡だが、当人は気にしていないし、家族は諦めている。

美人だが奔放な性格で、恋多き女性として知られる。

2年前、7歳年下のファルシスに、恋の手ほどきをしたのが、このローゼッタだった。

活潑だった子供時代を経て、その時期のファルシスは、優秀で礼儀正しいが打ち解けにくい少年と周囲に思われていた。

そんな公子と出会ったローゼッタは、灰色の世界を生きていた彼にカリそめの色彩を与え、呼吸し易い仮面の被り方を教え、ひとときの享楽を知り甘いだけの時間を過ごすことは決して己を汚すことではない、と囁いたのであつた。

二人の男女の関係は、半年ほどで終わりを迎えたが、以後も、ローゼッタは、時には姉のように、時には恋人のように、ファルシスを見守り、また、彼もそれを受け入れていた。

この数ヶ月は逢つていなかつたが、呼吸が苦しくなつた時、ファルシスは何度も彼女のもとを訪れていたものだつたのだ。

面会室に入ると、ローゼッタは椅子から立ち上がった。

「まあファルシス、なんて顔色なの」

豊かに波打つ黒髪の豊満な美女は、公子の姿を見るなり、まず、そんな風に言った。

「ローゼッタ……わざわざ来て下さるとは、思いもしませんでしたよ。お父上にはちゃんとお断りされたのですか?」

「父のことなど関係ないわ。今頃、兄たちと家族会議でも開いていいでしようけれど」

「関係ない、という訳にはいかないでしょう。貴女はドース家の長女なのだから」

ローゼッタは軽く肩をすくめた。

「そんな固いことを言わないで……折角逢いに来たのに、あなたつて、嬉しくないの?」

「それは、嬉しいですが……」

彼女の真意を測りかねたファルシスに近づき、その首に、ローゼッタは白くしなやかな腕を回した。

「あなたが心配で駆けつけたのよ。大逆罪なんて恐ろしい……でも、あなたは関係ないわよね? ねえファルシス……」

潤んだ瞳で見つめると、ローゼッタはそのまま、ファルシスの胸に顔を埋めた。そして、小声で囁いた。

「……皆、固唾を飲んで成り行きを見守っているわ。ドースもオルセンもイフアースも……八割がた、ルーン公支持よ。事前にカルシス卿に懐柔されている者もいるようだけど。ただ、どにも、表立て動くことは出来ないわ。わたしは、繫ぎ役としてここに来たの。安心して、まだ手はあるわ」

ファルシスは驚き、次いで思わず力添えに胸が熱くなつた。

ローゼッタが名を挙げたのは、いずれもアルマヴィラ地方の小貴族である。

王家から爵位を受け、忠誠を誓つたものではあるが、アルマヴィ

ラに限らずどこの地方でも、王家直轄地を除いては、ハ公国時代から地方貴族たちはそれぞれ、王家より、地方の長である公爵家との関わりのほうが遙かに深い。

今回のことでのことで、小貴族たちがどのように判断をするかは、ルーン家の行く末にとって重大な問題である事は、ファルシスには痛いほどに判つていた。

王家に叛旗を翻す事は恐らくあり得ないのだが、かれらがアルフォンスの無実を信じるか、カルシスにつくか、は、最悪の事態に陥つたときに、母や妹を逃がす事が出来るか、という点には大きく関わつてくる。

「獅子が聞き耳を立てているからあまり話せないけど、それを伝えに来たのよ」

「ありがとう、ローゼッタ……」

身体を押し付けるローゼッタを、ファルシスは思わず芝居ではなく、力を込めて抱き締めてしまつていた。

それから、ファルシスは、この意外な援軍に、もうひとつの大好きな懸念について相談する事を考えた。

「ローゼッタ。前に話した、妹の侍女のことなのだけど……」

「あなたの想いびとのことね」

『姉』としての顔を持つローゼッタは、リディアに対する、ファルシスの胸のうちを知っていた。『姉』でありながらもかつては『恋人』であった彼女にしてみれば、複雑な感情がまったくないと言いつ切れるものではない。それでも、ファルシスは、彼女の人となりをよく知っていたから、おのれの信頼を裏切るようなことはないと、信じることが出来た。

ファルシスは、彼女を抱き寄せたまま、早口で言った。

「何者かに拉致されました。最初は、叔父の仕業かと思つたけど、この状況で、わざわざ妹の侍女を狙つて拉致する益が掴めない。貴女の情報網で、もし何か行方に関することが知れたら……」

「わかつたわ。私に出来る限りの事をしてみるわ」

「そう囁いて、ローゼッタは身を離した。

「ファルシス。たとえ父から勘当されて何の身分も財もない女になるとしても、あなたのことを想い、信じているわ。また、逢いに来るわね」

これは、扉の外の耳に入るよつに紡いだ言葉だった。そうと判つていたが、ファルシスは心からこう応える。

「ありがとう、ローゼッタ。貴女の気持ちは、僕の大切なものです」

ローゼッタの纏つた香水の匂いがほのかに残るほどの頃、次の面会人がファルシスの室を訪れた。

「アトラウス・ルーン様がおみえです」

ファルシスの機嫌を伺つかのように、やや小さめの声で見習い騎士は告げた。

ファルシスとアトラウス。

ルーン公爵の、嫡男と、甥にして愛娘の許婚。

幼馴染であり従兄弟同士のふたりは、これまで仲違いしたこともなく、二人の道は、常に同じ方角に続いているようだつた。

華やかで社交家の次期領主と、穏やかで実直な従兄。

間もなく義理のきょうだいとなり、アトラウスは、義兄となる従弟の片腕となり、ルーン家の繁栄は益々のものとなるであろう。つい最近まで、誰もがそう信じて疑わなかつた間柄のふたりである。

だがいま、ふたりの道は、大きく逸れようとしているかとみえた。アトラウスの父親カルシスが兄公爵を裏切り、そのために、アルフォンス・ルーンとその家族の命運は、いまや風前の灯火といつても過言ではない。

アトラウスは、父親の計画にどれほど関与していたのか？

そのことが、自分の、母の、そして妹の運命を大きく変えるのだと、ファルシスは痛いほどに感じていた。

アトラウスが味方であつてくれたら……と、願いつつも、聰明なかれが、愚鈍な父親のこの、身の程にそぐわない大陰謀に、まつたく気づかないなど、あり得ないのではないか、という疑いが、ファルシスの身のうちににくすぶつっていた。

胃の奥底が焼けるような思いで、ファルシスは従兄を待つた。

こんなに早く彼がやって来る事も、予想外だつた。

昨日は彼が謹慎の身で、今日は自分が幽閉の身である。

運命の皮肉にファルシスは唇を歪めた。

「ここにちは、ファル。たいへんことになつたね」「

そんな風に、アトラウスは挨拶した。

いつもの柔和な笑みを浮かべ、まるで「昨日の雷雨で大木が折れたね」とでも話すような口調である。

「ああ……そうだね」

ファルシスは、自分も笑顔で返そうかと思ったが、やめておいた。余裕のなさを見せたくないが、彼ほどに自然に笑う自信がない。「顔色が悪いね。大丈夫かい？」

「ああ、寝不足なだけさ」

軽く肩をすくめると、ファルシスは少し落ち着きを取り戻した。どこかで話を窺っているであろう金獅子騎士団は気になるが、白々しい会話を続けるような時間はないのだ。

「用件はなんだい？」

アトラウスは頷いた。

「コーリンダに会つてきたよ。母君にも」

「……二人はどうしていた？」

「元気がなかつたよ」

当然のことをアトラウスは言った。ファルシスは平静を装いつつも、鼓動が早まるのを自覚せずにはいられなかつた。アトラウスは明らかに、彼を苛立たせ、挑発しようとしているようだ。

「だろうな。それから?」

「それから? そうだね、僕が、絶対にきみたちを守る、と言つたら、泣いて喜んでいたよ」

アトラウスは笑みを浮かべたままである。しかし、いつからか、

その笑みからは、見慣れた温かさが消えていた。

「可愛いね……ユーリンダ……いついかなる時も、僕信じて、ついてくる……まるで従順な犬みたいだ。知っていたかい？ 僕は、犬が好きなんだ……」

「アトラ……何が言いたい？」

「どうしたんだい、怖い顔をして？」

「守る、という言葉は、本気なのか？」

ふっとアトラウスは噴きだした。

「本気が、だつて？ ファル……きみらしくもない、愚鈍な質問だ」

「どういう意味だ」

いまやファルシスは、険しい顔つきで訪問者を見据えていた。家族同然に理解していると思つていた相手が、まるで見知らぬもののように遠い。

「本気、という言葉に、何の意味がある？ 本気を出せば、伯父上を救える？ 本気を出せば、金獅子騎士団を王都に追い返せる？ 違うだろ？……言葉も誓いも、何の効力もない。必要なのは、力だ。そして、僕には、何の力もない。そうだろう？ ブラック・ルーン……一族の出来損ない、それがこの僕だ。ルーン家存亡の危機にも、指をくわえて見ていいしかないのさ」

「アトラ……本気なのか？ 本気でそんな風に……」

「ほらまた出た、本気。僕の本気がそんなに気になるのかい？ ああそうだ、愛しのユーリンダは、本気で守るよ。僕の子供が将来ローン公爵となる為には、濃い血が必要だ。そのへんの貴族の娘では、黒髪の子供が生まれてしまう可能性が大きいからね。それから、きみの母上は、ノイリオン殿が、本気で守ると思うつよ。なんと言つても、20年もかけた横恋慕が、ようやく想いを遂げられる訳だからね」

「な……なんだつて？」

「きみは誰が守るだろ？ 本気で守るよ、義兄さん……それでも言えば、きみも泣いて喜ぶかい？」

次の間に控えていた見習い騎士は、部屋の中から突然聞こえた大きな物音に、仰天して駆けつけた。

彼と殆ど時を違わずに、どこからともなく金獅子騎士が一人、部屋の入り口に姿を現した。

「やめたまえ！」

怒号と共に、ファルシスは後ろから羽交い絞めにされた。もう一人の騎士が、アトラウスを助け起こした。

「怪我はないですか？」

アトラウスは頷き、唇の端に滲んだ血を袖で拭つた。

ファルシスが彼を殴り倒し、更に馬乗りになり、襟首をつかんでいるところに、人々が入ってきたのである。響いた音はアトラウスがぶつかった小テーブルが、ひっくり返った時のものだった。

ファルシスは騎士の手を振り払つた。

「ファルシス卿……貴殿は謹慎し、王都からの沙汰を待つ身ですぞ。面会人を殴り倒すとは、いったい何事ですか？」

問うたのは、彼を羽交い絞めにした騎士で、この宿舎を囲み、ファルシスを見張る一隊の責任者で、ロギンズという男だつた。

「なんでもありません。ただの、きょうだい喧嘩みたいなものですよ」

応えたのはアトラウスだつた。ファルシスは暫く目を伏せていたが、「お騒がせして申し訳ない。つい、神経が高ぶつてしまつて」と詫びた。

「きょうだい喧嘩！ ルーン家では、きょうだい喧嘩がおおはやりなのですな」

揶揄したのは、もう一人の、ウルブという騎士だつた。だがロギンズは、こうした軽口を好まず、きつい視線を送つた為、ウルブは面白くなさそうに口をつぐんだ。

「済まなかつたよ、ファル。きみの気持ちを、もつと思いやつて話

すべきだった

いつもの柔らかな口調でアトラウスは言った。

「いいから、今日はもう帰つてくれ」

そっぽを向き、からうじてファルシスはそう返した。

「また来る。今度はもっと、良い話をもつてこられるといいんだが」

そう言って、アトラウスは騎士たちに挨拶して退室した。

疲れた様子で椅子に座り込んだファルシスを、騎士たちは少しの

間、窺うように見ていたが、やがて出て行つた。

ファルシスは、指が痺れるほどに拳を握り締め、机にのせたその拳に頭をつけた。

拳のなかには、一切れの紙片が収められていた。

ファルシスとアトラウスがひと騒動を起した同じ頃、コーリンダのもとにも来客があつた。

刻は夕暮れ。

厳戒態勢の館にいきなり、白馬に跨り臆する様子もなく近づいた若い男に、慌てて金獅子騎士が駆け寄る。

「待て！ 許可なき者はなんびとたりとも、ルーン公邸に近づくこと、まかり通させぬ！」

剣の柄に手をかけそうな勢いの騎士に対し、男は眉間に皺を寄せつつこう返した。

「俺は、宰相アロール・バロックの息子、ティラール・バロック。誰の許可が必要なのか、教えてくれ」

騎士は一瞬逡巡したが、男の容貌に、式典の折にみた宰相と相似するものを見出し、退いた。

「失礼致しました。宰相閣下の御命であれば、どうぞお通り下さい」

ティラールは僅かに複雑な表情を見せたが、頷き、馬を進めた。

ティラール訪問の報に、コーリンダは戸惑いを感じるばかりだった。

「このところ、来訪がなかつたので、彼がまだアルマ・ヴィラに滞在していることすら、意識の外だつた。

今の窮状に、もつと親しい者たちも誰一人、訪れてはくれぬのに、なぜ彼が？と訝しんだ。

実際は、彼以外の訪問者は皆、金獅子騎士によつて追い返されたのであるが。

「姫。此度の事は、さぞかしお胸をお痛めの事と存じます」

そんな風にティラールは言った。

「勿論、そうですね」

コーリンダは返した。今回の出来事に、自分がこのティラールとの縁談を嫌がつた事が絡んでいるかも知れない、などとは思い至らない。生まれて初めて経験する、辛く不安な気持ちを慰める為にわざわざ来てくれたのだと思うと、いくら嫌いな相手でも、僅かに気持ちが和らぐ。だが、だからと言って、愛想笑いをする気にはならない。

「ご不自由はありませんか？私に出来る事なら何でも助力致しますゆえ、何なりと仰ってください」

「不自由はありませんが……」

コーリンダはふと言い淀んだ。

（何でも助力？）

その台詞で初めて彼女は、相手がこの国の権力者の息子である事を思い出した。

「お助け下さると仰るなら、どうぞ父をお助け下さいまし。あらぬ疑いをかけられているのです。父は大逆の罪を犯すような人柄ではございません。そのことは、娘であるわたくしが誰よりも知っています。どうか、お父君の宰相閣下におとりなしをお願い下さいませ」
もしもこの願いが、同じ宰相の息子でも、彼の兄たちに向けられたものでもあつたなら、たちまちに一笑に付されたものであつたらう。バロック家とルーン家の確執は、彼女の意向に端を発しているのであり、それをよく理解していないのは、当事者のなかでは彼女くらいのものであつたのだから。

だが、ティラールは、軽くあしらひ代わりに、真摯な眼差しで頷いた。

「正直に申し上げると、末っ子で不肖の息子である私の言葉に、父がどれ程耳を貸すかは判りません。ですが、姫のお言葉はきっと、わが父に伝えましょう」

「ほんとうですか？」

コーリンダのやつれた顔に、ほのかに赤みが差した。彼女の感じ

やすいこころは、この一言で、目の前の優男に対する評価を変えた。
(誰もが助けてくれようともしないのに、冷たくしていた私の願い
をこんなに真剣に聞いてくれている)

と言つても勿論、恋愛感情とは程遠いものである。許婚のアトラ
ウス以外の男性が、恋愛の対象となるなど、ほんの子供のうちから、
コーリンダには考えもつかなかつた事なのだ。

「ティラール様、ありがとうございます。今のお言葉でわたくし、
どれほど力づけられたか、言葉にしようもない程ですわ。色々、あ
の、失礼な事も致しましたのに……」

ティラールの訪問に対し、ショッちゅう、理由をつけては会わず
に追い返していたコーリンダである。

「なんの、どうかお気になさらないで下さい。アルマヴィラに滞在
させて頂いている間に、ルーン公の実直なお人柄に折につけて触れ、
誠に感じ入っています。罪を犯されるようなお方ではない。そのこ
とをきつと父に知らせましょう。本当にお役に立てた時には、私と
いう男の評価を、改めて頂ければ望外の喜びですが」

もちろんですわ、と言いかけた時、扉がノックされた。

「お話中失礼致します。ルーン公妃が、ティラール様と面会を希望
されております」

執事の言葉に、ティラールは軽くとまどいの表情を浮かべながら
も、勿論、と頷いた。

その返事を待つていたように、カレリンダが執事の後ろから現れ
た。

「つつうつと仮眠をとつてたが、ティラールの来訪を聞き、すぐ
に身なりを整え、しゃんとしていた。

「これはルーン公妃殿下、ご挨拶が遅れ、失礼致しました」

「とんでもございませんわ、ティラール卿。わたくしこそ、もっと
早くご挨拶致すべきでしたわ」

カレリングダの瞳はいつもとは違う光を帯びていた。

「お母様！ テイラール様は、お父様の無実について、宰相閣下におとりなしをして下さるやうですの！」

幾分得意げに、ゴーリングダは言ひた。

「おとりなし？」

「そうよ、お父様が無実である事を、ティラール様は、ちゃんとわかつて下さったわ」

単純な答えに、カレリングダは軽く嘆息し、ティラールに向き直つた。

「本日は、どのような用件で、娘をお訪ね下さったのでしょうか？」

「……それは無論、ゴーリングダ姫が、心細い思いをなさつてているであろうと……」

「心細いのは当たり前ですわ。父親が、謂れのない罪を着せられているのですから。それにしてもティラール卿におかれましては、この事を、驚かれるようなこともなかつたのではないか」

思いを、カレリングダは率直に口にした。

聖炎の神子とはいっても、政治的な駆け引きの手ほどきを受けた訳でもない。

正しいやり方かまつたく確信が持てなくとも、夫と子供たちを守る為に、思うように鬪うしかない。

バロック家の息子……彼がゴーリングダに近づいた事が、災いの発端としか思えない。

しかし、もしもこの若者の愚かさが、飾りではなく、本心からゴーリングダに惚れているとするならば、最大限に利用するべきである。

「どういう意味ですか」

怪訝そうにティラールは問い合わせた。見る限り、一心があるようではない。しかしカレリングダはもう後にはひけない。

「お父君から、このような事が起こる、と、前もってお聞き及びだ

つたのではないですか、と申し上げているのですわ

「……」

ティラールは暫し考え込み、それから慎重に口を開いた。

「妃は、父がルーン公を陥れた、とお考験なのですか

「……証拠は何もありません。ですが、宰相閣下が是としなければ、今回の騒動は起こらなかつたのではないかと思つています」

「陛下に直訴したのは、妃の義理の弟どのですよ？」

「かれは宰相閣下の娘婿ですわ」

わかりきつたことをなぜわざわざ言わせるのだろう？もしかして、自分は誘導されているのだろうか？カレリンダは、急に心細くなつた。目の前の、誠実そうな表情を浮かべた優男の真意は、まったく読めない。

その時、ゴーリンダが口を挟んだ。

「何を仰つてゐるの、お母様！」

「え？」

「ティラール様は、お力添えをお約束して下さつたわ。それなのに、そんなこと……失礼ではありませんの？」

ゴーリンダは憤慨していた。

宰相バロック公がどう思つてゐるのか、彼女にはわからない。しかし、その息子ティラールは、たつた今、助力を誓つてくれたばかりである。そんな彼を糾弾するような物言いは、失礼ではないのか。「ゴーリンダ。これは大事な話なの。要らない口を挟まないで頂戴」また娘が見当違ひの事を言い出した…とカレリンダは思い、思わず幼子を叱る様に、有無を言わせぬ口調で言つた。

「妃。要らない口ではありません」

ティラールは眉をひそめて言つた。

「わたしはゴーリンダ姫を訪ねてきたのです。姫のお言葉はすべて、わたしには貴重なもの。姫がわたしを頼りにして下さつた事は、わたしにとって感涙にいたる事。わたしは暫く父と会つていませんし、父が何を考えているか、正直に言つて、わかりません。しかし、父

の息子である事を最大限に利用し、姫どー一家の為に役立とうと思つてゐるところです。どうか、姫と同じように、わたしを信じていただけませんか？」

そう言われても、カレリングダはまだ、この若者を信じる氣にはなれなかつた。

だが、これ以上ここで責めても、事態が何か好転する筈もない。カレリングダは俯いた。

「申し訳ありません……ティラール卿。ご親切なお言葉には、痛み入るばかりですわ。わたくしは、混乱しているのです。突然、あらぬ疑いを突きつけられて……『ご理解頂けますわね？』

「勿論ですとも」

ティラールは、氣の毒そうな表情でカレリングダを見た。

「ユーリングダ姫の母君に対し、悪く思う筈もありません。どうか今は、休まれて下さい。わたしはこれより、父に書状をしたためます。朗報を待つていて下さい」

嬉しそうなユーリングダと共に、カレリングダは礼を言つしかなかつた。

「国王陛下のお渡りで」) やこます、

侍女の告げた言葉に、王妃の柳眉は逆立つた。

「不例やえ、お控え下さるよう、伝えた筈じや！」

王妃リーリアは、初めての妊娠による悪阻に苦しんでいた。

食べ物の匂いを嗅ぐだけで嘔吐し、果汁を口にするのがやつとそれゆえに、王妃宮に勤める者すべてが、口臭を放たぬよう、果実以外のものを口にする事を禁じられていた。

国王の口からば、オリーブ油の匂いがした。悪阻中の王妃は、その匂いを疎んじていた。

「何ゆえ、ちゃんと陛下にお伝えせぬのじや。まったく、無能な者ばかり！」

ハツ当たり気味に王妃は嘆いた。

だが、実際に国王エルディスが室に入ると、リーリアは柔らかな笑みを浮かべて迎え入れた。

「陛下、お疲れでございましょう。何か飲み物を用意させましようか」

エルディスは頭を振った。

「よい。早うそなたと休みたい」

これを聞いて、一瞬、リーリアの面に苛立ちがよぎった。豪奢なソファに座り込んで、疲労をあらわに頭を抱え込んでいる国王は気づかない。

「陛下……陛下の御子は、生まれ出でれば親思いの素晴らしい御子に育ちましが、今は、母親を苦しめてばかりですのよ」

この言葉によつやく、国王は、何よりも寵愛している大切な王妃の不例を思い出した。

「そ……そつか、そつであつたな。腹の御子が、そなたをな。身体

の調子はどうなのか？何か、要るものはないか？」

「祖父が色々と届けてくれますので、間に合ってありますわ。それにわたくし、今は果汁しか口に入れられませんの」

幾分素つ気なくリーリアは応えた。エルディスは疲れも悩みも忘れ、愛妃の機嫌を窺うようにおどおどと彼女の肩を撫でた。

「そ、そうか、随分難儀なことだな。確かに、瘦せて顔色も悪いようだ。男にはようわからぬが、充分に身体を労わるのだぞ。何か食べられそうなものがあれば、何でも用意させるから言つてくれ」「食べ物のことなど、今は考えたくもありませんわ。それより、わたくし、身体が熱くて、侍女に扇がせていないと眠ることが出来ませんの。ゆえに、ここでは、陛下がゆっくりと御休みになれないかと案じて、そのように伝えさせたのですが……」

暗に同衾を拒む言葉だったが、その意味に気づいた様子もなく、国王は首を振った。

「さぞや辛かるうに、余の睡眠を案じてくれるとは、さすがそなただな。扇がせるのは構わぬ。そなたの寝台で休みたい。も、もちろん、そなたが暑くないよう、少し離れておるからな。触れたりはせぬから、よいか？」

そう言われては、否とも言えず、お心遣い嬉しく思います、と答えるしかなかつた。

嫁いだ時、無論リーリアは男を知らなかつたが、国王を籠絡すべく、様々な闇の手ほどきをうけていた。

彼女に諸々を伝授したのは、祖父アロールの手がつき、ひそかに子をなしている侍女長。

政治や学問ばかりに関心を向けていた若い王が、自分の虜になつてゆく様は、なかなかに愉快なものだった。

夫に対し、愛情もあるが、それ以上に、大胆にも、氣に入りの操り人形にしたい、という気持ちが強い。

だが妊娠が判つて以来、なぜか、夫に触れられることが、いやで

ならない。

『孕むとそのようになる女性は多「ひ」いりますから、おかしなことでは「じ」いません。なれど、姫様は王妃陛下。いつもいつも夫君を寄せ付けぬ、といつては参りませぬよ』

輿入れの時、リーリアに付いてきて、そのまま王妃宮の奥事情を取り仕切っている侍女長のエラは言っていた。

勿論、国王の心が王妃から離れぬよう、アロールに含みを持たされ、才氣芳しいが我慢でもある若い王妃の行動を監視する役目を担つていてる。

怖いもの知らずのリーリアも、祖父に直結しているこの中年女の言葉は、そつそつ無視する事はできなかつた。

「では、休みましょうか。イーラ！ 扇を持つておいで。朝まで手を抜かずに扇ぐのよ」

王妃は次の間に控えている侍女に言つた。だが、エルディイスは妃をどぎめた。

「待つてくれ……まだそなたと話をしたい。アルフォンスの事だ」「またそのお話ですの！」

思わずリーリアはそう言つてしまつた。

このところ、国王の頭の中は、ルーン公背反の件でいっぱいの様である。それが、リーリアの気に入らない。彼の初めての御子を宿している自分にこそ、もつともつと、関心を持つべきである。

だがさすがにリーリアは、その感情をあからさまにするほど愚かな女ではなかつた。

「お氣の毒な陛下。あれほど信頼されていたルーン公の大逆は、どちらほどご心痛か、このリーリアは、よくわかつていますわ。今頃は、ルーン公は身柄を拘束され、こちらへ向かっています。どのような弁明をするかは分りませぬが、カルシス卿の告発には、真偽を疑う余地はありませんもの。七公裁判で速やかに罪状が確定すれば、公とその家族は死罪。王家への忠義篤いカルシス卿を新たルーン公

とし、それでお終いですわ。もつそんなんに、お悩みにならないで下さいまし

「死罪……か……」

国王は咳いた。兄とも友とも慕っていたアルフォンスを、自ら裁く、という現実に、エルディイスは怯えていた。

アルフォンスに、自分と釣り合う年齢の娘がいると聞き、その姫を妃に、と望んだ事もあったのだ。彼の娘なら、さぞかし美貌であろう、という風評に惑わされたのではなく、アルフォンスと義理の親子になれたらどんなによいか、という思いがあつたからである。「田舎育ちの不調法者の娘で、とても殿下のお傍に参らせるような者ではありません」と、断られてしまったが。

純粹かつ単純なコーリンダが、権謀渦巻く富廷にあって、うまく立ち回れる筈もない事は、父親のアルフォンスが、誰よりも知っていた事だったのである。

「陛下?」「

リーリアは、エルディイスの伏せた面をいきなり覗き込んだ。

僅かな間だが、リーリアに言えない事を思つていていたエルディイスは、国王の威厳もまるきり示せずにびくりと肩を震わせた。

ここに居て彼の子を身籠つているのが、アルフォンスの娘であつたなら、こんな事は起こらなかつたのだろうか、と考えていたのである。

「どうなさいましたの？ お顔が赤い……」

大きな綺羅らかなその黒い瞳に見つめられると、エルディイスは平穀を保つことが出来なくなる。

「リーリア……休もう」

孔雀の羽を散らした豪奢な扇を手にした侍女の戸惑いも気に留めず、国王は、憂い顔の王妃の手を引き、寝台へと導いた。

夕食を部屋でとりおえ、今日はこれ以上の面会はなぞそつた。なぜ、真っ先に来ると予想していた、守護隊長、ダリウスは来ないのか。考えても答えは出ない。小さくため息をつき、ファルシスは寝台に横になつた。今夜は眠れるだろうか。この寝台に眠れる夜は、あと幾日なのだろうか。

読みかけのままに置いていた書物を手に取つた。そして、袖の中に挟みこんでいた紙片を、貞の間に落とし込む。

アトラウスから渡されたメッセージを、監視の目を盗んで見る瞬間を、ファルシスはずつと待つていたのだつた。

息を呑み込みながら、書物に目を落とすふりをして、微かに震える指で、ファルシスは紙片を開いた。見慣れたアトラウスの字が、小さくびっしりと書き込まれている。

『 ファル、君を怒らせた僕を許してほしい。金獅子どもには、僕と君の仲が決裂したように思わせた方が、動きがとりやすい。愛するコーリンダと唯一無一の親友の君、そしてご両親を、全力を尽くして守る気持ちに、決して一心はない。最悪の場合、君たちを逃がす算段を立てているところだ。団長殿は気概はあるが、真つ直ぐ過ぎて危うい。君の所へ行つたローゼッタ嬢は、残念ながら信用できない。ダリウス殿とは連絡をとつてゐる。かれを通じて、また連絡する』

ふうっと呑み込んだ息を吐き出した。

激しいやりとりの間にも、どこかで違和感を感じていたが、芝居だつたという訳だ。

この手紙を疑う気持ちは、ファルシスは持たなかつた。なぜなら、もしアトラウスが裏切り者であったなら、いまや無力な存在である

従弟に、こんな手の込んだ芝居までして、味方だと思わせておく必要があるとは思えないからだ。

日和見的な計算があれば、ただ近づかなければよいだけで、わざわざ挑発して殴られに来ることもない。

だが、ローゼッタが信用できないとは、どういう事なのか。アトラウスを信じると決めれば、彼女は信じてはいけないという事になつてしまふ。ファルシスにとつては、どちらも大切な存在だった。アトラウスには、他の誰にも話した事のない心のうちも見せてくる。

リディアへの想いも、ローゼッタとの関係も、愚痴を言うようにな明かしたのだ。

それを知りながら、彼女を信じるなというからには、相応の根拠があるのだろう。

彼の人柄をでなく、彼女のもたらす楽観的な情報を鵜呑みにしてはいけない、という事かも知れない。こんな短い手紙では、わからぬことばかりだ。

ファルシスは、紙片を小さく固く丸め、水とともに飲み下した。寝台に横になると、急に、どこかに隠れていた疲労感がまとめて噴出してきた。

眠る事は、必要だ。かれは抵抗せず、睡魔に身をまかせ、泥のように眠りに落ちていった。

同刻。

同じアルマヴィラ都内のある邸宅の一室、座して書物を開いているのは、リディアの元を訪れた黒衣の男である。

表紙が擦り切れかけている、何の装飾も施されていないその革張りの本は、ある宗教の聖典であり、ヴェルサリアでは禁じられた、

ルルア大神への呪詛が綴られている。

「どんどん、と、せわしなく室の扉が叩かれた。

「入るがよい」

男が応じると、扉が開き、入ってきたのは、のっぺりした顔の小柄な中年男だつた。

「遂にやつたな！」

中年男は嬉しそうに息を弾ませて言った。

「ああ、見たかった！　あの取り澄ましたアルフォンスの奴めが、罪人護送の馬車に押し込められるさまを！」

「……つまらぬ」

黒衣の男は呟き、聖典をそつと閉じた。

「隠者殿、そう仰るな」

中年男は気分を害する風でもない。アルフォンスの苦境という喜びの前には、小さな事など何も気にかからないようである。

「ノイリオン卿、わざわざそんな事を言つ為に来られたのか。貴公にも獅子の目がついているのではないか」

「女に会いにいくと言つてある。実際、他の室に女を置いてある。何も心配はいらぬ。俺は大逆人を告発した側なのだ。監視はかたちばかりのもの」

ノイリオン・ヴィーンは、やや得意げにそう答えた。

40歳にして独身の、ヴィーン家の当主、ノイリオン・ヴィーン。金や宝石で女を置く事は容易いが、彼が長年欲してきた女性は、ただひとりだった。

「アルフォンスの奴めが処刑されたら、すぐにカレーリンダは俺のものになるんだろうな？　それを、改めて確かめに来たのだ」

隠者と呼ばれた男は、微かに苦笑した。

「事が成った暁には、カレーリンダ妃はノイリオン卿に『えられる事に決まっている。今更確かめられなくとも、大丈夫だ。ユーリンダ姫のほうなら、他に欲する輩もあるかも知れぬが』

「俺が愛しているのは、昔から、カレリングダだ。ゴーリングダは、欲する奴に譲ろう。カレリングダはまだ子が産める齢。ゴーリングダがいなくとも、次期聖炎の神子は、俺が産ませてやる」

ここ何年も、ゴーリングダに求婚していたことなどなかつたかのように、ノイリオンは高らかに宣言した。

カレリングダに子を産ませる……己が言つた言葉に、ノイリオンは興奮した。

「ああ、待ちきれぬ。早く、この手に……」

隠者は、黒いフードの下で冷ややかな表情をつくつた。

「産ませる、と言つても、カレリングダ妃は、最早子を成せぬ身体と聞いているが。ルーン公とこの上なく睦まじいのに、双子のあと、出産していなき事をみれば、たしかな事であろう」

「そんなこと、何が確かなものか」

ノイリオンはむつとした顔になる。ルーン公と睦まじい、という言葉が気に入らなかつたのだ。

「睦まじいなどと、表面だけのことかも知れぬ。長く子がないのは、アルフォンスの方に子種が尽きているのかも知れぬではないか。アルフォンスに出来なかつたものを、俺が再び赤子を産ませてやれば、カレリングダも奴のことなど忘れて、俺を愛するようになるだろ?」「……」

すべて己の都合の良いように組み立てた仮定の話だが、ノイリオンは本氣でそう思つてゐるらしい。

愛情と平和に満ちた生活を引き裂き、夫と子供を奪つた男に無理やり子を産ませて、どうしてその男を愛することになるだろうか。愛情などとは無縁の隠者にも、それくらいのひとの心は判るのだが、そんな単純なことを、欲に囚われたノイリオンは気づかぬようだ。

(まあ良い)

心中、隠者は呟いた。

(愚か者が何を信じようと、最早ことは加速をつけて流れ出していく。聖炎の神子は、いずれ始末せねばならぬものであるし、子を成

そうが成すまいが、ときが来れば、まとめて葬つてしまえば良いだけのこと)

「……男女の仲のことは、私には解らぬが、とにかく妃は卿のものになるのだから、思つよつてられるがよから」

囁くような声で隠者は言つた。ノイリオンは、嬉しそうに、頭髪のやや薄くなつた頭を縦に振つた。

夜が来たが、不安にさいなまれたユーリンダは、眠る気持ちになれなかつた。

だが、とりあえずのつもりで寝台に横になると、精神的な疲れから、あつという間に意識は沈み込んでいった。

ユーリンダは、不思議な夢を見た。

彼女は、浅紫色の煙が揺らめく、砂と岩ばかりの荒野に佇んでいた。

そんな荒れた場所は、見たこともなく、どうしてこんなところにいるのかと怯えた。

すると、かすんだ視界の向こうに、人影が見えた。

『だれ……』

叫ぼうとしたが、口が動いただけで、声は音とならない。この世界は無音なのだと、ユーリンダはその時気づいた。

やがて、人影の周りの曇りが僅かに晴れ、ひとりの人物が現れた。ユーリンダは息を呑む。そんな容貌の人間を、見たことがなかつたからだ。

その人物は、まだ若いようだったが、真っ白な頭髪を持ち、肩の辺りで無造作に切りそろえていた。背は高くなく、すらりとした身体を革の鎧で包み、レイピアを佩いている。砂塵を払う為か、厚い布を目の下まで引き上げており、男なのか女なのか、判断をつけかねた。

ユーリンダの気配を感じたらしく、その人物は、閉じていた瞳を開けた。その瞳は、燃えさかる炎のように赤い。

雪のような深白の髪と、火のような純赤の瞳。

その異様さと、その稀有な美しさに気圧され、ユーリンダは思わ

ず後ずさつた。

炎のひとみはコーリンダを捉え、険しく睨み付けた。

『……！』

激しい怒氣が、コーリンダに向けて放たれた。苛立ち、憎悪……覚えのない感情が、しかしあつたりと、この見知らぬ人物から伝わってくる。

「あなたはだれなの」

コーリンダは叫んだ。叫びは声にならず、ただ彼女の口がその思いに沿つて動いただけだったが。

相手は、怒氣を含んだまま、腰のレイピアを抜いた。斬りかかつてくるのかと、コーリンダは腰が抜けそうになつたが、そうではなく、地面にレイピアで文字を書き出した。この静寂の世界で、何か伝えようとしているのだ。

だが、どうやらその行為は禁忌であつたらしい。

まばゆい稻光が空を裂き、レイピアは跳ね飛ばされた。

『出来ないと言つただろう！……』

無音だつた世界に、突然、聞いたことのない女の声が響く。完全な静寂に順応していた耳は、その声に痛みすら覚えた。

『運命は変えられぬ。運命は救われぬ。おまえは、救われぬ……』

ぞつとするような不吉な声。白髪の人物は、レイピアを弾かれた手を押さえながら、更にコーリンダを忌々しそうに睨めつけた。それから、思い出したように、顔を覆っている布を、引きおろそうとした。

だがその時、急速に周囲の景色がぶれ始めた。

『だれ。だれなの……』

見知らぬ風体でありながら、激しい怒りをぶつけられながら、それでもその人物に、ことばに出来ない何か、おろそかに出来ないものを感じた。

いつか、どこかで会つた……？ わからない。でも、もつと触れ

会いたかった。

しかし、夢は終わる時間のようだった。

世界はぼんやりと崩れ、あとは、夢のない眠りが支配した。

同刻。

ユーリンダの夢に現れた人物を、不思議な事に、離れた地で微睡む彼女の父親もまた、目にしていた。

不毛の大地に立つその若者に、アルフォンスは声をかけた。

「そなたは何者だ？」

だが、彼の声は、音とはならなかつた。

何らかの魔道の力が働いている、と彼は気づいた。

白い髪に紅いひとみ。初めて見る風体にも興味をそそられたが、それ以上に、若者の纏う雰囲気がひどく気にかかつた。

憎悪。絶望。触れれば弾かれそうな激しい気流が、その細い身体から吹き上がつていて、ようやく感じた。

数多くの騎士や戦士を知っているかれも、このよつたな氣を放つ者には出会つた事がない。

険しい視線をアルフォンスに向けたその人物の感情の波が、かれをみとめた刹那、爆発した。

「なんだ？！」

若者の背後に、突如、紅蓮の炎が燃え立つた。

「そなた……？！」

竜巻のように渦をなし、空へ螺旋を描きながら燃え上がる炎に包まれながらも、若者は熱さを感じる風もない。また、間近にいるアルフォンスにとつても、同様だった。

魔道の炎。

それは、アルフォンスも何度となく目にした事のあるもの。

聖炎の神子である妻が、儀式の際にいつも灯す炎。

だが、このような激しいものは、見た事がない。

その時、どこからともなく、何者かの声が、無音の世界に響き渡

つた。

『お止め！　お止めつたら！　莫迦な子だね。世界が壊れてしまうよ！』

その声に、我に返つた若者は、慌てて炎を消そうとしたようだつた。

だが、遅かつたらしい。

魔道の力の均衡が崩れたのか、立っていた地面が大きく揺れ始める。

よろめいたアルフォンスに、若者は咄嗟に手を伸ばした。
その時、若者の顔の半分を覆つていた布が外れた。

「きみは……」

純赤のひとみから、涙の粒が零れる。

アルフォンスは、そのひとの名を呼ぼうとした。

だが、その瞬間に世界は崩れ去り、かれはただ深い闇の眠りへと墮ちていつた。

幸せな夢に笑みを浮かべる夜。

恋人と甘く酔い痴れる夜。

苦しみ、悩み、眠れぬ夜。

悪夢に苛まれ、のた打ち回る夜。

疲れ果て、泥のように眠る夜。

どのような夜も、やがては明ける。

深夜まで密談をし、短い睡眠をとつたアルフォンス・ルーンは、明け方には目覚め、隙なく身支度を整えた。

何か、夢を見たような気がする。それも、とても大事な何かを思わせるような……。

暫し、記憶をまさぐつてみたが、『重要』というイメージ以上の

ものは思い出せず、もどかしい。

すぐに、考えるのをやめた。

夢などに拘っている暇はないのだ。考えるべき事は山積している。

宿の玄関のあたりが、騒がしいようだつた。

どうしたのかと思う間もなく、扉が叩かれ、ウルミスが朝の挨拶と共に姿を現した。

「おはよう。何かあつたのかね？」

「きみに面会人だ」

ウルミスは答えた。

「アルフォンス！ 久しぶりね」

笑みを浮かべ、男装の女性は言った。

「ああ、久しいね、スザナ」

道中での突然の訪問に、驚いたとしても動搖を微塵も見せず、何の憂いともないかのように、にこやかにルーン公は彼女を迎えた。

七公爵のひとり、ローズナー女公爵、スザナ。

齡三十八にして、華やかさがいまも盛りのように見える男勝りの麗人は、アルフォンスとは幼馴染の間柄であった。

彼女の父親の前ローズナー公とアルフォンスの父、先のルーン公は、親しい仲であり、先代の頃には、王都に逗留する際は勿論の事、それ以外にも折につけ、家ぐるみの交流の機会があつたのだ。

まだ幼少の頃、歳上ではあるが、スザナをアルフォンスの許婚に、という話まで持ち上がつたものだつたが、スザナの一人の兄が相次いで夭折し、彼女がローズナー家の跡取りとなつた為に、立ち消えになつた、という経緯さえあつた。

子供の頃の二人は、伸びやかで明るい気質が良く合い、仲睦まじい姉弟のように過ごしたものだった。

だが、長じて、互いに家庭を持つてからは、流石に男女の別があり

る為、親友のような付き合いはなくなっていた。

とはいって、七公爵家のうちで、アルフォンスにとつて、最も親しい間柄の家であり、スザナの娘フイリアとコーリンダは、まことに書簡のやり取りをする仲である。

現在、窮地に陥っているアルフォンス・ルーンにとり、ローズナ・女公爵が、昔からの絆に免じて、かれの言い分をきちんと吟味し、もしその潔白を認めたなら、力になってくれるのか……といつことには、かれの命運を左右する、極めて大きな要素のひとつと言えた。王都に護送されてしまえば、王家の監視なく話す事は難しい。いち早くここに会いに来ててくれた事は、アルフォンスにとつて、望外の出来事だった。

「少しだけでいいわ。一人で話させて頂きたいわ」

波打つ豊かな赤い髪を後ろに払いながら、碎けた口調で、スザナはウルミスに言った。

だが、ウルミスより先に、副団長のノーシュ・バランが、険しい表情を作り応えた。

「お待ちください、レディ。護送中の大逆の罪びとと、何をお話なさりたいのか。国王陛下の御名において、公正な話であれば、お二人きりでなく、この場でお話頂きたい」

スザナは負けてはいない。

「わたくしは、ウルミス卿と話しているのです。他の者は、お下がりなさい」

「な……！」

ノーシュにとつては、このヴェルサリアの尊き国王を護る金獅子騎士団の副団長として、国王の名を出したのに聞き入れられぬなど、いかに七公爵といえど、あつてはならぬ事である。

侮辱と感じた彼の丸く白い頬が、血の気を帯びた。

「陛下は、そこなルーン公に罪ありと、既に仰せなのですぞ。ローズナー公におかれでは、その罪びとに加担されるおつもりか」

「言葉が過ぎる、ノーシュ卿。裁判を行うと陛下がお決めなのだから、まだ罪が確定した訳ではない。ルーン公とローズナー公の面談を、何ゆえに、未だウルミス卿が口も開かぬうちに、そなたから禁じられねばならぬのか」

凛としてスザナは言い放つた。

ノーシュが言葉を返す前に、慌ててウルミスが割って入る。

「レディ、手短にお願い致しますぞ。出立の刻が迫っておりますからな。そちらの室をお使い下さい」

「団長！」

ノーシュが不満の声を上げる。その背後の数人の団員も、副団長と同じ目をしている。

ウルミスは、心中溜息を漏らした。固い信頼で結ばれている筈の配下。なのに、アルフォンスを擁護する、という決断を、だれも支持せず、喜ばない。

アルフォンスは、高潔且つ分け隔てのない気さくな人柄や、主だけた貴族のうちで最も凛々しく整った容姿などから、既婚の身ながら宮中の婦女子に人気が高い。

だが、時の権力者バロック公にも媚びず、王にも諫言を厭わない姿勢を、鼻持ちならぬと感じる騎士、貴族が多いのもまた事実であった。

国王直属の金獅子騎士団においては特に、王の暗殺を謀つたといふおぞましい嫌疑をかけられた、というだけで、憎しみを持つ充分な理由になるのである。

王への忠誠篤い証といえなくもない反感を、咎めだてもできず、ウルミスはただ眉間に皺を寄せる事しか出来なかつた。

「スザナ、わたしの話を聞いてくれるかね？」

ルーン公の問いかけに、女公爵はあっさりと首を横に振つた。

「長々と話を聞いているとまはないわ。わたくしはただ、これだけを聞きたいの。あなたは、やつたの、やってないので？」

单刀直入な物言いに、アルフォンスは一瞬驚きながらも、すぐに吉兆を感じた。

スザナの言葉は、要すれば、アルフォンスの言い分を無条件に聞く姿勢があると意味している。

「やつていいない。わたしは永遠に陛下の忠実なる臣だ。信じてくれ、スザナ」

「証拠は？」

「ない」

スザナはまじまじと幼馴染の顔を見つめた。

「それで他人を納得させられると思っているの？ あなたの弟は、何やらルルア大神官も認めた立派な証拠を用意していると言つじゃないの」

「らしいね」

アルフォンスは頷き、軽く溜息をつく。

「しかし、ねえスザナ。もしもわたしが罪びとなら、こうした事態に備えて、何かしら身を守る準備をしているものではないかね？ あまりにも青天の霹靂……想像の域を遥かに超えた告発に対してもうして前もって無実の証拠など、揃えられようか？」

「呆れた言い草ね。でもまあ、一理なくはないわ」

スザナは苦笑した。

「相変わらず弱みを見せないのね。少しばかりくなつてゐるかと思つたのに。無実の罪を着せられた人間は、もつとうろたえるものじゃなくて？」

「うろたえているさ。やせ我慢をしているだけだよ」

あつさりとアルフォンスは言つ。スザナはかれの目をじっと見つめたが、その黄金色の瞳からは、何の動搖も怖れも読み取れなかつた。

「……………ひつして、アロール・バロックに喧嘩を売つたりしたのよ？」

「ひどい誤解だ。わたしは誰にも喧嘩を売つた覚えなどない」

「バロック公は、体面を傷つけた者を、決して許しはしないわ」

「しかし、それだけの理由で、こんなでつちあげを……」

「するわよ。元々、彼は、意のままになるヴュイヨン以外の公爵を邪魔に思っているんだから」

「スザナ……」

今度はアルフォンスが、スザナの濃い緑色の瞳を凝視した。

幼馴染とは言つても、成人して以来、当たり障りのない社交辞令や、他愛のない世間話ばかりで、笑い合つ事はあっても、他人に聞かれてはならぬような話をした事もなかつたのだ。

彼女がこんなにあからさまなバロック批判を口にするとは予想していなかつた。

「なんで縁談を断つたの。バロックと縁戚になつていれば、こんな事は起きなかつたかも知れないのに」

「ユーリンダには想う相手がいたんだ。娘を犠牲にしてまで、バロックの機嫌をとるつもりなどなかつた。たとえ、こうなる事がわかつていたとしてもだ」

「馬鹿ね。少女時代の恋愛なんて、過ぎれば幻のよつな思い出に変わるものでしかないのに。貴族の娘にとっての幸せは、一族に望まれた結婚をする事だわ」

思ひがけず語気が強くなつたスザナは、すぐに我に返つたように首を振つた。

「ごめんなさい。こんな話をしてる場合じやなかつたわね」

「スザナ……」

彼女の亡き夫は、彼女の父親が定めた、一族内のかなり年上の男だつた。その結婚が、若いスザナにとつて最初は意に沿わぬものだつたとしても、子宝にも恵まれ、1年前に夫が事故死するまで、落ち着いた幸福な暮らしを送つてきたようだ。

ユーリンダとティラールも、そんな夫婦になれたのかも知れない。しかし、過ぎた事を今更どうする術もない。

「あなた、どうするつもりなの。このまま泣き寝入りして運命を受け入れるの?」

待ち受ける運命とは、汚辱にまみれた死であろう。アルフォンスは首を横に振った。

「泣き寝入りする気はない。死を怖れる心はないが、我が名が後の世まで、覚えなき罪状のもとに、卑劣で残酷な大逆の徒として語られるのは怖ろしい。陛下の命じる死であれば、甘んじて受け入れるしかないが、とにかく、心を尽くして真実を語り、陛下にわかつて頂こうと考えている」

「陛下はかつての素直な少年ではないわ。バロックの娘の言いなり……聞いた？ 彼女の懐妊を」

スザナは敢えて王妃様ではなく、バロックの娘と表した。アルフォンスは無論気づいたが、それには触れずに言つた。

「ああ、聞いた。目出度い事だ」

「はあ？」

呑気な応えにスザナは目を剥ぐ。目出度いのはあなたの頭だ、と言いたいのを堪え、スザナは首を振つて、なんてお人よしなの、と呴くに止めた。

「今の陛下に、心を剥くした話とやらが、そのままに剥くとは思えないわ。ウルミス卿も判つてはいると思うけど……ウルミス卿も味方なんでしょう？ さつきの感じから推測すると」

「も、という事は、きみもわたしを信じてくれるのか？」

「あなたがこんな似合わない事が出来る男だと少しでも思つたなら、わざわざこんなところまで来ないわ」

スザナは軽くまばたきをして笑つた。遠い昔、少女の頃によくしていた仕草に、アルフォンスは懐かしさを覚える。

「ありがとう、スザナ……」

「私一人では、バロックに太刀打ちできないわ。けれど、ヴェイヨン以外の公爵を味方にできれば、何とかなるかも知れない。私、一応策があるのよ。希望を捨てないで、アルフォンス」

「何と言つて感謝していいか分からぬ。これもルルアのお導きか」

「いえ、あなたの功德でしょ」

真面目な顔つきでそう言ってから、スザナは再度笑った。

王都エルスタックは、一重の高い外壁によつて護られている。

外壁と呼ばれる石造りの堀は、もうひとつの中壁に比べ、かなり広範囲にわたつて建てられていた。

この外壁と内壁の間に、所謂下町……一般市民の中でも中流以下の人々が住まう、広くもなく簡素な建築物が並ぶ区画がある。簡素といつても、この町に、貧民と呼ばれるような層はない。雑多ではあれど不潔さや暗さはなく、治安も比較的よい。

下町は、内壁の中に比べると新しく、今の形に区画整理されてから120年程度だが、王家の治世の安定に支えられた暮らしが不満の声は低く、祭事の折にバルコニーに立つ、豆粒のような姿と、馬車のカーテンの陰に見え隠れする影としてしか認識できない王の人は、それなりに高かつた。

前王は、比較的気が大きく、機嫌のよい時には隔てのない性格であつたので、国民の前に姿を見せる事を厭わず、馬車でなく乗馬で町に現れるのも珍しくなかつたが、現王の代になつてから、王が庶民の程近くに顔を見せせる機会はまつたくと言つてよいほどなくなつていた。

下町の住人たちには、美点を誇張されて描かれた、若き王の絵姿を眺めでは、あれやこれや、不敬にあたらぬ程度に、好き勝手な事を言い合ひうのであった。

下町と対比的に上町と呼ばれている地域は、内壁と宮殿の間に広がつてゐる。

外壁より年代の古い内壁だが、その構造は外壁よりも遙かに堅固で、魔道の防力も籠められているとも噂されているが、これは大部分の市民にとつては、眞偽を確認する術もないことであった。

この上町に、貴族や富商の大邸宅、騎士の宿舎や演習場、役場や宮中官吏の住居、学問所、そして大小の神殿が立ち並ぶ。

主神ルルアの神殿が最も大きく、中心部に構えているのは当然の事だが、総本山はこの王都ではなく、アルマヴィラの大神殿である。それもあってここでは、軍神イネルキや豊穣神ミシア、商業神イトなど、人々の生活に密着した数柱の神々の神殿も、ルルア神殿に負けない規模で、競うように多くの参拝者を集めていた。

現在、自他ともに疑う余地なく、貴族の中で最高の権力を持つ者……即ち、宰相アロール・バルックは、上町一の豪奢な私邸で、ゆつたりと肘掛け椅子に身を沈め、報告を受けている。

「リーリアは、まだ悪阻が治まらぬのか。あれの機嫌が悪いと、陛下もご機嫌悪うないか」

「陛下は、王妃陛下を大層勞わつておいでです。腫れ物に触るかのようじに、お優しゆうござります」

バルック公の前に立つのは、王妃の侍女長エラ。

元は身分の低い端女だったが、際立った美貌に加え、「乱世に生まれた男であれば、一国を獲れたであろう」とアロールに言わせた才気を持ち、彼の手がつき、子ももうけた間柄である。

今ではエラも中年となり、艶めいたことはなくなっていたが、アロールはこの女に深い信用を預けている。身分が高ければ、一の愛妾として國元に置き、諸事を委ねたかったが、出自の低さ故にそもそもゆかず、今は、彼の一番の持ち札である孫娘の目付役とし、美貌と才を鼻にかけがちな王妃の手綱をとらせている。王妃は、祖父の力により、今の地位を得た事をよくわきまえ、忠実な顔をしてはいるが、才氣芳しいだけに、いつ自身を過信して暴走するかわからぬ危うさを内包している。アロールは、王妃となつた孫娘を、自身で始終監視する訳にもゆかず、自分の手足と同じく信頼できるエラを、王妃付けとした。エラの役目は、アロールの野望を満たす為の重要な鍵と言えた。

「すべては順調でござりますわ。悪阻でお苦しみながらも、妃殿下は、きちんと国王陛下の御心を掴んでおられます。慰みに踊りを所望されたなら、御自ら踊つて頂けそななくらいですわ」

「……助長すな。この国の一の御方ぞ。そなた」ときが、そのように揶揄してよいと思つてか」

はつとエラは顔色を変え、主の機嫌を損ねたことを詫びた。

「申し訳ござりませぬ」

「ふん……まあよい。順調だということだな」

アロールはそれ以上、エラの不敬を咎めなかつた。こうした事は初めてではない。王家より、ひたすらバロック家に心酔しており、それが普段は微塵も表さないのにアロールの前ではぽろつと出る。或いは、苦い顔をされるのを承知の上で表現かも知れなかつた。こんな計算高さも、エラとリーリアは似ている。いつそ、ふたりが実の母子であつたならよかつたものを、とさえ、何度もアロールは思つたものだつた。

「とにかく、あと数日で、アルフォンス・ルーンは王都へ到着する。昔のよしみを、微塵でも陛下に思い起こされでは、不都合だ。とにかくそうさせないのが、リーリアの役目だ。アルフォンスを始末し、傀儡のカルシスを後釜に据えてしまえば、とりあえず我が版図は広がる」

版図を広げる為だけに、この大掛かりな罠をしかけた訳ではない。欲しいのは、アルマヴィラそ のものではないのだ。

だが、その胸のうちは、エラにもリーリアにも明かしたことはない。

協力者の娘婿カルシスや、大神官のヴィーン家の者にも。

この件に関して、信用して重んじているのは、あの、黒衣の男だけ。

「天下をお取りなさいませ、バロック公」

言葉は、不思議な魔力を持つていた。これがなければ、寿命尽きるまで自覚もしなかつたかも知れない、野心が芽生えた。

『天下を……この国を牛ずる……或いはまた、一族が、この国を越えて……』

他の者が言えば、戯言と笑うか、怒り斬り捨てたかも知れない。しかし、あの男の言葉には、たしかに信を置かせるだけの、力があった。

「早う無事に王子が産まれれば良いが」

胸の深いうちにしまった思いには触れずに、アロールは当たり前の事を口にした。

「此度がたとえ王女様であられても、陛下の『寵愛は』せとかも搖るぎないと存じますし、王子殿下のいづれの『誕生は』確実でござりますよ」

「まあ、そうかも知れぬが、王子の誕生は早いに越したことはない。王子さえ成せば、リーリアの地位は万全、そして儂の計画も一層盤石となる」

「やうでござりますね」

エラは頷いた。

「早う、お館様の統べるヴェルサリアが見どりござります」

「滅多な事を申すな」

探る者など近くには居ないのを承知の上で、アロールは叱りつけた。

「儂は、ヴェルサリアの霸權など欲しておらぬ」

「これは……申し訳ありませぬ。端女の戯言と、どうかお聞き流し下さいまし」

また叱られるエラだが、しかし慣れてもらっている。アロールは、心くすぐられる甘言を好みつつも、それを面に出したがらない。本気で怒っている訳ではないのだ。

「とにかくいまは」

アロールはまた先と同じ事を、念を押すように言った。

「陛下のご機嫌を損ねず、アルフォンスの首を陛下の胸に焼き付け

るのだ。それが、御子を無事に産むことの次に、リーリアのすべき大事だ。そなた、しかと言い含めよ

「弁えましてござります」

エラは丁重に礼をして、応えた。

「まあ、リーリアもその辺りはよく判つておるとは思つが。それに

比べ、我が息子の何と役に立たぬことよ

「……と、申されますと?」

半ばその先を予測しながらも、そ知らぬ顔で、エラは問い合わせ返した。
「ティラールよ。あの阿呆め、鳥文にて、こんなものを送つてきよ
つた」

バロック公は、文を投げて寄こした。エラは素早く手を通し、手
立たぬよつゝ、だが気づかれるよつゝ、嘆息した。

「これは……」

「あの阿呆め、おのれが務めを忘れ果て、心底アルフォンスの娘の
言いなりになつていると見ゆる。そこまでの惚れよつなら、思いの
ままにしてしまえばよいものを、踊らされよつて……まったくの、
出来損ないだ」

「まだ判りませぬよ」

とりなしてエラは言った。

「文では御本意はわかりませぬ。ルーン公一家にご助力を、など、
お館様のご子息ともあろう方が、本氣で仰るとは、とても思えませ
ぬ。何か裏があるやも知れませぬよ」

エラの瞳は意地の悪い光を放っていた。彼女はティラールの気性
をよく知つていた。軽薄さに隠されてしまいがちな実直さ……それ
を彼女は、愚直、としかとらなかつた。逸材アロール・バロックの
正式な息子でありながら、その立場も資質も無駄にしているとしか
思えないティラールを、彼女は、アロールの正室の子供の誰よりも
心中嫌つていた。

「そうだろうか?」

だが、アロールは、側女で腹心のこの発言を、疑つてかかる事は

しなかつた。賢するやうな女ゆえに、妬みなどとは結びつけて想像し辛い。彼女の進言は、いつも吟味の価値があると無意識のうちに思つてゐる。

「あれも、旅するつちに、ちいとは賢くなつたであらうか？ 傍にはザハドもつけておるしの。あやつは本当に、田端のきく奴だ。あやつを得た事は、ティラールめがこれまでしてきた事のうちで、最も役に立つ事だったのではないかと思つくらいだ」

「まあ、随分お買いがぶりでござりますね、もとは奴隸」ときに「身分の如何をそなたが言つたか。どのよつた出自でも、能力があればわしは重用する」

アロールはぴしりと言つた。ヒラは背筋を正した。確かに、今は失言だった。

「申し訳ございませぬ

と、すぐにエラは詫びた。

「こゝのよつなお文をティラール様に書かせ、お館様のお心を騒がせて……とつい短絡的に思つてしまつたのでござります。勿論、このお文の真意すら測りかねる状況で、言つべき事ではございませんでした。お許し下さいませ」

「もうよい」

ぶすりとしたままアロールは言つた。

「とにかく、ザハドに報告させねばならぬ。ティラールが自分の役割を忘れておらぬかどうか……もしも骨抜きにされているのであれば、この大事なときにそのよつたな体たらくの者、もはや我が息子とは呼べぬ

そして、アロールは咳いた。

「そなたの息子の方こそ、儂の息子と呼ぶに相応しい器量だつた

「……死んだ者ことを語つても、何にもなりませぬ

Hラは表情を硬くした。いくら褒められようと、もういらない息子は彼女を喜ばせることはできない。彼女はたつた一人の息子のことさえ、そんな風にしか考へる事が出来なかつた。

同じ頃。

上町の別の邸、バロック公邸に比して敷地は劣らぬものの、まったく飾り気のない、実用一辺倒の、煤けた茶色の煉瓦造りのラングレイ公邸にて。

「……そなた、此度のことはどう考へておられる?」

邸内の一室、客間には、邸の外見と同じく、殆ど装飾もない。領民から贈られた素朴な麻織りのタペストリーが、古びた漆喰の天井から下がるのみ。

問うたのは、ポール・ラングレイ、62歳。灰白色の髪を刈りつめ、灰色の鋭い目をしたこの公爵は、アロール・バロックより3歳年長で、親しみを込めてラングレイ老公、と呼ばれている。質実剛健、曲がった事は許さぬ清廉潔白な人柄、近寄りがたい風格を持つも、眼を細めて平民の幼子をあやすような一面も備えており、領民の人気は絶大で、王からも一日置かれている。時の権力者アロール・バロックも、ラングレイ公には、表面上、年長者に対する礼儀として、譲る場面も多かつた。だが、あくまで、表面上、である。融通の利かぬラングレイ公を煙たがっているのは、すこし眼の利く者にとればあからさまとも言え、無論当のラングレイ公も承知していた。だが、かれは権力にはなんの興味もない。バロック公から疎まれようど、何の痛痒もなく、ただおのれの正義を貫くことに搖るぎはなかつた。

しかし、今回の事件においては、ラングレイ老公には、かつてない迷いがあった。しかとした証拠があり、王もまたルーン公の有罪を信じているのにも関わらず、自身の勘、他者に対する信用……そのようなものが、それらを打ち消すからである。アルフォンス・ルーンについては、幼少の頃より知つており、その高潔、王家への忠誠は疑いようもないと知り抜いている、

万が一、王がバロック家から王妃を得てからの冷遇に、彼が僅かに不満を抱いたとしても、彼ならばそれを公の場で表明する筈であり、まかり間違つても、罪もなき乙女を生け贋に王の呪殺など、思ひもつかぬ筈であること、判りきつてゐる事なのである。

しかし、その思いを打ち消すかのように、問われた男は応えた。
「さあねえ……人間というものは、とち狂つて、よく知る他人にも思ひもつかぬような事をしでかすものです。だからこそ、面白いんですかね」

「面白いなどと。まさか、儂以外の前で口にするなよ」

大逆罪の話題にして不敬ともとられかねない返答を、ラングレイ公は鷹揚に聞き流した。相手の気性をよく知つてゐるからである。リッター・ブルーブラン。王家の次に風流を愛すと公言している公爵。長い黒髪を背中で緩やかに束ね、古風なデザインの細やかな刺繡の施された優美なチュニックを纏い、緑色の瞳を愉しげに煌めかせながら、窓際に佇んでいる。まだおおやけにはしていないが、ラングレイ公の末娘を娶る話がまとまつたばかりである。ラングレイ公は、以前より、この風変わりな青年貴族を気に入つていた。義理の親子となる事で、忌憚ない話ができると、ラングレイ公は期待していた。

「アルフォンスの気性はそなたも知つていよ。告発者である弟のカルシスは、長年かれと不和であるし、とても鵜呑みには出来ぬ」

ラングレイ公は、同調する意見が欲しい。リッターはそれを解つた上で、あえて同調しない。

「知られている被告の気性……それが裁判の結果を左右するようなら、秩序というものは何をもつて成り立つでしょうか？ 大事なのは、証拠、そして、陛下のご意志」

「そんな建前を聞く為に話をしているのではない。判つておらうがやや、むつとしてラングレイ公は応えた。

「話を弄ぶのはそなたの悪い癖ぞ。時間は限られているのだ。アルフォンスがこちらへ着く前に、ある程度我々も腹を決めておかねば

ならぬ。無論、罪有りと見なせば、儂が自ら斬つて捨てようと思つ
くらいだが、そうでなければ……

「おや、これは異な事を仰せでござりますね、義父上」

「なに……」

リッターからこう呼ばれたのも初めての事であるが、それ以上に
その言い草にラングレイ公は意外そうに目を剥いた。リッターは澄
ました顔で続ける。

「アルフォンスが着いて直に話すまでは、黒か白か、いくらニード
論議しても詮無きこと。そして、白と思えば勿論、そのよつに陛下
に申し上げる。惱む程の事ではございませんでしょ?」

「そなた……」

あまりの淡泊な返答に、ラングレイ公はかえつて戸惑つた。かれ
自身は既にその気持ちを固めてはいたが、結果、バロックと敵対す
るも同じである行動に、間もなく娘婿となるこの青年は、もつと慎
重になると踏んでいたのである。

「そなたは、それでよいのか。勿論儂はそのつもりであるが、正直、
そなたは、もつと利に聴い立ち回りをするのではと思つておつた。
儂などと違つて、将来のある身なのだからな」

現実にルーン公支持派としてバロック公と敵対し、そしてもし敗
れる事になれば、ラングレイ公はさつさと隠遁して跡目を長男に譲
り、自分の筋を通すことがラングレイ家そのものの危機を招かぬよ
うにと考えている。だが、まだ若いリッターはそうもいかないだろ
う。跡目を継ぐ嗣子も無論まだおりず、彼の身に何かあれば、それ
はブルーブラン家の存亡にかかる。

それに、リッターは、ラングレイ公のように、義理人情に厚い氣
質ではない。彼は前ブルーブラン公の次男であるが、間柄は悪くな
かつた筈の兄の事を、「風流を解さぬ人間は家運を傾ける」と言つ
て、善人だが凡庸である兄を廃し家督を自分に譲るよう父親に迫つ
た、という逸話を持つくらいである。話の真偽は、直接本人に問い合わせた訳ではないので判らぬし、他家の事情に首を突つ込むつも

りもない。だが、リッターが、善であつても愚である者を好まぬ事はたしかと知つてゐる。此の度、アルフォンス・ルーンが、時の権力者バロック公の怒りをかつた件、また、率直な諫言により国王の寵を失つた経緯を、リッターは或いは愚かしい行為、と見なすのでは、とラングレイ公は案じていた。リッターの判断基準は独特で、誰にも読めない。それでも、総合的にみて、ラングレイ公は、自分には決して持てない奔放さを好意的に思い、愛娘を嫁がせる事にしたのであるが。

（たしかに、アルフォンスは愚かで誤った選択をした、と儂にも思える）

諫言は立派な事であつたが、ユーリングダの婚約の経緯については、古い人間であるラングレイ公には、理解しかねた。バロック公が、息子を入り婿にやつてもよい、とまで言つてきた話を撥ね、娘が想いを寄せている、という理由だけで身内の者に縁づける、など、娘可愛さに盲目になつっていた、としか思えない。

女の幸せなど、所詮、嫁いでから決まる。バロック公の息子で、しかも心根優しい美男子でユーリングダにぞつこんであつたと評判の男に縁づける方が、実の兄を憎んで提訴するような男の息子にやるよりも、余程娘自身の為になつたに決まつている。アルフォンスは、もつと賢い男であると思つていたのに……。

だが、リッターは、未來の舅とは違う価値観を持つていた。

「アルフォンスのこれまでの、己を貫く行動は、私は評価します」
ラングレイ公の思いを見透かしたかのように、彼は言葉を継いだ。
己を貫く行動……その言葉に、ラングレイ公ははつとさせられた。
たとえ愚かしく見えようとも、信念を貫くことが何より肝要である
と思っていたのは自分の方であつた筈なのに、それを逆に指摘され、
ラングレイ公は虚をつかれた心持ちになつた。

「強者の言いなりにはならない……これこそ、風流を愛する者の行
い。そのような男が、美しい乙女を犠牲に呪殺、などという醜い行
為に走るとは、私には思えませぬよ」

「しかし、先にそなたは、証拠が重要だと言っておらなんだか？」

「確たる証拠ならば。ですが、カルシス卿の持つ証拠は、罪を決するには弱い。アルフォンスと話してみて、言動に不審がなければ、

私はかれを支持します」

「おお……そうか」

ラングレイ公の貌が綻んだ。意識していなかつたが、リッターのこの言葉を待っていたのだ、と自覚した。

「天は義に味方する。陛下もきっとわかつて下されよう！」

夜明けの光が薄灰色の筋となつて厚いカーテンの隙間から洩れ入つた。今日は天候が悪いらしい。僅かに意識を刺激されると、もうそれ以上寝台に横になつている気もせず、アトラウスは身を起こした。色々考えていて、殆ど眠つた記憶もないが、頭は冴え冴えしていた。

カーテンを押し開けると、外は薄暗く、ひたひたと小雨が降つている。

（ユーリイ、きみはまだ眠つているだろうか。昨日、ファルに殴られたと聞いたら、卒倒するかも知れないね）

唇の端が青黒く腫れぼつた。今日は会わない方がいいかも知れない。彼女は待ち侘びているだろうが、この顔では心痛の種を増やすだけだろう。だが、会つておかないと、残された時間は限られている……という思いもあった。

（ファル……あの手紙を読んで、僕を信じてくれるだろうか。君たちが僅かでも僕に疑念を持てば、僕の計画はうまくいかないかも知れない。だが、それでは困る。金獅子どもに君たちを渡しはしない絶対に彼らから護つてみせる）

アトラウスは、ルーン公の冤罪が晴らされる可能性は低いとみていた。父親が姿を消してから、家に籠もつてただ手をこまねいていた訳ではない。従僕らに情報を集めさせ、王都から様々な情報を得ていた。

平時より彼は、武力よりも情報が大事だと考えていた。いくら腕を磨き、武勇の者を集めたとしても、それ以上の軍に攻められればそれで終わりである。だが、情報を制していれば、少ない手勢でもいかようにしてでも勝機を掴める。穏和で争いごとを好み、周囲からはそう評価されているが、それは当たっているとは言えない、と本人は思っている。大切なものを護る為なら、いつでも争いの中

に身を投じる覚悟はあるし、そしてそうするからには必ず勝者とならねばならない、と決めている。平和の真綿にくるまれていたような頃から何年もかけて、彼は父親にも誰にも隠して自身の為の情報網を作り上げる事に尽力してきた。貴族の子弟など誰も出入りしないような街裏の区画にも足を踏み入れ、今では、まともな者からは忌まれるような怪しげな魔術師などにもつてを持っている。そういう行動をとる時、彼は、自身の黒髪と黒い瞳に皮肉な感謝の念を持つ。『聖女の血筋』でありながら、あかしの黃金色を持つていなし。この事が引き起こした幼少時の悲劇は、彼の魂の奥底に生涯癒えない傷をつけたというのに、そのおかげで隠密行動がとりやすい。町民のなりで街を歩くと、誰もルーン家の若君だとは思わない。ファルシスなどでは、目立ちすぎて到底同じ事は成し得なかつただろう。ともかくそういう訳で、彼はアルフォンスが知らなかつた情報を色々と手に入れていた。だが、伯父に忠告をする間もなく、事態は急速に進んでいた。ユーリングダが深夜に会いに来た時、彼女に告げた気持ちは本当だ。彼女に逃亡の生活など耐えられる筈がないし、自分と駆け落ちしてそんな暮らしをさせる訳にはいかないと思つた事。しかし同時に、彼女がこれまで通りの生活を続ける事が多分不可能で、悲劇が目前に迫つてゐる事も知つていて。ルーン公が有罪とされ死を賜つたら、彼女はどうなるだろう？ 聖炎の神子はアルマヴィラの宝であるが、ヴェルサリアの守護神ルルアの最高位の巫女でもある。大罪人の妻であるカレリングダの処遇は微妙なところだが、次期聖炎の神子であるユーリングダは、恐らく処刑される事はないだろう。だが、金獅子騎士団によつて、終生幽閉の身となり、後継者が出来れば彼女は闇に葬られる可能性が高い。勿論、アルフォンスの代わりにルーン公となるであらう父の一人息子である自分との婚約も破棄させられる。

そして自分はどうなるだらう？ 父がルーン公になる未来がある場合、それは、義母の父であるバロック公の力によるものである。バロック公が、無能なカルシスに力添えをする理由はひとつしかな

い。事実上ルーン家を配下に置き、近い将来に自分の孫、或いは曾孫をルーン公にする為。そして、その為には、自分はバロック公にとって邪魔者でしかない。いずれ、暗殺されるか、無実の罪を着せられて投獄されるか……。父親は勿論助けてはくれないだろう。

何もしなければ、自分とコーリングダの未来は、きっとそんな風になる。だが、そうはさせない……憎しみ、ただそれだけしか感じられない父親の思うようにはさせない。これは、父親に復讐する無二の機会でもあるのだ。

(コーリングダ……絶対に、僕は……。僕を信じて、待っていてくれ。例えきみの望むように未来を共に歩めないとしても、きみにとつて最上の未来を、きっと……)

「ダグ！」

朝食をとりおえたところでようやく、待ちかねたアルマヴィラ都警護隊長がファルシスの前に現れた。

「手短にお願い致しますぞ」

ダグ・ダリウスをファルシスの室へ通した金獅子騎士ウルブは素つ気なく言い、扉の向こうへ姿を消した。無論、会話を聞く構えであろう。昨日のアトラウスとの騒動で、監視がきつくなつたようだ。

「ダグ、よく来てくれた」

「御前に参るのが遅くなり、申し訳ない」

ダリウスは頭を下げた。この無骨な中年男は、元々身分もない傭兵で、その腕と勤勉さを買われ、今の地位を与えられた者だ。粗野なところはあるが、決して筋を曲げない氣概を持っている、とアルフォンスは高く評価していた。

アルマヴィラには、聖炎騎士団と都警護団というふたつの武装組織がある。

聖炎騎士団は、古き公国時代に國軍であつたものの流れを汲む由緒正しいもので、貴族の子弟を中心とする騎士の集団であり、ルーン公に剣を捧げているが、そのルーン公は国王へ剣を捧げているので、ルーン家の私兵ではなく、王国の騎士団として存在する。

一方、都警備団は、身分がなく騎士になれない戦士の集団で、没落した地方貴族や商人の三男四男などもいれば、流れ者の傭兵たちもいる。これは純粹にアルマヴィラの治安を維持する為の組織で、ルーン家に賄われる私兵集団である。

騎士団は警備団を下に見てはいるものの、挑発等は一切固く禁じられており、両者に表立った反目はなく、協力し合う立場である。

現在、聖炎騎士団も警備団も、アルマヴィラに駐留する金獅子騎士団の監視のもとに置かれている。数の上では当然、金獅子騎士団の

騎士に勝るが、彼らが反乱を起こすとは金獅子騎士たちはあまり考えていない。彼らの盟主ルーン公は既に金獅子騎士団の掌中にあるのだし、何よりそんな行動をとれば、王都から軍勢が送られ、裁判の結果を待つまでもなく、ルーン家はとり潰されるだけの話であるからだ。金獅子騎士たちは、ルーン家側の要人の監視に入手を割かれ、動搖が広がるアルマ・ヴィラ都民の抑制には、聖炎騎士団と警護団にあたらせている。無論、両団の上層には監視をついている。そのような状況下で、ダリウスが動き難い事は、ファルシスにもよく判っていた。だが、聖炎騎士団長のハーヴィス・ウイルムと違い、金獅子騎士たちはダリウスの事は、傭兵の隊長程度と侮っている。そこに、つけいる隙はある筈とファルシスは考えている。

「都民の様子はどうだ？」

「かなり混乱しているようです。まだ、暴動等に至る様子は見られませんが、今後の成り行きによつては、そういう可能性も考える必要があると思います」

むつりとした表情のまま、ダリウスは答えた。ファルシスは溜息をついた。

「父上はアルマ・ヴィラに於いては常に民のことを一に考えておられたというのに、あっけなく変わるものなのだな」

「仕方がありません。未曾有の事態ですから」

淡泊に感じられる警護隊長の応えだが、その奥には圧し殺した焦燥が感じ取れる。彼の仕事は、ルーン公の命により、都民を護る事だが、その都民がルーン家に危害を加えるような事態になれば……？　まさに、未曾有の事態である。

「都民たちは、父上の有罪を信じているのか？」

「それは、様々だと思います。多くの者は、未だ殿への信頼を捨てていません。しかし、カルシス卿単独ではなく、大神官も加わった告発であるという事が、民の心を迷わせています。皆、敬虔なルア信者ですから」

「そうか……」

確かにそれは大きい、とファルシスも思う。近い親類である大神官ダルシオン・ヴィーンは、かれをよく知るファルシスにとつては、一人の生身の人間であり、ヴィーン家の愚かな当主ノイリオンの弟という側面が大きいが、民の多くにとつては、国王に匹敵する程の雲の上の存在であるのだ。

「お耳に痛いかも知れないが、大神官の言葉はルルアの言葉であるのだから、国王の裁定など待たずともルーン公の有罪は確実、すぐにもルーン公邸に押し入ろう、という輩もいる、と配下の者が聞いてきました。カレリンダ様は聖炎の神子であるから、御身に危害が加わる事はないとは思いますが、若や姫君の安全については、とにかく最優先にお守りせねば、と思います」

「……。ぼくはいい。妹を、どうか、頼む」

ややかすれた声でファルシスは言った。ダリウスの言葉は、もやもやとした不安を凝縮した刃のようで、心臓を貫かれた心地がした。そういう危険が実際に迫ってきていたのだと、改めて突きつけられ、苦しかった。自分は自分の身を守る力を持つていて、暴徒などに殺されてしまうのなら、それだけの人間でしかなかつた、という事だ。だが、妹は？ 護られ、愛される事と愛する事しか知らない無力な妹が、暴徒に引き出されることなど、想像するだけで恐ろしく、総毛立つた。

「そうだ、アトラウスは？……実は、昨日、彼とはちょっとした喧嘩をしてしまったんだが、しかし、彼は母と妹を護ると言つていた。何か……知らないか？」

昨日のアトラウスのメッセージを不意に思い出し、ウルブが聞き耳を立てている事を意識しつつも、ファルシスは問うてみた。母と妹の身を案ずるのは当然の事で、この質問を聞かれてもまざい事はない。

「昨夜、街でお会いしました」

アトラウスの名を聞いたダリウスの声が僅かに上ずつた。金獅子

を気にしているのだな。」

「街で？」

構わない、といつよひに田で合図しながら、ファルシスは聞き返した。

「そう……街で、警護隊の本営で。様子を見に来られたのです」

「かれは、出歩いて危険はないのか？」

「アトラウス様は、カルシス卿のご子息ですし、金獅子騎士が護衛についています。それに、その……黄金色でない、という事もあって、害意を持つ者は殆どないと想います」

「そうか」

「殿もカルシス卿も不在で、若は軟禁の身。身分の上では今、アルマヴィラを統べる仮の領主、とも言える立場のお方です。金獅子騎士団の面々もそれを認めています。尤も、金獅子の意に背くような事は無論出来……なさいませんが」

「なるほど」

ダリウスはこの事を伝えに来たのだろう。思つたよりずっと、アトラウスは自由な動きがとれるらしい。

「ぼくの事を何か言つていたか？」

「若の機嫌を損ねてしまつたと……心ない事を言つてしまつたので、しばらく許してくれないだろ」と……しかし、もし若にお会いしたら、「自身の誠意を信じて欲しいと伝えてくれと、仰つていました」

「……そう簡単に許せるものか。あんな奴だとは思わなかつた。し

ばらく会いたくない、と伝えてくれ」

『金獅子どもには、僕と君の仲が決裂したように思わせた方が、動きがとりやすい』

あの文面を心でなぞりながら、ファルシスはむくれたように言いつつ、まなざしでダリウスに了承の意を伝えた。

「承知」

ダリウスは頷いたが、これはファルシスの言葉でなく意を汲み取つての合図だった。

「だが、アトラウス様と、早く仲直りなさつた方がよいかと
「放つておいてくれ。折角来てくれたのに済まないが。また、都の
様子を知らせに来てくれるな？」

「それは勿論。……では、これで」

ダリウスが扉を開けると、すぐそこにはウルブが立っていて、冷笑
を浮かべながら、お役目^{じめい}は苦勞でござるな、と嫌味っぽい言葉を投
げかけてきた。つまらぬ男だ、と思いながら、ダリウスは軽く頭を
下げて、室を後にした。

ダグ・ダリウスは、ファルシスのもとを辞したあと、まっすぐに警護隊の本喰に向かつた。予期していた通り、アトラウスの姿があつた。

「おはよう。ファルの所へ寄つたのかい？」

「は、アトラウス様」

「僕の言つた事は伝えてくれた？」

「はい。若は、その、しばらく会いたくないと……」

そう言いながら、僅かに首を振り、これはここに陰ながらある金獅子の耳に聞かせる為の言葉で、真意ではない、と田で伝える。アトラウスは理解したようだつた。

「そうか、まだ怒つてゐるのか。まあ、仕方ないな」
適當な相槌をうつて、

「他には？」

と促す。

「自分の事はいいから、姫様を護るよつて、と……」

「もちろん、彼女は僕が護る。そこのところは、もつと信頼してくれるよう、明日また話しておいておくれ」

「は、わかりました」

ダリウスは小さく頭をさげた。あるじは、取り立ててくれたルーン公。もとは傭兵の身ではあるが、忠信は揺るぎない。だがいまは、軟禁されて力のない嫡男ファルシスより、この『ブラック・ルーン』に従うしかない。ダリウスは単純な男であつたので、武芸の腕前をあまり披露しないこの公子を心中軽んじてきたが、この局面に来て、ファルシスの目を奪われる華麗な剣芸よりも、アトラウスの知能のほうが、生き残る上で重要なのだと思い知らされつづつあつた。

実際、今までアトラウスに心服していなかつた者の多くが、かれを頼りにしつつある。もしもアルフォンスがいなくなれば、ルーン

家はバロック家の傘下に入った上で、カルシスが当主となるである。だが、カルシスの短慮、無能は皆知り抜いている。穏やかな知性を備えたこの嫡男、黄金色もバロック家の加護も持たず、いざれは排斥されるとしても、いまは何より頼るべき存在と、たつた一日のうちに騎士や護士たちは、悟りつつあつたのだ。昨朝、謹慎を解かれてからの彼の行動は、目を瞠るものがあつた。騎士団や警護隊の本當を忙しくまわり、いつ暴動が起きてもおかしくはないほど不穏なアルマヴィラ都の治安を守る為に的確な指示を与え続けた。

金獅子騎士たちは、仮に暴動が起きれば、武力でそれを制圧するのみ、と考えている。民衆の暴動など、国王直属の騎士精銳をもつてあたれば、難なく鎮圧できる。

だが、アルマヴィラの騎士や警護士は、民衆とぶつかりたくない。その思いを同じくした上で、アトラウスは、暴動を止めるべく奔走した。まだルーン公の罪は確定した訳でなく、大神官ともども、何者かに陥れられている可能性が強い、だが、聰明な国王は恐らくすべてを明らかにし、罪ある者を裁くだろう。……そんな風に、噂を流布し、民衆をなだめたのだ。

「アトラウス様！ 面会を求める貴婦人がいらしております
警護士の一人が駆け寄り告げた。

「貴婦人？」

「それがしはこれで」

ダリウスは席を外そうとする。

「レディ・ローゼッタ・ドースがおみえです」

「……会おう」

ローゼッタはファルシスのかつての恋人で、アトラウスとは親しい仲ではない筈だ。ダリウスは好奇心を刺激されたが、アトラウスは領いて退出を許したので、その場に止まることはできなかつた。目立たぬような装いながらも柔らかな香水を纏つた令嬢の姿は、男臭くものものしい空氣の本當にはまるで似つかわしくなかつた。

すれ違いながらダリウスはなぜか、場違いなその存在に不吉な予感を覚えた。

ヴェルサリアの守護主神ルルアに仕える数多の神官の最高位、ルルア大神官に就いてから20年となるダルシオン・ヴィーン。聖都アルマヴィラのヴィーン家当主の次男として生まれ、3歳で正式に大神官の次期継承者としてみとめられた。他の殆どの神殿の大神官が、研鑽を積んだ大神官候補生の中から、実力と人望、家柄を鑑みて（多少の権謀はあるにせよ）選ばれるのに対して、ルルア大神官の位は代々、世襲に近いかたちがとられてきた。

アルマヴィラに於いて領主ルーン家と対をなすヴィーン家。その存在意義は、聖炎の神子とルルア大神官を輩出することにある。両者はルルアに祝福されたあかしの黄金色の髪とひとみを持ち、生まれながらに『ルルアの代行者』として魔力を行使する素因を持つている。だが聖炎の神子が聖都アルマヴィラを守護し象徴する存在であるのに対し、ルルア大神官はヴェルサリアの神職の頂点として国王にも進言できる権威をもつ。

世襲に近い形ではあるが、能力のない者が認められる事はない。ヴィーン家の直系に近い男子の中に、かならず素因を持つ者が生まれるのである。素因とは、魔力を先代より引き継ぐ事ができる器である。聖炎の神子の継承も同等で、歴代の聖炎の神子の殆どは、先代の娘である。現聖炎の神子のカレリングダの娘ユーリングダも、彼女の魔力を引き継ぐ器を持ち、次代聖炎の神子の資格を認められている。そのようにして、ヴィーン家はその歴史を紡いできた。

ダルシオンにはまだ後継者が決まっていない。大神官位について既に20年、本来なら、ヴィーン家の当主である兄ノイリオンが數人の子をなして、その中から後継が選ばれている筈であるのだが、ノイリオンが40歳にしてまだ独身であることが大きな問題だった。兄は凡庸で愚かな男だが、彼がした事で最も愚かな事が、カレリングダに対する執着である、とダルシオンは常々思っていた。ヴィー

ン家当主の務めである、一族の求める結婚をせずに、カレリングダに袖にされた後は、親子ほど歳の離れたその娘にまで求婚し、疎まれる始末。確かに、ノイリオンとカレリングダが結ばれる事は一族の総意にかなう事ではあつたが、カレリングダがルーン公妃となつてしまつたからには、さつさと他のヴィーン家の血をひく娘を娶るべきだつたのだ。候補に挙がつた娘は何人かいた。素因を持つ子を生める家柄で、気立てもよい娘たちだつた。だが、『光輝く聖炎の神子』と称されるカレリングダの美貌の前にはかすみ、ノイリオンは悉く縁談を断つてしまつた。

（莫迦が……妻など、よき子をなす為の存在だと、どうして割り切らぬ。他にいくらも、美しい側女を置く事もできよう）

そのように思うダルシオンである。大神官である彼は、生涯妻を娶る事もないし、女性と関係を持つ事も許されない。神子だが巫女でなく、世俗にあり女性としての幸福を許される聖炎の神子とは異なる立場なのだ。だが、そのさだめを辛いと思つた事はない。生涯をルルアに捧げる事がただひとつにして大いなる歓び。故にこそ、下らぬ恋情に流される兄を理解する気持ちは一片もなく、ただ愚かと断罪する心しかない。

そして彼は、アルフォンスとカレリングダもまた、同じ愚かなものと思っていた。一族の望まぬ婚姻を、ただ若氣の至りで成し遂げた。ルーン公、聖炎の神子とは思えぬ堕落である。

（あの婚姻。思えばあれこそが、不吉を招く初手であつた）

アルマヴィラに近づく不吉の予兆を感じ始めたのは、彼が大神官に就任して数年のことだつたか。カレリングダが双子を懷妊した頃と重なる。当時は、それと結びつけて考えることはなかつたが……。

不吉の予感は年を追うごとに高まつた。聖都の危機、そしてヴェルサリアの存亡に關わる騒乱……。もうすぐ、それは現実となる。防ぐ為には、まず、発端となるアルマヴィラの危機を回避せねばならない。その為には、アルフォンスがルーン公であつてはならぬ、と思つた。

(アルフォンスは、平時には、優れた領主かも知れぬ。だが、動乱のなか、不吉の極みのなかでは……)

そんな時には、アルフォンスの持つ公平性や情け深さは、大きな障害になる。聖都を護るには、多くの民の犠牲も厭わない、そんな冷徹さを持つた領主が必要である。

(ルルアの秘宝を護り、アルマヴィラを護る、その為なら、わたしは喜んでこの手を汚そう)

カルシスとノイリオン、愚かな従弟と兄の企てに乗ったのは、そんな志からだ。彼らは、ダルシオンを騙し、捏造した証拠を真と判定させたと思い、有頂天になっている。そうではなく、騙されてやつているのだ、とは誰にも告げなかつた。

彼らに加担するのは、アルフォンスを失脚させ、不吉な双子も排除し、危機を乗り切るために相応しいと見込んだ者をルーン公に据える為。それは、無論カルシスではない。

(アトラウス。そなたこそ……ルルアに選ばれし者。神託により、わたしあはそなたが間違ひなくカルシスの実子であり、あえて黄金色を持たずに出でたのもルルアの課した試練であると、初めから知っていた。それをカルシスに告げずとも、そなたは見事にその試練を乗り越えた。この事こそ、そなたがこの非常時にルーン公爵となる資格をルルアより得たあかしとわたしは信ずる。これより来る災厄に、共に立ち向かおうぞ……)

この事はまだ、アトラウスに告げてはいない。ユーリンダを愛する彼の反発を考え、慎重に機を選び話さなければ。いざれば、ユーリンダのいのちを盾にしてでも、彼に次期ルーン公となる事を了承させねばならないだらう。

午後になつて、ユーリングダのもとへ来客があつた。ローゼッタである。金獅子騎士は、母子の逃亡に万一にも手助けするような可能性のある人物の面会を許していなかつたが、貴族の令嬢でユーリングダの親友と名乗つたこの女性は、危険性はないと判断して館へ入る事を許可した。

「まあ、ローゼッタ！ 貴女が来て下さるなんて……」

「お氣の毒に、随分やつれましたのね、ユーリングダさま」

ローゼッタは便宜上、親友と名乗つたが、ふたりは特に親しい間柄ではない。

そもそも、ユーリングダは、親友と呼べる程の女友達を持つていなかつた。おつとりして、誰の事も悪く思わない性格だが、自分から進んで誰かに近づいて心を開く積極性がない。勿論、領主家の姫君であるから、彼女に近づき取り巻く小貴族の令嬢たちは多い。だが、ユーリングダは誰にでも愛想良く微笑んで過ごすばかりで、娘たちの好きなゴシップにもあまり興味を示さず、自分で話題を提供する機転も少ないので、単なる茶飲み友達はいても、今のような非常時に、彼女の身を心から案じて駆けつけてくれるような親友は作り辛かつたのだ。

そんなユーリングダを、ローゼッタは陰ながら気にかけていた。恋人のようであり弟のようであるファルシスの、大切な妹。彼女自身にとつても、妹のように思えた。しかし、奔放で恋多き女として知られる彼女と、世間知らずでうぶなユーリングダはあまりにかけ離れていて、社交の場で顔を合わせても、ろくに声をかける機会もなかつた。

ユーリングダの方は、ローゼッタを兄のかつての恋人と認識してはいたが、別れたという後も親しげな二人の関係を、まったく理解で

きすにいた。

「ファルシスさまもローゼッタどのも、おとなでいらっしゃるから」などと、茶飲み友達は噂の端にあげては、羨望と冷やかしを交えて話していたが、その意味がコーリンダにはわからない。恋をしてやがて離れ、また別の恋をする……そんな繰り返しが「おとな」であるなら、自分は一生おとなにはなれない。アトラウス以外の男性に恋するなどあり得ないし、もしもアトラウスとの恋が終わるような事があれば、それはもう一生かれと逢わない事を意味するし、自分は尼僧になるか、さもなければ死んでしまうかも知れない、と思つていた。

多くの恋の噂を持つ兄のその方面の気持ちについて、理解ができる事を、コーリンダは寂しく思つていた。幼い頃は、何もかもを分かち合つた双子であつたのに、ある時期から、兄は半身である彼女にも見せてくれない心の一部を持つようになつてしまつた。あれは、いつたいいくつの時だつたかしら？　何があつたのか、もう長い間思ひ起こす事もなかつた。一緒にいれば、今もいつも、優しく朗らかな兄だつた。でも、どうしてひとりの人を長く愛さないのか、今の恋人は本当に愛しているひとなのか、と聞く事はなぜか出来なかつた。柔らかな拒絕……それもたぶん、妹への思いやりなのだろうと、解つてはいたけれど。

ローゼッタは、彼女の知らない兄を知つている。ずっと、聞いてみたかつた。だが同時に、自覚はしていないけれど嫉妬の感情もある。聞きたいけれど聞くのが怖くて、妬ましくて、あえてこれまでローゼッタに近づく事をしなかつたのだった。

「ローゼッタ。あの……ありがとう、来て下さつて」「とりあえずそう言つたものの、コーリンダはまだこの訪問の意図を測りかねていた。ファルシスに会いに来たなら解るが、彼はこの館にはいない。それとも、彼がここにいると思って来たのだろうか？　そんな事を考えていると、ローゼッタの方から言つた。

「ユーリンダさま。わたくし、昨日ファルシスを訪ねましたの」「二人きりで話すのは、これが初めての機会である。領主家の姫君に敬語を使いながらも、兄を呼び捨てにしている事に違和感を覚え、思わずそれが顔に出てしまつた。

「ああ……わたくしとファルシスの事はご存知ですかね？ 若君に對して公の場ではこんな口はきけませんけど、でもわたくしは、ファルシスの事を弟のように大事に思つていますのよ。そして、ユーリンダさまの事も、失礼かも知れませんが、妹のように思つていています」

ローゼッタの言葉を、ユーリンダは素直に受け止めた。

「まあ、では私のこともどうぞ、ユーリンダ、とお呼びになつて。私、ずっと貴女とお話してみたいと思っていたの」

「あら、では、そうさせて頂きますわ、ユーリンダ。わたくし、遠慮は苦手な性分ですの」

ローゼッタは笑いながら言つた。そのおおらかさに触れて、ファルシスとの事を尋ねていいくのかとユーリンダは思案し始めたが、それを察してローゼッタは軽く牽制する。

「残念ながら今は、世間話をしている時間はありません。用件を申しますわ」

「ええ」

幾分慌ててユーリンダは応えた。確かに、そんな場合ではない。ローゼッタは辺りを窺つたが、姫君と令嬢の嘆きあいを探る金獅子は、今の段階ではいないようだつた。

「まず、第一の用件。わたくし、連絡役になりますわ。ファルシスのところにも、アトラウスさまのところにも、わたくしは伺えます。金獅子の前では、いまアルマヴィラを支える新しい実力者のアトラウスさまに媚びている女を演じていますが、そんな気持ちはない事はどうかお解り下さいませね」

「新しい実力者？」

聞き慣れない言葉に、思わず問い返す。

「そうですね。お父君は『』不在でファルシスも軟禁の身で、カルシス卿も不在。いま、アルマ・ヴィラで最大の力を持つルーン家の筆頭は、アトラウスさまですよ」

「アトラが……」

考えてもみなかつた事だが、言われてみればそうなのだとコーリンダは納得した。

「でも、大丈夫なのかしら。アトラは今まで、あまり表に立つてなかつたわ。嫌な事を言う人もいるし……アトラは、影の存在でいるのが楽だと言つていたわ。無理をしてないかしら?」

「コーリンダ……」

この率直な憂いに、ローゼッタは一瞬返答に詰まつた。アトラウスは、ローゼッタの見る限り、コーリンダが思つよつた世慣れない青年ではない。むしろこの危機にあつて、本人の意思には関わりなく、水を得た魚のように政治的な能力を發揮している。苦しい立場にいるのは自分の方なのに、ごく自然に許婚の身を案ずるコーリンダを、ローゼッタはいとおしく感じた。

「可愛い方ね。大丈夫、アトラウスさまは皆の信頼を集めつつあるわ

「ほ、ほんとうに?」

「もちろんよ。そして何よりもあなたの身を案じておられる。だから、そんな心配はなさらないで。それより、『』自分の事を考えて。万が一の場合、アトラウスさまは絶対にあなたの事を守つて下さる。だから、気持ちを強く持つて……」

「万が一?」

コーリンダの顔が曇る。

「あなたも、お父様が罪を犯したと思つてらつしゃるの、ローゼッタ?」

「まあ、そんな事ありません! お父君の事は、本当に昔から尊敬していますし、今も少しもそれは変わりません。お父君と叔父君を少しでも知つている者は、誰でもそう思つていますとも」

ローゼッタは語氣を強めた。ユーリンダを安心させる為であつて、本当は、誰でもがそう思つてはいるという自信はなかつた。だが、ユーリンダはそれを聞いて微笑んだ。

「だったら、万が一、なんて事はないわ。ルルアが誤つた導きをなさる筈がないもの。お父様は必ず無罪になるわ」

「そう……ですわね」

ローゼッタは、そう応えるしかなかつた。神がすべての者をその人にとって正しく導くのであれば、不遇のうちに世を去る者などひとりもいゝない筈だ。だが、善行を積んでも理不尽な運命のもとに命を散らす者は珍しくもない。無実の罪を着せられ刑死する者がいるとすれば、それもまたルルアの導きなのだ。だが、それでも大きな視点で見れば、ルルアはこの人の世の平安を護つて下さつているのだ……そんな風にローゼッタは思つていた。自分の都合のよいように神を解釈することなど、出来ない。

しかし、ユーリンダはそんな世の中の現実すら知らず、ルルアはすべての人を救う存在、という聖典の言葉をそのまま信じている。「みんな、ひどいわ。でもいざれみんなにも何が正しいかわかる筈。……今日、侍女が三人も暇乞いをしてきたのよ。金獅子騎士が、いまは誰も館を離れてはならない、と言つて却下したけれども。ただでさえ、一番頼りになる侍女がいなくて心細いのに」

ユーリンダの言葉で、ローゼッタはもうひとつ用件を思い出す。「そうでしたわ、貴女の侍女のリディア。彼女と親しい侍女と、帰りに少しお話してみたいんですけど」

ユーリンダは驚いた。

「どうしてローゼッタがリディアをご存知なの？」

「フルシスから色々話を聞く事があつて……彼女の失踪について、何かわかる事があつたら、と思つて」

「失踪？！」

ユーリンダは顔色を変えた。ローゼッタはしまつた、という表情になる。ユーリンダはリディアの失踪を知らなかつたのだ。

「も、申しありませんわ、驚かせて。てっきりご存知とばかり……」「知らないわ！ どうして、どういう事なの？ ファルから聞いたの？ どうしてファルはそんな事を知ってるの？」

ファルシスの想いを勝手に話してしまう訳にもいかず、ローゼッタは困惑した。だがその時、執事が扉を叩き、ティラール・バロックの来訪を告げた。

「わたくし、失礼しますわ。また明日にでも伺いますから」渡りに船とばかりにそそくさとローゼッタは立ち上がる。

「待つて……」

追いすがるユーリングダから逃れるように、ローゼッタは執事の脇をすり抜け、室を後にした。

廊下で、ローゼッタはティラールと鉢合せた。

「これは、レディ・ローゼッタ。ご機嫌麗しいかな」

女好きで社交家のティラールは、既にアルマ・ヴィラの主だつた貴族の令嬢を見知つてゐる。コーリンダへの執心とは関わりなく、ティラールにとつては、美しい娘を心にとめるのは「く自然な事なのだ。年上とはいへ、ローゼッタは美しく華やかで、アルマ・ヴィラの社交界では目立つ存在である。夜会で何度も親しく会話を交わしていた。

「御機嫌よう、ティラールさま」

貴婦人の礼をしたもの、ローゼッタの瞳には、これまでになかつた敵意がある。アルフォンス一家の窮状にバロック家が関与していることは解りきつてゐる。それなのに、よくも涼しい顔でコーリンダのもとへ通えるものだ……そつと思つて、怒りで胸がいっぱいになる。

その思いを感じたかどつか面にはまつたく出でず、ティラールはいつもの笑顔で言った。

「貴女のような方が傍にいらしたら、コーリンダ姫もややお心強いことでしょう。わたしからも、御礼申し上げます」

あまりに図々しいと思える言ひ草に、ローゼッタはつい、かつとなつた。

「ティラールさまから御礼など言われる筋合にはございませんわ。許婚のアトラウスさまから言われるならまだしも」

「おや、お怒りですか？ わたしはただ、姫の崇拜者として、レディのお見舞いが有難いと思つただけですよ。アトラウス卿と比べられても困ります」

「まあ。本当にまだユーリングダさまを想われてゐるなら、わたくしなどに礼を仰る前に、なされる事があるんじゅありませんの？ 宰

相閣下の「ご子息なのですか？」

この言葉には、さすがのティラールも少々気分を害した様子を見せた。

「わたしはしがない末っ子で、何の力もありません。だが、姫を励ます以上の働きはする所存ですよ」

「励ます以上の働き、とはどういった事ですか？」

「父へ、ルーン公への助力を頼む文を送りました。まあ、あの父がわたしなどの頼みをすんなり聞くとはあまり期待できませんが。しかし、もし姫がアトラウス卿との婚約を破棄してわたしの妻となつて下さるなら、姫の御身は救われる筈」

「……」

この男は、本当にばかなのか、それとも、ばかのふりをした狡猾な敵なのか、とローゼッタは思案した。ルーン公への助力を頼むなど、もし本当であれば、それはただバロック公を怒らす結果しか生まないだろう。アトラウスから、バロック公がカルシスを後押ししている事はほぼ間違いないという推測を聞いている。ティラールとユーリンダの婚姻も、こんな状況となつては、バロック公が許す筈もない。バロック公はルーン公と違い、計算高い政治家だ。ルーン公が罪ありとされば、大事な手駒のひとつである息子と大罪人の娘の結婚など、何の得もない。

しかし、たとえかでも、本当にユーリンダの味方になるつもりであるなら、彼には利用価値がある。何といっても宰相の息子という肩書きは大きな力を持つ。万が一の際、ユーリンダを逃がす時に力になるだろう。敵である可能性を頭に置いて、こちらの手の内を見せず利用する……そんな方策を、ローゼッタは練り始めた。

「解りましたわ。ティラールさまは、本当にユーリンダさまを想つておいでですのね」

ティラールの顔がぱつと明るくなる。

「解つて頂けましたか、レディ。レディは聰明なお方だ。ユーリンダ姫に初めて会ったあの日から、わたしはただ姫の虜。わたしの身

がどうなると、命ある限りわたしは姫に頑べす所存です。どうかその事を、レディからも、姫にお伝え頂きたい」

「お言葉はしつかり伝えますわ。きっとコーリンダさまもお喜びになりますよ。ティラールさま、わたくし、コーリンダさまとの橋渡しの為に、お館に伺つてもよろしいでしょつか？」

ティラールは、ここから程近い来賓館にずっと滞在している。

「勿論、レディ、美しい令嬢の訪問はいつでもこのティラールは歓迎します」

真摯な眼でそう言われても、ローゼッタは辟易するばかりであったが、それは面には出さず、礼を言い、訪問を約して別れた。

それから、侍女頭を呼んで、リディアと近い侍女に会つて話をしたが、手がかりらしきものは得られなかつた。

やや疲れを感じてローゼッタは家路についた。ドース家の領地と本館は遠いが、このアルマヴィラ都の別邸は馬車で程近くにある。父や兄は領地にいる方が長いが、ローゼッタは必要な時以外は本館に帰らず、アルマヴィラ都に屈ついて別邸の主のようになつていた。しかし、いまのこの危急の際、父も兄もアルマヴィラ都に詰めている。

「ローゼッタ！ ディをつるつこていたんだ？」

玄関ホールに入るなり、頭上から兄の声がした。一階から兄のラングドが足早に下りてきた。

「まあ、」挨拶ですわね、兄様。ドース家の為に駆けずり回つてますのに

「何がドース家の為だ。おとなしくしていろと言つたの」

「ルーンの方々に怪しまれず近づける立場ですのに、おとなしくなどしていらっしゃません」

「お前の振るまいが、万一我が家を危つくなつたら、いつたいどうするつもりなのだ」

兄はローゼッタと違ひ慎重な性格である。これまでアルフォンス

を敬愛していたが、もしアルフォンスが失脚するなら、次の領主につくのが当たり前と思っている。愛妻と、三人の子供がいる。保身を第一に考えるのは、ローゼッタとは真逆だが、それも仕方のない事、と彼女は理解している。

「わたくしがもしも危うい事になつたら、どうぞお捨て置き下さい。女ひとりのした事としらを切れば良いだけですわ。わたくし自身はどうなつても構いません。でも、もしルーン公が無罪になれば、その時はきっと、ドース家に運が来ますわ」

実現の可能性の低い餌をちらつかせたが、兄の表情は変わらない。ローゼッタは、周囲の小貴族、特にその息子たちに、既に色々と根回しをしている。短い期間、恋人であつた者も何人かいる。嫌な別れ方をしていないので、皆、彼女の話を聞いてくれる。彼らも、そして父も、アルフォンスに恩義を感じていて、王家に反旗を掲げる事はなくとも、陰ながらその一家を逃すことには概ね同意してくれている。なのに、このドース家の跡取りである兄だけは、頑なに王家の裁定に従おうと主張している。

「とにかく、余計な事はするな。女は家に引っ込んでいれば良いのだ」

「わたくしは、コーリンダさまをお慰めに行つていただけです」「無用だ。ファルシスさまにもコーリンダさまにもこれ以上近づくな」

「聞けません。父上にも禁じられていませんわ」

ターランドは舌打ちした。

「父上も愚かな。アルフォンスさまに肩入れして何になる。もう終わつたのだ」

「何を仰るの。まだ裁きはこれから……」

兄は眼をぎらつかせてローゼッタを見据えた。

「もう終わっているのだ。流れを変える事はできない。我らのよくな小貴族は、ただその流れを受け入れる事しかできないのだ」「……兄様？」

「とにかく、女の浅知恵で動くんじゃない。いいが、ドース家を危機に陥れるような真似をすれば、お前を斬り捨てるからな」

そう言つと、兄は背を向けた。

(どうしたの……兄様)

ローゼッタの知る兄は、小心ではあっても、冷酷ではなかつた筈だ。兄の変貌に戸惑いつつも、その指示を聞くつもりは、彼女にはなかつた。

「お母様、お母様！」

ユーリンダは母親の私室を訪れていた。

ティラールの訪問は、父親に文を送った報告と、昨日と同様の励ましが目的であったので、時間的には長くなかった。リディアの事が気になつて、彼にも助力を願おうか、とも考えたが、さすがに宰相の息子に自分の侍女を捜して欲しいと頼むのは図々しいし、この都の客人である彼には調べようもない事だろう、と思つて、それは思いどどまつていた。

「どうしたのですか、ユーリンダ」

カレリンダは自ら扉を開き、娘を中へ入れた。文机の上に、書きかけの書状がのつている。

「ごめんなさい。お邪魔をしてしまつた？」

「いいえ、お祖母さまへの文を書いていただけです。そんなに慌ててどうしたの？」

お祖母さま、とは、カレリンダの母で前聖炎の神子であったウイランダ・ヴィーンのことである。ウイランダは夫に先立たれ、いまは、領内の宗教都市オイランで隠遁生活を送つてゐる。オイランは、見習い巫女や神官と、年老いて神殿の勤めから退いた巫女、神官が暮らす街。そこで、ウイランダはルルアへ祈りを捧げながら静かに時を送つていた。カレリンダは年に一、三度母親を訪ねていたが、ユーリンダはもう三年くらい祖母に会つていなかつた。いつも柔軟な笑みで迎えてくれる祖母が、ユーリンダは大好きだ。アトラウスと一人でラーランドのヴィーン家の長老への挨拶を済ませた後、次に祖母のもとへ訪れる予定だつた。それを楽しみに過ぎていていた頃が、何だかとても昔のこととに思えた。

だが今は、とにかく母に言いたい事があつた。

「リディアが……リディアが失踪したのですって。どうしたのでし

よう？ お母様、わたし、心配で

「リディアが？」

カレリンダは驚いたようだつた。

「それはいつたい、誰から聞いたの？」

「ローゼッタよ。私を励ましに来ててくれたの」

「ローゼッタ？」

カレリンダは僅かに眉をひそめた。表立つて疎んじる」ではないが、カレリンダにとつてローゼッタは、噂を聞く限り、息子を籠絡して遊びを教えた女である。好ましく思える筈はなかつた。自身は堅かつたアルフォンスが、妻を娶るまでは好きにさせておいてもよいと鷹揚に構えていたので、口を出した事はなかつたが、内心では、浮き名を流す息子に苛立ちを覚えてもいた。

「あなた、ローゼッタと親しかつたの？」

「いいえ。でも、ファルの事を弟のように思つていて、私の事も妹のように思える、と言つてくれたわ」

「……」

カレリンダは、治まらない頭痛で僅かの間にすっかり癖になつてしまつた、右手をこめかみに当てる仕草をした。単純で、その分影響も受けやすいこの娘が、ローゼッタのような「ふしだらな」人間と親しくなるのは、母親としてなるべく避けさせたい状態だ。が、今の状況では、味方になつてくれる希少な人物を選り好みなどしてはいられない。ローゼッタが本気で味方になつてくれるのかどうかは、彼女のうわべしか知らない自分には判断のつけようがないが、ファルシスが信用しているのなら、とりあえず歓迎すべきなのだろう。

「それで、リディアが失踪した、という話はどういう事なの？」

「詳しくはわからないの。ローゼッタは急いで帰つてしまつて……

明日また来ると言つてはいたけど

「ローゼッタはいつたい誰からそんな事を聞いたんでしよう？」

「それは勿論、ファルに聞いたのだと思つわ

「そう……」

カレリングダは暫し考え込んだ。リディアが館を出たのは、確か攫われた娘たちの亡骸が見つかったのと同じ頃だつた筈だ。失踪がいつからかは分からぬが、少なくとも、殺された娘たちの中にリディアがいたという話は聞いていない。殺害が明るみになつた後に彼女がいなくなつたのであるなら、事件の被害者にはなつていなければ。カルシスは王都へ向かつていたのだし、協力者がまだこの地方にいるとしても、ユーリングダの侍女をわざわざ連れ去る利はない筈だ。

「もし本当なら、リディアは自分の意志でどこかに隠れているのではないかしら？」

「どうして？」

一番考え方やすい理由は、ユーリングダの傍仕えという危険な立場に戾りたくない、というものだ。だが、リディアがそんな性格でない事くらい、長年彼女をみているカレリングダにはよく判つている。それ以外に考えられるのは、もつと個人的な理由だろう。結婚を控えて実家に戻つたりティア。花婿と年齢は離れているが、彼女にとっては良縁だつた筈だ。彼女自身も喜んでいたと聞いている。だったら……。

「まさか……」

ふとカレリングダは思い当たつた。あの事を知つてしまつた？ それで身を引いて？ いや、しかし、失踪までする事はない筈だ……。

「どうしたの、お母様。何かご存じなの？」

「いいえ、何でもない。わたくしにも解らないわ……」

「お母様！ 隠さないでちゃんと教えて頂戴！」

「隠すなんて。本当にわたくしは……」

ユーリングダは母親の手をとつて決意を込めた瞳で顔を見上げた。

「お父様もお母様も、私に何にも話して下さらない。私を子供扱いして。ファルにだつて、何かを秘密にしていて、それで怒らせたのでしょうか？」

「ファルに？」

カレリングダはびっくりして娘を見返した。

「何の事なの？ ファルがあなたに何か言ったの？」

「お父様やお母様は、ルーン家の為なら誰かを不幸にしても構わないんだ、って言つてたわ。ルーン家の世継ぎとしての自分だけが必要なんだ、とも。でも、そんな事はないわよね？」

「勿論ですとも……！」

息子からそんな風に思われていたと知つて、カレリングダは胸の奥を突き刺されるような痛みをおぼえた。

「ルーン家を護ることは、何よりも大切なことではあるけれど、そのためにあなたやファルや他の誰かを不幸にしてもいいなんて、思つていません。時には、皆が望むようにはできない事もあるでしょう。でも、皆が幸福でいられるよう……最上と思える手だてを、お父様もわたくしも、いつも考えてきました。そう、あなたの結婚の事だつて、ルーン家のことだけを考えれば、ティラールどのを迎えてバロック家と縁戚の絆を強めていた方がよかつたに決まっているのよ。でも、あなたの意思を尊重して、お父様はあなたとアトラの婚約をお許しになつた」

「でも、叔父様が罪を犯したのなら、結婚は許さない、と言つたじゃない」

「いくらあなたの気持ちがあつても、みすみす不幸になると判つている縁組を許す親はいません。あなたもいつか判る筈」

「アトラと結婚して不幸になんかなる訳ないわ」

「あなたは若くて世間知らずで、何も解つていない。罪人の息子として貴族の位を剥奪されるような者の妻になれば、今とはかけ離れた暮らしになつて、あなたにそれが耐えられる訳がないでしよう。

第一、あなたは聖炎の神子の後継者。世間が許す筈もありません。

……でも、どちらにしても、今はそんな事を議論しても仕方がないわ。あなたの行く末は、お父様の裁判の結果ですべて決まるのだか

ら

その言葉にコーリンダは自分の置かれた状況を思い出し、泣きそうになつた。そうだ、最早両親の意思に関わらず、アトラと結ばれないかも知れない……。

「アトラと結婚できなかつたら、私、死ぬわ！」

「コーリンダ！」

娘の言葉に、カレリンダはかつとなり、自分を抑えられなかつた。コーリンダの頬が激しく鳴つた。

「いい加減にしなさい！ お父様もわたくしも、どれだけ、あなたの事を、考えて、大事に、そして……」

カレリンダの貌が真っ赤に染まり、堰を切つて溢れた激情が身体を激しく震わせた。今ほど、愛娘の愚かさが許せないと思った事はなかつた。今の窮状はだれのせいなのか、おまえの我が儘のせいなのだ、と娘を罵りたくなつた。半分はハツ当たりだが、心のどこかにそんな思いがあつた、という事だ。それでも、こんな事態になつて、自分はどうなつてもいいからどうにかしてコーリンダだけは助けたい、そればかりを考え続けているのに、その命を簡単に投げ出すような言葉は、絶対に許せなかつた。娘を罵る事は寸前で思い止まつたが、涙が溢れ、言葉がでてこない。

コーリンダは暫し呆然として母親を見つめていた。こんなに取り乱した母の姿を見たのは生まれて初めてだつた。いつも冷静沈着で、穏やかで優美な母……自慢の母。その母が、まるで普通の人のように、喚いて泣いている。普段のコーリンダであれば、無論、母の身を心配し、母を安心させるような言葉をかけて慰め、傍についていただろう。

だが、いまのコーリンダは、アトラとの結婚が不幸と決めつけられた事への反発、アトラと引き離される恐怖心、そればかりにとらわれていた。聖炎の神子の後継者だから許されない？ それではやはり、兄の言った事は本当だつたのだ。両親は、聖炎の神子の後継者としての自分が必要なだけなのだ。コーリンダの愚かしい若さは、

そんな風にしか物事を捉えられなかつた。従順で心優しいばかりの娘が、生まれて初めて、そして最後の、母親への反抗をした。痛む頬を抑え、ユーリングダは母親を睨みつけた。

「私はお母様の言いなりにはならない！　お母様なんか嫌い！」
「ユーリングダ！！」

カレーリンダは驚いて娘の袖を掴もうとしたが、ユーリングダはその手を振り払つた。今の母は、今まで尊敬して愛してきた母親じゃない。初めて芽生えた親に対する大きな負の感情に、ユーリングダは殆ど恍惚状態にすらあつた。およそ貴婦人らしからぬ大きな足音を立ててユーリングダは部屋を出て行つた。

カレーリンダは床に伏して泣き崩れていた。その泣き声が背中に追い縋るよう微かに聞こえたが、ユーリングダは振り向かなかつた。控えの間の侍女は目をそらして俯いている。

この出来事は、ユーリングダを生涯苦しめることとなつた。

「アトラウスさま、わたくし、ティラール卿のお館に伺えることになつたんですよ」

ほう、という顔でアトラウスはローゼッタを見返した。警護隊の本営の一室。何の飾りもなく、粗末な木のテーブルと椅子が置かれているだけだ。ローゼッタは椅子に座り、アトラウスはテーブルに腰を預けて忙しく資料に目を通していた。

「いつたいどこでティラール卿に会つたんですか？」

「ユーリンダさまを励ましに伺つた折にです。ティラール卿はユーリンダさまの為に、バロック公ヘルーン公殿下への助力を願つたそうです。どう思われます？」

アトラウスは軽く首を左右に振つた。

「信用しろという方が無理な話だ。あの男は、最初から今の事態を引き起こすきっかけを作る為に送り込まれてきたんだ。他に何を言つてましたか？」

「ユーリンダさまが自分の妻になれば、救われる筈だと……」

やや躊躇いがちにローゼッタは言つたが、アトラウスの表情は搖るがなかつた。

「出来る筈がない。もし本当にそれでユーリンダが今のままの生活を送れるのなら、ぼくは喜んで身をひくが、バロック公がそんな事を許す筈がない」

「わたくしもそう思います。ですが、もしティラール卿が本心でそう思つているのなら、利用価値があるのでは？」

「そうだな……仮につまらない罠だとしても、騙されて付き合つてやつている振りをして損はない。口の軽い男だから、奴らの思惑を掴む手がかりになるかも知れない。ローゼッタ嬢、あの男に近づいて情報を得る事に、協力して下さいますか？ 或いは、危険があるかも知れないが……」

アトラウスは書類を置いて姿勢を正し、ローゼッタの目を見た。

理知的な漆黒の瞳を、情熱的な大きな黒い瞳はしっかりと受け止めた。深い、深い、闇色の瞳は、僅かな黄金の光を纏っているようにローゼッタには思えた。

「勿論、わたくしがお役に立てる事なら、何でもやりますわ。危険？ むしろやりがいがあつて嬉しいくらい……」

その時、室外に足音がした。はっとしたローゼッタを、アトラウスは素早く抱き締め、驚く間もなく唇を重ねた。

（あ……）

柔らかい感触と伝わる熱に、ほんの瞬のこと、ローゼッタは陶然と酔い痴れた。そんな場合ではないのに、そんな気持ちもないのに、男慣れしているのに……。

ばたんと扉が開かれた。

「む、こ、これは失礼」

慌てて目を反らし、身を引いたのは、金獅子騎士の一人だった。

「いや、構いませんよ」

ぼうっとしているローゼッタを優しく離し、アトラウスは悠然と笑つた。

「じゃあローゼッタ、いま言つたことを忘れないでおくれよ。明日も差し入れを期待しているからね」

「え、ええ……」

赤くなつた顔を伏せ、金獅子騎士に一礼してローゼッタは出て行つた。

「アトラウス卿も隅に置けませんな。許嫁がおありの身で……それの方は、ファルシス卿の恋人だとか……」

からかうように金獅子騎士は言つたが、探るような響きが含まれているのをアトラウスは聞き逃さなかつた。

「ユーリンダとの婚約は、終わつたも同然ですよ。それにファルシス……年下の従弟にいつも上に立たれて、いつか見返したい気があつたのかな？ ファルシスの為に動いていた彼女を自分に惹き寄せ

たのは良い気分ですよ」

脣の端でアトラウスは冷たく笑つてみせた。

「まったく、ばかな女だ」

本當の外へ出て、明るい陽射しに目を細めながら、ローゼッタは軽く溜息をついた。勿論、さっきのは芝居だと判つてゐる。ファルシスとアトラウス、ふたりを天秤にかける愚かな尻軽女の振りをして、連絡役を務める、と言い出したのは自分なのだから。

だが、眞面目一邊倒の男だと思っていたアトラウスが、あんなにキスが上手いなんて思いもしなかつたことだ。

（駄目駄目、いまはそんな事に氣を奪われている場合じゃないわ）
そう思えば思つほど、穏やかで不思議なひとみが頭から離れなくなつてしまつ。

（まったく、わたくしつたら、本当にばかな女ね。アトラウスさまはコーリンダさまのものよ）

自分に言い聞かせて、うん、と自分で頷き、ローゼッタは元気な足取りで馬車寄せに向かつて歩いて行つた。

ローゼッタがティラールの滞在する館を訪ねた時、彼は不在だつた。これは、物陰に馬車を停めさせて、ティラールが愛馬に跨り出て行くのを待つてから行動を起こした、必然の結果である。

応対に出た従者のザハド・ジークスは困惑顔で、美しく着飾つたこの令嬢を暫し見つめた。

ルーン公が連行される以前は、社交家のティラールの元を訪れるレディは後を絶たなかつた。ヨーリンダへの愛を公言しているとはいえ彼女は許婚のある身、もしもティラールの心を奪うことが出来れば、バロック家の子息の妻となれるかも知れない、という大きな夢を持つて、である。またティラールは瀟洒な美男子で雅で優しく、出自を差し引いても、彼自身に惹かれる娘も多かつた。ヨーリンダの男性の好みが世間と一致するとは限らない、という訳である。

しかしこの戒厳令下も同然の状況で、娘をバロック家に近づけようとする小貴族の父親はいなかつた。事件の真相は未だ闇の中だが、多少でも田端の利く者であれば、バロック公の後ろ盾なくして、カルシスが国王へ直訴など出来る筈もない事くらいは判る。事件にバロック家が関わっていると推察される以上、その真意が露わになるまで無闇に近づく事に不安を感じるのは、大した力もない地方の小貴族たちとしては当然の保身といえる。アルフォンスの家族へ助力をする事へ同意しているローゼッタの父親も、彼女が今からしようとしている事を知れば、卒倒するに違ひない。

「若是只今外出中で、いつ戻られるか判りません。また、わたくしも今から所用で出かけなければならないのです。レディのお相手を出来る者がありませんので、本日は……」

引き取りを求める言葉に、ローゼッタの心は、尚更好都合と弾み、言った。

「いつでもお訪ねしてよいと、ティラールさまが仰ったのですわ。お構いなく、お出かけになつて結構よ。わたくし、客間にティラールさまのお帰りを待たせて頂きます」

「しかし、レディをお一人でお待たせするなど、わたくしが若に叱られます」

「それは、お叱りないよう、わたくしがお話致しますわ。わたくし、早くティラールさまにお会いしたいんですの。出直すよりここで待つていた方が良いわ」

「ですが……」

渋るザハドを強引に説き伏せ、ローゼッタは客間に通される事に成功した。小間使いの少女がお茶を運んでくる。

「お退屈でございましょう」

「いいえ、お庭や調度を眺めてありますわ。どうぞお構いなく」

「では……」用の折は、奥に先程の小間使いがありますので「

そう言つと、ザハドは一礼して下がつていった。湯気のたつ紅茶はなかなかの高級品で、その香りを楽しんだりと、玄関の方で音がして、ザハドが出かけて行つたのが判つた。紅茶に口をつけ、暫く様子を窺つたが、邸内は静まり返つてゐる。

ローゼッタは、静かに扉を開けて廊下へ出た。二階建てのやや年季の入つた煉瓦造りの館である。客間は勿論のこと、廊下に飾られた絵画や美術品も值打ちもので、眺めていると田の肥やしになる。ルーン家の賓客用の館は他にも新しく大きな建物があるのだが、男二人の身軽な旅であるから、とティラールは、ルーン公のそちらの使用の勧めを辞退して、そしてもう半年程もこの館に居座り続けてゐる。最初は、廊下の絵画を鑑賞しているような素振りをしながら、辺りに人の気配がない事を確認し、ローゼッタはスカートを絡げると、素早く階段を駆け上がつた。

一階には、ティラールとザハドの居室がある筈だ。ローゼッタはそこを探るつもりでいる。

一番立派な、ティラールの居室と思われる扉を押してみた。鍵がかかっている。溜息をついてローゼッタは次の間の扉を押した。扉は音もなく開いた。ザハドは急いでいた様子だったので、鍵をかけ忘れたのだろう。胸を躍らせながらローゼッタはするりと部屋に入り込んだ。

従者の部屋らしく簡素なあつらえだが、室内は広く、しつかりした寝台と机、テーブルと椅子などがカーテンの隙間から入る陽の光に照らし出されている。壁には作りつけのクロゼットもある。ローゼッタは机の方へ歩み寄った。

一番上の引き出しには鍵がかかっていた。二番目の引き出しをあけると、バロック家の紋章入りの細々した品がいくつか入っていた。何かの褒美に拝領したものなのだろう。三番目の引き出しには書状の束が入っていた。ローゼッタは急いでそれをつかみだした。滞在費に関するものなど、どうでもよい書類が多かつたが、その中から、バロック家の紋章の封蝋がなされた手紙の束を見つけた。勿論、封は既にとかれている。ローゼッタはどきどきしながら一番上の手紙を開いた。

『ティラールに、おのれの役割をまつとうするように、そなたからしつかり言い聞かせよ。ルーンの娘を籠絡する第一の役を失敗した以上、それにいつまでも拘らず、早く次の目的にかかるのだ。アルフォンスの一家は、聖炎の神子は当面生かしておくが、息子と娘は処分する決定は変わらぬ。ゆえに……』

ローゼッタの手が震えた。やはり、バロック公はファルシスとユーリングダを処刑もしくは暗殺するつもりなのだ。

（どうしよう……どうすれば……）

予想はできていた事とはいえ、直筆の書状にはっきりと書かれているのを見た衝撃は大きい。更に読み進めようとしたその時、室外で物音がした。

（もう帰ってきた！）

ローゼッタは狼狽した。こんなに早く帰ってくるなんて。足音は

複数だつた。ティラールとザハドだらうか？　ティラールの室へ行つてくれれば……。

だが、願い空しく、足音はティラールの居室の前を通り過ぎ、この部屋へ向かつてくる。ローゼッタはクロゼットを開け、中へ飛び込んだ。中からクロゼットの扉を閉めるのと同時に、部屋の扉が開いた。引き出しが閉めたが、書状の束はローゼッタが握んだままだ。「早く入れ。客間には客人がいるんだ。静かにしろ」

ザハドの声がした。もう一人はティラールではないらしい。

「へい、だんな様」

下卑た男の声だ。聞き覚えはない。扉の隙間から覗いてみたかたが、見つかればどうなるか分からぬ。ローゼッタは息を詰めて男物の外套の間にじっと立つていた。

がちやりと鍵を回す音がした。机の一一番上の引き出しを開けたのだ。もし、下の引き出しも開けられたら……ローゼッタの背中に汗がにじみ出す。

「約束の分だ。とれ」

「ありがとう」「ゼえます」

じゅらりといふ音と、嬉しそうな男の声。どうやら鍵のかかつた引き出しには、金袋が入つていていたらしい。いつたい、身分の低そうな男に命じて、何をやらせているのだろうか？

「引き続き、しつかり見張るのだぞ。女だからと侮つて逃がしたりしたらおまえの命はないと思え」

「そ、それはもう、わかつております。確かに、気の強い女で、昨日も飯の時に逃げだそうと致しまして、しつかり打ち据えやした。それでも泣きもしゃがらず、さすがにルーンの姫さまの侍女というのは、その辺の町の女とは違ひやすくな」

（姫さまの侍女、ですつて？！）

ローゼッタは思わず言葉に息を呑む。

「貴様、まさか女に手をつけたりはしていないだらうな？　少々痛めつけるのは構わんが、絶対にそれはするなど……」

「も、もちろん、もちろん、わかつておりやす！ 若さまの気に入りの女に儂なんかが先に手をつけたり出来る筈がないでやす！」

「わかつているならいい。じゃあ、もう行け。裏口からだ、小間使いに見られんよう、俺が先に出る」

そう言つと、ザハドは部屋の戸を開けた。一人が階段を降りていく足音にまずはほつと胸をなで下ろしながら、ローゼッタはクロゼットを出た。書状を全部持ち去りたかったが、そんな事をすればすぐになくなってしまうだろう。でも、一枚くらいなら、暫く気づかないかも知れない。気づいても、紛失したと思うかも知れない。そう考えを巡らせたローゼッタは、先の一枚の書状だけを胸元にしまい込み、束は引き出しに戻してそつと室を出た。

大急ぎで客間に戻つてソファに腰を下ろしたのと同時に、玄関の方からティラールの声が聞こえた。

「レティ・ローゼッタ。お待たせして申し訳ありません」

澄んだ緑色の瞳に誠実な光を浮かべてティラールはローゼッタの手に軽くくちづけた。茶色のなめし革のマントを従者に預け、最新のデザインの青いびろうどニクを纏つた彼は、相変わらずなかなかの男ぶりだった。

「い、いいえ、無理を言って待たせてもらつたのですわ。どうぞ従者の方をお叱りにならないで下さいませ」

そう言いながらも、ローゼッタの頭は、今得た情報を整理することができいっぱいだった。

とにかく、はつきりしたのは、やはりティラール・バロックは、愚かな恋の虜の振りをした強かな間者だという事だ。バロック公の命を受けて送り込まれ、邪な目的でユーリンダに近づいたのだ。

しかしさか、ユーリンダの侍女を誘拐したのが彼の手先だとは。ファルシスの想い人と知つての事だろうか？ それとも単にローン家の情報を引き出す為に？ ザハドは、彼女が女性的な辱めを受ける事を気にかけていた。ただの情報を得る為の道具であるなら、そんな心配をする筈はない。だが、このティラールの気に入りの女、という言葉も鵜呑みには出来ない。ティラールは洗練された貴婦人好みで有名だし、ファルシスから聞いた話では、侍女は美しくはあるが格別に人目を惹き付ける容姿ではなく、控えめな娘という事だ。ティラールが危険を冒しても拉致する程に惚れ込むとはとても思えない。それに、もしもそういう目的で攫つたのであれば、とっくにそれを果たしている筈であろう。やはり、ファルシスを脅迫する為の道具だろうか？ しかし、今更そんな必要があるだろうか？（訳がわからないわ……早くアトラウスさまにこの事をお伝えして、意味を考えてもらおう）

「レティ？ どうなさいました？ あまりにお待たせして、御不興

でしょうか？」

心ここにあらずなローゼッタを、心配そうにティラールが覗き込む。

「美しい」婦人のお貌を曇らせてしまつのは、大変に心苦しい事です

「いえ、申し訳ありません、何でもありませんわ。ちょっとと考え事をしていたのです。ファルシスさまやコーリンダさまが心配で……」「それは無論、わたしも大変胸を痛めております。実は今は、ユーリンダ姫への差し入れの品を調達に行つてましたのですが。ファルシス卿にもいづれ見舞いに伺わねばなりませんな」

（まあ、いけしゃあしゃあと言うものだわ）

ローゼッタは、微笑を浮かべて頷きながらも、敵意をもつてティラールを見返した。ティラールの方は、ローゼッタがやや警戒しているとは感じるものの、絶対的な敵意を持たれているとまでは思っていない。

「先に申し上げた通り、万が一の際は、姫をわたしの妻にして……名目上でも何でもよろしいから、それで保護致そうと思つております。しかし、もしどうしても父がそれを許さないのであれば、そして姫の御身に危険が及ぶようであれば、わたしは姫を連れて逃げるつもりです」

「まあ、お父君のお怒りをかつてでもですか」

「勿論です。姫のお役に立たないのであれば、バロックの名など、喜んで投げ捨てましょ」

「まあ……そこまで、ユーリンダさまのことを」

ティラールの瞳はまだ強い決意のみを湛えていて、ローゼッタは、先程の冒險をしていなければこれで完全にこの男を信用していただろう、と思つた。

「もしもその際には、わたくしもお手伝いさせて下さるませ」

「お願いできますか」

ティラールは嬉しそうにローゼッタを見た。

「勿論、その為にこちちら伺つたのですから」

「もしその時は、レディには暫く姫の身代わりを務めて頂いて、囮になつてもらいたい。勿論、わたしが無理矢理脅して荷担させた事としてレディにお咎めが及ばぬよう、必ず後から申し入れを致しますから」

ローゼッタはちょっと考えて、

「わたくしに出来る事なら何だつて致しますわ。わたくしの身など、大した価値もないものですもの。……ただ、そんな大役がわたくしに務まるかしら？　わたくし、コーリンダさまとはまだお近づきになつて間がないものですから……わたくしより、コーリンダさまをよく知る腹心の侍女などの方がよいのではないでしょうか？」

ローゼッタは、うまく鎌をかけたと思ったが、ティラールは残念そうに首を振つた。

「侍女など、信用できません。いざとなれば、命惜しげに逃げ出しか、買収されて何もかも喋つてしまふかも知れません。やはり無理なお願いですね……お忘れ下さい」

ティラールはローゼッタが尻込みしたと悟つたようだつた。ローゼッタは慌てて、

「いいえ、仰る通りですわね。わたくしにティラールさまがそれほどに信を置いて下さるのでしたら、わたくし、出来る限りの事をやりますわ」

「どうかご無理なさりぬよう」

「大丈夫、わたくし、度胸はありますのよ

「それはそうだ」

ティラールはぐすりと笑つて、

「こんな折に、姫を励ましたり、わたしを訪ねたりなさる女性は、貴女だけのようだから」

「そうですわ。お任せになつて。きっと、お逃がしするにあたつて、手柄をたてますわ。……ああ、でも勿論、そんな事にならなければ一番良いのですけれど」

「そうだ。あのルーン公が、あの優れたお方が、愚かしく厭わしい罪に手を染めるなど、わたしにはとても思えない。国王陛下が良き裁判をなさつて、公が無事にお帰りになれば、こんな話は一切なかつた事になる」

「それはでも、ティラールさまにとつては、コーリンダさまを手にお入れになる機会を奪つてしまつ事になりますわね」

「何を仰る」

ローゼッタが驚くほど、ティラールは怒りを露わにした。

「姫のご友人とも思えぬお言葉。どうぞ訂正なさい。わたしは確かに姫を妻にと願つてやまないが、姫が望まぬ事はすべてわたしの望まぬ事。わたしは涙に暮れた姫を見るくらいなら、アトラウス卿と幸福に暮らす姫を柱の陰からみる方がずっとましなのだ」

形の上では否定しても、本心が窺えるかも知れないと思つて言つたことだつたが、ローゼッタの思惑は見事に外れた。どう見ても、ティラールは偽りを語つているようではない。愚か者どころか完璧な演技だとローゼッタは身を固くし、

「申し訳ございません。ティラールさまの余りに純粹なお気持ちに打たれて、つい、迂闊な事を申してしまいました。もちろん、本心ではございません。わたくしもルーン公殿下を大変に敬愛しておりますし、無実を確信しておりますわ。でも、それとは関わりなく、こんなに真摯にティラールさまに想つて頂けるコーリンダさまが少し羨ましくなつて、下らぬ事を言つてしまつたのです。どうかお許し下さいませ」

ティラールはその言葉を聞くと頷き、

「ルーン公の疑いが晴れ、そして姫がアトラウス卿よりもわたしをお認め下さつて、天下の祝福の下、姫と夫婦になる事がわたしの一番の望みなのです。どうかお解り下さい」

と半ば自分に言い聞かせるように言つた。

束の間、ローゼッタはそんな未来を想像してみた。コーリンダがティラールと結ばれて……そうしたらアトラウスは？ 恋心とはう

つるうもの、もしも幼い頃から固く結ばれていたふたりの気持ちが離れてしまつて、そんなことになつたなら？ そうしたら、アトラウスは、あの不思議な瞳は、どんな女性をみつめるのだろうか……。（ばかね、そんな未来が来る訳ないわ。この男はバロック公の手先なのだし、あんなに一途なアトラウスさまとコーリンダさまが離れる筈もない。ルーン公殿下が無事にお帰りになつて、そしてアトラウスさまとコーリンダさまの盛大な結婚式が行われる。それが最高の未来、それを祈つているのよ）

そうなつたら、ティラールもすゞしく国へ帰るしかないだろう。柱の陰からふたりの晴れ姿眺めるティラールを想像したら、ローゼッタの張りつめた気持ちも僅かにほぐれた。

再訪を約してローゼッタは館を後にした。向かう先は、アトラウスのいる本舗である。

ローゼッタの馬車が遠ざかつてゆくのを、一階の白壁の窓からザハドは眺めていた。

それから、机の三番目引き出しを開けて書状の束を出し、中を確認してから鍵付きの引き出しに入れ直した。

椅子の上に投げ出していた外套をしまつ為にクロゼットを開けると、ほんの微かに香水の匂いが鼻腔をついた。ザハドの口元を、冷たい微笑が通り抜けた。

「アトラウスさま、これをご覧になつて」
ローゼッタの黒い瞳は一仕事をやり遂げた誇らしさに輝いており、
薔薇色の頬と唇がその光を際だたせ、なかなかに美しかつた。懷か
ら取り出したのは、無論ザハドの部屋からとつてきた書状である。
書状を出そと白らの白い手を差し入れたローゼッタの豊かな胸元
を、興味のなさそうな目でちらりと見てから、アトラウスは書状を
受け取つた。

「悪い知らせですね。でも、あちらの考えが判つた事は……」

「ローゼッタ嬢。この書状をどうやって手に入れたのですか？」

ローゼッタは、ティラールの館でやつてのけた冒険と、耳にした
会話、ティラールとのやりとりも、包み隠さず話した。勿論、この
奥まつた部屋から人は遠ざけてある。前の一件により、金獅子も二
人に近づく事は遠慮している様子である。

ふう、とアトラウスは溜息をついた。

「困つた方だ……そんな危ない事を。あの従者に見つかっていたら、
どうなつたと思うのです？ あれは、危険な男ですよ」

「見つからなかつたんだから、それで良いじゃないですの」

「良くなどありません。それに、そんな事をしてまで折角手に入れ
て下さつたのですが……」

アトラウスは申し訳なさげに目を伏せた。

「この書状は偽物です」

「えつ？」

「このバロック公の刻印は、本物と違つ。ぼくは父の書斎で何度も
見た事があるから判る」

「そ、そんな……」

ローゼッタは戸惑う。

「だいたい、こんな大事な書状を、鍵のかからない引き出しにしま

う程、あの男は迂闊ではない。これは恐らく、貴女に対する罷じよう

「罷、ですって」

「ええ、貴女に、そしてぼくに対する」

「でも、どうして？ 何の為に？」

「それははつきりとは判らないが、ぼくらが慌てて一人を逃がす方策を立てるのを待っているのかも知れない。ティラールの作戦も勿論罷。ファルとヨーリイに助力しようとする者をまとめて葬る算段かも知れません」

「そんな事が……」

「王命に背いてヨーリンダの身柄をどこかへ移そうとしたとなれば、ぼくを廃嫡する充分な理由になる。そういう狙いかも知れない」

「……」

「勿論、たとえ廃嫡されようとも、彼女の身を守る誓いに変わりはないが、奴らの思惑通りにはなりたくない。事は慎重に運ばないといけませんよ」

ローゼッタは泣きたくなつた。あんなに頑張ったのに、ただバロツク側の掌の上で踊つていただけなんて。彼女の表情が暗くなつたのに気づいたアトラウスは、声を和らげた。

「でも、本当に貴女の勇気と真心には感謝します。ヨーリンダの侍女の件は、まったく予想していなかつた事だし、これも何かの罷だとしても、彼らが関わっている事を知れたのは立派な成果ですよ」

「そうでしょうか……」

頃垂れているローゼッタに、アトラウスは静かに近づいた。

「貴女には、何か御礼をしなければいけない」

ローゼッタは驚いて顔をあげた。

「とんでもありませんわ。わたくしがやりたくてやつた事。心から、ルーン家の皆様のお力になりたくてしたのです。御礼なんていりません」

「いや、もしも伯父が無事に帰つたら、ドース家の忠心はぼくから

わつと強くお伝えしましょ」

「……え、ええ」

ローゼッタはただそつとしか答えられなかつた。

（わたくしはいま、何を期待していたのだろう……）

アトラウスの言葉は、‘じく当たり前の事だ。

「それとも」

アトラウスは何でもないよくな調子で言葉を継いだ。

「何か他の御礼の方がいいでしょうか?」

「他の御礼?」

おうむ返しにローゼッタは問ひ返す。

「そうですね……たとえば、こんなことだ。貴女の唇はもう味わつたし、とても美味だつた。今度は、貴女の他のところを味わいたい……という言葉は?」

ローゼッタはかつと赤くなり、そして唇をかんでアトラウスを見上げた。座っている彼女の上に身をかがめて、ゆっくりとアトラウスは近づいてくる。

「あれは、#花居だった筈ですわ」

「では、どうしてそんなに息を荒くしているんですか?」

そう言つて、アトラウスはかみしめたローゼッタの歯を舌で押し開き、柔らかな舌を軽く吸つた。

「ああ、やめて、やめて下さい」

ローゼッタは真つ赤になつてアトラウスの手を振りほどいた。

「今度は金獅子はいませんわ。何の為にこんなことをなさるの。あなたがそんな不実な方とは思いもしませんでした」

「貴女を愛してしまつたから……」

「……!」

その台詞に、ローゼッタは喜びと失望を同時に覚えた。彼女が惹かれかけていたのは、許嫁をひたむきに愛する一途な男だ。穏やかで常に理性的な男だ。それが、許嫁の身が危ないといつのに、こんなに簡単に他の女に手を出すよつな、つまらない男だったなんて。

でも、それでも、どこかで抑えきれない幸福を感じてもいた。しかし、次の瞬間、その幸福を男は奪い去った。

「などと、言つとも思いましたか？」

「……えつ？」

「いろいろと表情を変えるローゼッタを前に、アトラウスは終始無表情だった。

「ぼくの心は常にコーリンダだけのもの。他の女性の入る隙間はありません」

「で、ではなぜ。わたくしをからかつたんですね！ こんなに努力しましたのに、こんな、こんな侮辱を受けるなんて…」

悔し涙があふれ出した。

「からかつた訳ではない。本気ですよ」

「どういう事ですの！ わたくしを売女と思つてらつしやるの。そういうのね。多少尊されているからつて、わたくし、愛してもいい方に身をまかせたりしませんわ。気晴らしの相手なら、街でお探し下さいな。それだつて、コーリンダさまには酷い裏切りでしょうけれども……」

「貴女が誰にでも身をまかせる女だなんて思つていませんよ。そんな女に利用価値はない」

「利用価値ですか？」

「ぼくは誠実な男だから、ありのままに気持ちを話すとしよう。つまりぼくは、コーリンダの為に、ありとあらゆるものを利用したい。その中に、貴女も入つていいのです」

「言われなくとも、わたくしは何でもすると言つていいでしょう…」

「では、ぼくに抱かれなさい」

灯火の陰になり、アトラウスの表情はよくみえない。ただ、その顔色はいつもより幾分蒼ざめているようにも思えた。

「ぼくは不幸な生い立ちでね、そうそう簡単に人を信じる事ができないんですよ。でも、ぼくを愛して、ぼくに抱かれた女なら、きっと命をかけてぼくに向かってくれるだろう、と思えるのです。解り

ましたか？」

「……コーリンダさまの為に？」

「そう」

「わたくしを愛してはいないのに？」

「そう」

「忠実な道具にする為に、わたくしを抱くと仰るのね？」

「そう。……どうしますか？勿論、ぼくは貴女に快樂を『え』てあげられる。多分、経験豊富な貴女も味わつた事のないようなものをね。それから、どうしてもお望みなら、愛している振りをしてあげてもいい。むろん、コーリンダのいないところだけでだけれど」

「こんなこと、コーリンダさまへの裏切りだとは思わないの。彼女はあんなに純粋にあなたのこと……」

「彼女への思いという至上のもの前には、こんなことはどうでもいい事だ。但し、彼女を救う役には立つ。彼女は永遠の聖女だから、こんなことに心を煩わせる事はない。何も知らないのだから」「わたくしが、言つかも知れないわ」

「貴女は言わない」

「わたくし、コーリンダさまを憎んで、裏切るかも知れないわ」

ローゼッタは泣いていた。こんなにこんなに苦しい気持ちは初めてだった。

「貴女は裏切らない。貴女はそういう女だから。それを解つてから、この取引を持ちかけた……貴女は、ぼくとコーリンダとファルシスの為に、そのいのちを投げ出しても全くどうとするだろ？」「ひどい……なんてひどいひとなの……」

「でも、ぼくを愛しているだろ？？」

違つ、と叫びたかった。憎い、と罵りたかった。でも、できなかつた。かれの、いうとおりだつたから。

こんな愛し方があるなんて、知らなかつた。愛とは、心地よいものだと思つていたし、ファルシスにもそう教えた。なのに、今はただ、苦しい。それでも、それでもいいから、かれのものになりたい、

と望んでこる自分が、ローゼッタにはやは狂氣のひとのよつに思えた。

「もしそうでないといふな」

アトラウスは冷たい声で囁いた。

「もう一度と言つことはない。もう来なくていい。領地に帰つて、どこかの男と暮らしなさい」

「待つて……」

子供のように泣きじゃくりながら、ローゼッタはアトラウスの裾を摑んだ。もう引き返せない、と感じながら。

「言つ通りにする。なんでもするから……帰れなんて言わないで……」

…

初めて、アトラウスは表情を和らげた。

「そう……可愛いひとだ」

「ひどいひと……」

アトラウスは、ローゼッタの豊かなみずみずしい躰を、軽々と抱き上げた。優男だと思っていたのに、こんなに力があつたのかとローゼッタはぼんやり驚いた。

「正直に言つけど

「……まだ、なにがあるの」

「愛してはいけないけど、貴女に興味はある、ローゼッタ。ぼくは滅多に他人に興味をもつことはない」

その言葉は、ローゼッタの女としての最後の矜持を打ち碎いた。（もう……抗うこととはできない……）

安い媚薬のように悪く酔わせるその言葉に縋り付く女を、アトラウスは奥の仮眠室へと運んで行つた。

母親との口論の後、自室へ駆け戻ったコーリングダは寝台に伏して泣き、まだ夕方だというのに、寝不足も手伝つていつしか眠り込んでいた。

いま彼女に訪れているのは、幸福な夢だつた。なんの翳りもない。黄金の陽の光を一身に受け、ただ周囲の愛情だけを感じながら過ごしていた日々。それも特に際立つて無邪氣で明るかつた、幼い日々。彼女は、父と兄とともに、叔父の館を訪ねていた。そう、まだ兄も彼女も四歳だった。お揃いの白いレースのついた上品な絹のブラウスを着せられたふたりは、紺のびろうどのスカートとズボンの違ひがなければ他人には区別がつかないくらい似ていた。会つたことのないいとこと遊べるかも知れないと言われ、うきうきしていた。うつすらと白い雲の浮かぶ青空を眺め、兄とふざけ合いながら、馬車に揺られて着いた。

「それでは、やはり彼女には会えないのかね。それから、アトラウスにも」

今よりずっと若い父の声。

「会わせられないと言つただろう。誰にも会わせてはいかんと医師から言われているんだ。何回来ても無駄だ」

苛立つたような叔父の声。幼いコーリングダは、叔父がなぜ機嫌が悪いのかわからなくて、不思議そうに叔父の顔を見上げた。

叔父のカルシス。ルーン一族のしるし、黄金の髪と瞳を持った、父アルフォンスとよく似た人物。父よりも背が低く、目は父と違ひ一重で、唇はやや厚ぼつたく、頬は父よりも丸みを帯びていたが、全体として、一目で兄弟と判るくらい、一人の容姿は似ている。顔の造作だけをとれば、アルフォンスが美男子といわれるなら、弟に

もその権利があつてよいようだつた。だが、カルシスには、何かが欠けていた。アルフォンスに出会つた人が皆まず一番に感じる、気品と知性。神は不公平にも、兄のほうにしかそれを与えなかつたのだ。或いは、それは後天的な努力によつて得ることも出来たのかも知れなかつたが、それを得ようとする意志も、カルシスは持たなかつた。ただただ、なぜいつも兄の方にばかり人が集まり、賞賛するのか、妬み嫉みに満ちた目でじつとりと見つめ、兄が嫡子であり自分が次男に生まれたせいだけ思いつめ、自らの普段の振る舞いを顧みたり反省したりする事は一切せずに、兄を羨み憎みながら生きてきた。

アルフォンスの方は、この出来の悪い弟を、それでも兄として愛情を持つて接し、何か持つてゐる筈であるよい性質を引き出してやろうと常に気にかけていた。カレリンダとの恋愛により、心苦しく思いながら一族の決めた婚約者と別れた後、彼女を弟に託したのも、彼女と弟、ともに彼にとつて大切な存在であつたからだ。彼女、ルーン一族の娘、おとなしく善良なシルヴィアも、もとはアルフォンスに恋していた乙女であるが、その恋が破れたあと、よく似た弟に嫁ぐ事に頬を染めて了承した。世間知らずの少女は、うわべだけよく似た笑顔が中身も伴うものと思い込んでしまつたのだ。

結婚生活は、暫くは順調だつた。狭量なカルシスが、何を言つても従順で優しい妻に対して徐々に心を開いていつた。それとともに心栄えもよくなり、これならば色々と弟に任せても大丈夫だし、彼女も幸福になつて良かつたと、アルフォンスは随分喜んだものだつた。

だが、彼女の出産を機に、すべてが変わつてしまつた。カルシスは以前よりずっと怒りっぽく陰鬱な性格になつた。ひどく虚弱で知能も低い子供が生まれ、シルヴィアも大量の出血をして起き上がりない身体になつてしまつたという事だつた。アルフォンス夫妻は心配でいてもたつてもいられず、あちこちから名医を呼び寄せたり、ひとめ母子に会わせて欲しいと願つたりしたが、カルシスは一切受

け入れようとはしなかつた。愛妻の身体を心配する様子もなく、深酒をし、町で乱闘騒ぎを起こす事もしばしばだった。

「こうして何もできないまま五年が過ぎたある日、アルフォンス夫婦はふと、四つの可愛いさかりの我が子たちは、五つになっている筈の甥の遊び相手になれるのではないかと考え、カルシスの館に連れて行つた、という訳である。

「いくら身体が弱いとは言つても、部屋に閉じこもつたままではないだろ。アトラウスを子供たちと仲良くさせてやつてはどうかね。言葉が喋れなくても、楽しいと感じる事はできるだろ?」

「お節介はやめてくれ。シルヴィアもアトラウスも、どうにもならん。静かに部屋にいるのが一番いいんだ。あなたの子供たちが、あんたに似て素晴らしい出来栄えのはわかってるよ、兄さん。俺のがきはどくにもならないんだ。どうかこれ以上、俺を惨めな気分にさせるのはやめてくれ」

「しかし、少なくともシルヴィアはまだ若いのだし、もう少し回復する手立てがあるのでないかね。色んな医師の意見を聞いた方がいい。アトラウスも、色々刺激を与えた方が……」

「玩具はたくさん与えているし、不自由はさせていない。あんな惨めながきを人前に出せと、どうしてそんな非情なことが言えるのか? さすが徳の高い公爵さまの仰る事は違うね」

「そういうつもりでは……」

父と叔父の口論は、今までにも見聞きした事はあったが、幼い子どもにはただいたたまれないだけだった。ヨーリンダは泣きべそをかきながら兄の袖を引いた。ファルシスは妹の頭を撫でながら言った。

「父さま、ぼくたち、あそこのお庭で遊んできてもいいですか?」

庭園を指差して言うと、アルフォンスは頷き、カルシスは不機嫌そうに、花を傷つけるな、と言つた。ファルシスは、勿論気をつけます、と答えて、妹の手を引いて大人たちから離れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0024w/>

炎獄の娘

2011年11月20日03時29分発行